
世界最強の航空機動部隊

橘花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界最強の航空機動部隊

【Nコード】

N1123T

【作者名】

橘花

【あらすじ】

20XX年、中国の巨大化における脅威に日本は脅かされていた。そんな中、日本は空母打撃群の編成計画が上った。そして、計画されていた世界初のイージスシステム搭載原子力航空母艦を極秘裏に建造した。だが、空母打撃群が編成し終え、試験航海も兼ねて日本海に行っている所を台風に直撃され、なんと昭和17年のミッドウェー海域に来てしまったのだ。そこで、歴史を変えるべく艦長の指示で連合艦隊に独立航空機動部隊として編入され、太平洋戦争に参戦する。

現在は中国戦線も書いております。

プロローグ

20XX年

―東京 防衛省―

「最近の中国の行動。彼らは我々が何も出来ないのを良い事に沖縄近海まで顔を出すようになってしまっている。これによって、日本の防衛力について世界が疑問を抱き始めている。」

「総理、ですから私が昔から言っている空母の建造を行い、日本初の空母打撃群を編成すべきです。」

「しかしな、我が国に近代空母の建造ノウハウは存在しないのだ。」

「それなのですが、アメリカから実は密伝がありまして。」

「なに？言ってみろ。」

「は、実は今度退役するエンタープライズを我が国に無償提供をしてくれると言っているのです。」

「あの、世界初の原子力空母の？」

総理は防衛大臣に確認の意味を込めて言う

「はい。これは我が国にとって最高のチャンスです。これを機に、日本の建造力の高さを世界に再アピールすることができるのです。」

日本の建造技術の高さは今日まで変わっていなかった。あの世界最大の戦艦大和級を建造した時から日本の建艦技術の高さを世界に知らしめたあの時から。

「では、その空母を受け取ったら技術を解析を行い、建造を行います。」

「しかし、護衛の艦艇も建造せねばならんぞ。」

「イージスシステムを空母に搭載し、その周りにもイージス艦を配置すれば十分です。」

防衛大臣は書類を見て

「あたご型を4隻と、新造イージス艦を4隻あれば十分です。」

「しかし、あたご型は2隻しかおらんぞ。新造するなら予算確保も現在は難しいし。」

「これもアメリカからなのですが、ヴィンセンスとトーマス・S・ゲイツ、ヨークタウンとタイコンデロガ。を提供すると言っているんですよ。」

「では、それを改装すれば新造イージス艦の予算は浮くな。あとはあたご型を2隻揃えれば完成する。」

「はい。総理にもこの計画を理解していただきありがとうございます。」

2013年 エンタープライズとタイコンデロガ級4隻を日本は譲り受ける。

2014年 エンタープライズの技術解析が終了し、2013年から建造して船体の一部が出来上がっている空母にその技術を取り入れて本格的に建造がスタートした。

人物&兵器紹介（前書き）

随時更新します。

2011年、6月10日。東郷の艦性能を大幅に改善しました。勝手ながら申し訳ありません。

2011年 10月12日、新たにF19を追加しました。

人物&兵器紹介

空母 東郷

基準排水量 12万6000t

満排水量 14万3000t

カタパルト 蒸気式8基（建造時で、後に電磁式へ換装）

全長 356m

最大全幅 102m

機関 原子炉6基

発電力 45万kW

速力 39ノット

搭載機 レシプロ艦載機230機（現在の日本に艦載機が無かったため、搭載できなかった。）とヘリ10〜20機

武装 巡航ミサイル発射機 4連装4基

ミサイルVLS64+32セル 4基（スタンダードミサイル改（通常より追尾能力が高い） アスロック対潜ミサイル）

対艦ミサイル 8連装2基

20ミリCIWS 4基

日本初の世界初イージスシステム搭載原子力航空母艦。新型イージスシステム搭載で同時追尾が280の目標を追尾できる。建造したのは良いが、日本に艦載機が無いという不運な艦となってしまったが、タイムスリップしたことでその問題が消えた。艦橋を中央に配置し、その周りに武装を装備している。アングルドデッキを左右逆で繋げた様な飛行甲板であり、同時発艦性能を高めた前代未聞の新戦略型原子力空母である。6軸推進で、舵も2つ付けられており、もし片方が遣られても、もう片方が生きていれば旋回性能は下がるが旋回可能である。日本では珍しい攻撃力を重視した艦でもある

18式戦車

全長 10.72m

全幅 3.58m

全高 2.35m

自重 約48t

速度 時速75km

武装 140mm44口径滑空砲

12. 7 mm M806改重機関銃（砲塔上部）

7. 7 mm機関銃（主砲同軸）

装甲 複合装甲と増加装甲

陸上自衛隊が2018年に正式採用した国産5代目の主力戦車。旧式になりはじめた90式戦車の代わりとして生産を始めた。日本防衛計画の一環として前防衛大臣が提唱した新国防計画に沿って進められ、ドイツが試作した140ミリ滑空砲を国内技術にてコピーし、装備した。M806もアメリカから輸入し、幾らかの改良を加えてコピーした。何故か、オリジナルよりも高性能。

15式連装高角機関砲（自走高射機関砲）

武装 40 mm連装高射機関砲

有効射程 4.8 km（対空連射弾）

2 km（対戦車高速弾）

発射速度 630発／分（一門あたり）

初速 1200 m／秒

87式自走高射機関砲が旧式化しだし、音速機のパフォーマンスがなされ始めたので、新型自走高射機関砲を開発する必要性が出てきた。そこで、90式戦車の車体を流用して実戦配備された新型自走高射機関砲。音速機を捉え、撃墜することが可能なため、第二次大戦の機体は蚊を落とすよりも簡単に撃墜できる。第二次大戦の戦車なら、

それなりに破壊する事も可能。

21式戦車

武装 レールガン

速度 120? (整地 履帯無し。) 106? (不整地 履帯無し)

90? (整地 履帯在り) 72? (不整地 履帯在り)

重量 35t

水戸の提供した彼らの世界の戦車。レールガンなどの未来兵器を搭載しており、装甲もゼネラルミックスと呼ばれる特殊な材質で出来た装甲で、防御力と攻撃力、機動力が揃った走攻守整った戦車。一台につき、小型の原子力発電機が1基備えられており、移動からレールガンによる砲撃まで、全てを賄える電力を供給する。

F19 艦上戦闘機

乗員 1名 (無人戦闘機型の為、実質は0)

全長 19.22m

全幅 14.37m

速度 2300?/h

航続距離 5000km (増漕なし)

武装 28式8連装25mmバルカン砲（毎分7200発） 52

パイロン 8つ（5000?まで武装可能）

水戸が空母と共に持ってきた艦上戦闘機。戦闘機と言いつつも対地対艦攻撃を十分に熟せる、マルチロール機としても機能する。初期の反重力エンジンの理論とディードライブを改造したエンジンを掛け合わせて製作されたエンジンを搭載。これを元に、北里等が性能コピーを計画・実行中。

林原誠

階級 海将補

役職 東郷艦長兼第一空母打撃群司令

海上自衛隊の幹部の一人で、東郷の艦長兼第一空母打撃群司令官。海上自衛隊始まって以来の秀才と言われており、とても考えられないような作戦でミッドウェー海戦に出撃していたアメリカ空母を無力化した。

尾上靖男

階級 一佐

役職 東郷副長

東郷の副長で、普段はC I Cにて戦闘指揮を執ることが多い。江田原程ではないが、太平洋戦争の歴史にある程度は詳しい。祖父は元海軍で戦艦扶桑の砲撃手だった。

江田原義久

階級 二佐

役職 東郷航海長

東郷の航海長で、太平洋戦争の歴史にも詳しい。父親が氣象庁勤務であり、天候を読む力に優れている。

西澤大作

役職 日本国総理大臣

経済学と政治学を学び、長年続いてきた不況を一気に好況へと変えた総理大臣。自衛隊の太平洋戦争参戦を最初は疑問視したが、北里の説得を受けて参戦を承認。極秘の元に自衛隊を太平洋戦争下の日本へと送り出した。

北里信幸

役職 日本国防衛大臣

日本防衛機構と中国の巨大化を見て国土防衛の弱さを危険視した先代防衛大臣に後を任された。彼自身も日本国産空母建造推進者の一人。日本第一空母打撃群が太平洋戦争下の日本へ加わることを知っ

た時に素早い対応をし、総理を説得して太平洋戦争下の日本へ自衛隊を送った。現在は中国との戦争で指揮を執っている。

永見栄司

役職 日本国エネルギー省大臣

前総理から引き継いで西澤内閣へ新たな省、エネルギー省大臣として入閣。予算を惜しみなくつぎ込み、新エネルギー開拓と藻類プラントを造るなど、先を見通した視野を持っている。無資源国日本にとって、居なくてはならない重要人物。

真清

役職 日の本軍需省大臣兼時空管理省調査員

異次元世界の未来の日本から来た使者。西澤等には水戸と名乗っている。数々の未来技術から未来兵器まで提供する人物。正体は日の本軍需省大臣で、緋巫女の側近の一人。緋巫女からの信頼は厚いが、行き過ぎてしまう事もしばしば。兵器提供の内容を一任され、兵器提供の用意を整え始めた。

緋巫女

役職 日の本第137代天皇

異次元世界の未来の日本を治める天皇。この世界では、まだ天皇主権な事から彼女が国家最高責任者。年齢は16歳と若いが、7歳から国家最高責任者になっていた為、それなりの修羅場は潜り抜けて

いる。国内の安全と別次元の同国の安全を考えるが、戦争による民
の死を幾多も見るといふ辛い過去から、独自の平和視点まで持つて
いる。

過去へ

2021年 日本初であり、世界初のイージス原子力航空母艦『東郷』完成。日露戦争の英雄である東郷平八郎から取られた艦名は日本の再軍備を象徴するかのような名であった。だが、この空母は極秘裏に建造され、洋上にて船体をくっ付け、横須賀に停泊している。ただ、残念なのが現在の日本に艦載機が存在しないという点だった。

「ここに、国民にもアメリカに艦艇だと思われるでしょう。」

先代から話を聞かされていた新防衛大臣は完成した東郷を見る。

「これが、日本初であり、世界初のイージス原子力空母。」

防衛大臣もその船体の巨大さには圧倒される。現在、これを越す軍艦は世界の何処にも存在しない。アメリカが建造したジェネラル・R・フォード級よりも巨大であり、再び世界最強の海軍国の名が日本に戻った感じが防衛大臣はしていた。

「これはこれは防衛大臣殿。今日はどうしたんですか？」

来たのは東郷の艦長である林原誠海将補である。はやしばあこと通常、艦長職には一佐が就くものだが、東郷は日本艦隊全ての旗艦と言っても誤りではなく、一佐だけに任せられないため、海将補が艦長に就く事になった。

「今日は君に移動場所を伝えに来た。実は、最近中国が日本海方面にも現れ始めてな。それで、君の艦隊にそちらに移動してほしいんだ。丁度、試験航海も必要なだろう。」

「分かりました。搭載機がヘリ10機だけでは心許ないですが、やってみましょう。」

正直、林原も艦載機がほしかったのだ。空母は艦載機があつて初めてその能力が生かされる。艦載機の無い空母はただの的でしかないのだ。

—日本海—

「ようやく着いたか。」

国民の目を避けてここに移動したため、来るのに1ヶ月近くも掛かってしまった。

「艦長、大陸から台風が接近しているそうですが。」

航海長の江田原義久^{えだわら よしひさ}二佐は林原に報告する。

「分かった。大丈夫だとは思いますが、注意するように伝えろ。」

「了解。」

しかし、台風は予想以上のスピードだった。あの会話から5時間後、艦隊は台風の中に突入。

「凄い波です。船体が持つかどうか。」

「大丈夫だ。こんな波、東郷にとって海岸の波程度だ。」

波に乗り上げたりしながら、艦隊は前進する。しかし、不意に一瞬目の前が真っ白になった感じがした。

「艦長、一瞬目の前が真っ白になりませんでした?」

「航海長も感じたかね?」

2時間後、台風から抜けるとそこは。

「か、艦長!! 日本が!! 日本が消えました!!!。」

「な!?! どういう事だ!? 日本が沈むはずがないぞ。」

しかし、日本の方角を見るが、その日本が消えている。

「どういう事だ? 航海長、現在位置は分かるか?」

「はい。レーダーにある情報から読み取りますと、!! そんな事よりも前方に大艦隊です。」

艦長は急いでレーダーを見る。すると、280km前方に大艦隊の反応があった。

「CIC、この艦隊は何者だ!?!」

「分かりません、突然現れまして真っ直ぐ本艦へと向かってきます。」

「艦長、どうします？ どうやらここは外洋で日本の領海ではありませんよ。これでは、向こうに撃沈の理由があります。早急にここを離れるべきかと。」

航海長は艦長に言う。

「あたごより発光信号『不明大艦隊の中央に大和と思しき艦あり。その後方に長門や陸奥、日向等と思しき艦も確認。』」

甲板見張り員が艦橋に伝える。

「大和だと！？ そんな馬鹿な。我々は過去に戻ったとも言うのか？」

「大和が出撃した例は殆どありません。それに長門や陸奥等一緒ということとは、ミッドウェー海域に向かう主力部隊と見て間違いないでしょう。」

「分かった。航海長、とりあえず不明艦隊の進路から外れ、やり過ぎしたら後方からゆっくりとついて行こうではないか。」

「了解しました。」

しかし、艦隊の進路から外れて暫く進んでいると

「艦長、日本の機動部隊と思しき艦隊を発見しました。私は、こっ

ちに着いて行ったほうがいいかと思います。」

「うむ、史実では全空母を失った艦隊だ。できれば、此方を救いたい。」

そう言い、発光信号で艦隊全てに合図を出して機動部隊の後方についた。

一南雲機動部隊 赤城一

「何！？後方に巨大空母を発見？」

南雲は艦橋にて後方警戒を行っている駆逐艦からの報告を聞く。

「はい。巡洋艦8隻と中央には巨大な空母が1隻いるそうです。」

「司令、それはアメリカの機動部隊の可能性があります。早急に攻撃の必要ありかと。」

航空参謀の源田はこの空母の撃沈の意見具申を行う。

「しかし、何故攻撃してこないんだ？敵ならこの距離で艦載機を飛ばしても不思議ではなからう。」

「では、せめて偵察機を向かわせて確認を取るべきです。もしこれが敵なら我々の位置を報告している可能性があります。」

南雲は伝声管の所に行き

「通信室、敵の無線を傍受できないか？」

「いえ、今のところ敵の無線は一切傍受できません。」

南雲は源田に向き直り

「偵察機を飛ばす。」

とだけ言った。30分後、準備できた97式艦攻が飛び立つ。

「あれですか。」

一東郷一

「空母より艦載機1機出撃。我が艦隊に接近中です。」

C I Cから報告が来る。

「1機ということは攻撃が目的では無いな。」

艦長は航海長を見る。そこに、今までC I Cに居た副長の尾上靖男おがみ やすお一佐が現れる。

「艦長、この偵察機をどうするお積りで？」

「必要なら撃墜するが、一機なら攻撃が目的では無いのだ。放っておこう。」

しかし、そう言う訳にはいかなかった。97式艦攻は発光信号にて

『我、赤城航空隊なり、貴艦隊の所属を知らせよ。』

「日の丸と旭日旗を掲げよ。」

この空母打撃群はバレないように旭日旗や日の丸を揚げておらず、国籍が不明である。その為、早急に味方だと知らせないと攻撃を受ける可能性があった。

『貴艦隊に問う。我が海軍にそのような艦は存在しない。状況を伝えよ。』

しかし、東郷はこれには答えず

『着艦されたし。』

と、発光信号を送った。

『着艦されたしとはどういう事か？』

『艦内にて話し合う。我、日本海軍艦艇なり。』

仕方が無いので、97式艦攻は一旦母艦に戻り、航空参謀の源田と参謀長の草鹿龍之介を連れてきた。

一東郷 会議室一

扉を開けて入ったのは、艦長の林原と副長の尾上であった。そして、

尾上は資料庫からミッドウェー海戦の出来る限りの資料をかき集めて持っていた。

「本艦の艦長の林原です、階級は海将補。ここでは少将と考えてくだされば構いません。それと、これは貴方がこれから行おうとしている作戦の資料です。」

「私は尾上で、階級は一佐。ここでは大佐と考えてくだされば構いません。それと、これは貴方がこれから行おうとしている作戦の資料です。」

尾上は机の上に資料を置く。源田はその中身を拝見し、草鹿は

「それで、何故この作戦の事を知っておるのですか？そして、貴方は何者です？この艦は我が帝国海軍には存在しません。」

しかし、先ほどから資料を見ていた源田は

「草鹿さん。彼らは俗に言う未来人のようです。この資料をご覧になれば分かります。」

源田は資料を草鹿に渡す。草鹿はそれを見て。

「そんな馬鹿な。我々の空母が全滅し、この敗北が敗戦へと影響したと言われている！？」

その資料にはそう書かれていた。

「敵側に情報が完全に漏洩しており、敵の機動部隊がミッドウェーにて待ち伏せしていました。」

「では、それを回避することができれば。」

「ええ、勝てるでしょう。しかし、ミッドウエーを占領したところで我々には何の価値もありません。ハワイはミッドウエーを落としただけでは陥落しません。それよりも撤退してこの戦力を守ることが必要です。」

「しかし。」

「私に良い考えがあります。」

「え？」

奇襲

—赤城—

「あれが、未来から来たという機動部隊のオートジャイロか。」

南雲は草鹿や源田に言われただけでは納得できなかったが、実際に本物を見ると嫌でも納得せざるを得なかった。

「長官、オートジャイロの爆装完了です。」

「分かった、直ちに出击許可を出せ。」

6機のシーホーク（3機爆装、3機雷装）と陸上自衛隊から導入されたコブラが4機（全機ロケットポッドや機関砲を装備。）飛び立った。

「60年後の左翼さんが聞いたら怒りだすだろうぜ。」

シーホークのパイロットはそんな事を言う。

「気にするな。どうせ口先だけの平和を語る奴だ。」

機長は先ほど言ったパイロットに答える。

—エンタープライズ—

「日本の機動部隊が予想位置にいないだど？」

スプルーアンスは偵察隊の報告を聞いて疑問に思った。既に暗号解読で日本機動部隊の大よその位置は把握している。あとは発見して攻撃隊を飛ばせばいいのだが、その発見が出来なかったのだ。

「ミッドウエーの偵察隊は？」

「それが、彼らも同じような事を返してきております。」

「そうか。」

スプルーアンスは艦橋から外の海を見る。

（日本の機動部隊は一体何処にいるんだ？）

―東郷―

「アメリカは我々の接近に気づいておりません。攻撃は成功です。」

江田原は林原に報告する。

「分かった。巡航ミサイルの発射準備をしておけ。」

「了解。」

江田原は艦内マイクの所に行き、C I Cに巡航ミサイルの発射準備

をしておくよう伝える。

「エンタープライズ」

「不明機接近！！」

前方の駆逐艦から不明機接近中という報告が届けられる。

「対空戦闘！！命令あるまでは発砲を禁ずる。」

エンタープライズとホーネットは取り舵を切り、ヨークタウンは面舵を切る。

「見えましたね。」

「ああ。全機へ！！敵空母の弱点は舷側にある解放式格納庫だ。」

ヨークタウン級は解放式格納庫を採用しており、それは火災が発生したときなどにそこ解放されている部分から魚雷や爆弾を投棄することで被害を最小限に押さえ込むというものである。

「ロケット弾発射！！」

コブラがまずロケット弾を各空母の飛行甲板に待機している艦載機に攻撃を加え、破壊する。

「魚雷投下！！」

続いて3機のシーホークから魚雷を3本投下し、黒煙によって左舷側が見えず、全弾魚雷命中を負ってしまった。

「しまった!!」

だが、遅かった。火災によって魚雷等を投棄しようと投棄口に運んでいた所を

「喰らえ!!」

止めの爆装したシーホークがそれぞれの空母に250kg爆弾2個を解放されている場所から艦内部へとうまい具合に投げ入れる。それにより、空母の内部にて爆発。次々と魚雷や爆弾に誘爆を起こし、艦は火に包まれた。

「総員退艦!!」

史実と逆転現象が発生。突然の奇襲でアメリカ空母は一瞬のうちに継戦能力を失い、浸水も発生する。

「やりましたね。」

完全な奇襲と、ヘリの不規則な機動に慣れないアメリカ軍は満足な反撃を行うことができず、多少の被弾はあるが撃墜された機体はいなかった。

「敵の空母はあれで使い物にならないでしょう。」

だが、沈んだのはなんと史実でも沈没したヨークタウンただ一隻であり、他は何とか護衛の巡洋艦に曳航されて真珠湾へと帰還することが出来た。

―赤城―

「空母東郷より、敵機動部隊戦闘不能の電報が入りました。」

「そうか。」

南雲は安堵の溜め息をついた。これで、自分は心置きなくミッドウエーを攻撃することができる。

「よし！！ミッドウエーに向けて攻撃隊を出撃させろ。」

命令を受け、第一次攻撃隊が機動部隊を離れた。

―ミッドウエー諸島―

「敵機襲来！！」

味方の機動部隊が撤退してしまったことから、守備隊の士気は完全に下がっていた。命中率は訓練よりも悪かった。

「撃て！！」

対空機銃や対空砲を撃ち続けるが、なかなか有効弾が与えられないでいる。

「投下!!」

他の機体に目を捉われていた対空砲は別の方角から接近する急降下爆撃機に気がつかず、爆弾を受けて戦死する。

「ワイルドキャットだな。」

護衛の零戦隊も練度でも性能でも勝るワイルドキャット相手に次々と戦果を残していった。

—東郷—

「攻撃隊が帰還します。」

C I Cに居る尾上から連絡が入る。

「よし、巡航ミサイル発射!!」

左舷に装備されている巡航ミサイル発射機から2本の巡航ミサイルが放たれる。それは、飛行場を破壊するためにデータを入力され、飛行している。

「赤城より発光信号『本作戦の中止命令を受信。貴艦隊は我に続き、トラック諸島へ寄港せよ』。」

甲板見張り員が赤城からの発光信号の内容を林原に伝える。

「中止だって？巡航ミサイルは？」

「着弾まで30秒です。」

「このままにしておけ。」

30秒後、ミッドウエーの二つの飛行場に巡航ミサイルが一発ずつ命中。暫くは使用不能になるほどの大穴が開いた。

トラック諸島

「トラック諸島」

「ここが、旧軍の一大泊地か。」

大和級2隻分の排水量を持つ東郷は艦隊の停泊している所より少し離れた位置に停泊した。

「艦長、通信科より連絡がありました。もうじき、本艦に2機の97式艦攻が着艦されるようです。」

「97式艦攻？」

林原は何故3座の機体が着艦されるのか疑問に思った。そして、暫くすると97式艦攻をレーダーに捉えた。

「着艦用フックを出してやれ。」

艦長の指示で、着艦用のフックが出る。そして、誘導用のシーホークが飛び立った。

「あれは？オートジャイロ？」

97式2機のパイロットは近づいてくる一機のシーホークを見つけ、シーホークは旋回して発光信号にて

『我に続け。』

と合図を出した。97式のパイロットは大人しく誘導され、東郷の艦尾から進入した。着艦した97式からは驚くべき人物3人が降りてきた。

「あ、あなたは！！」

降りたのは連合艦隊司令長官の山本五十六と参謀長の宇垣纏、作戦参謀の黒島亀人であった。機体は格納庫へと収容し、パイロットは待機室へ、連合艦隊首脳陣は会議室へと案内した。

一資料室一

「艦長はできる限り太平洋戦争の資料を集めろと言ったけど、多すぎるよ。」

副長の尾上は資料庫から太平洋戦争に関する資料を集めていた。巨艦だけに資料庫も大きく、戦史関係の本は大量にあってどれがどれだか分からない状態であった。

「まさか、ネットが使えたりして。」

そう言って悪ふざけで尾上はパソコンを起動させ、インターネットを開いた。すると

「嘘だろ。」

繋がり、y a h o o が出来るのだ。

「馬鹿な。じゃあ、メールも。」

そう言ってメールボックスを開き、防衛省へと自分達の置かれている境遇を書いたメールを送った。すると、送ることが出来たのだ。

「冗談だよな。」

そう言って尾上は今まで集めた資料を持ち、会議室へと向かった。

一平成 防衛省一

「それで、行方不明になった東郷を含む第一空母打撃群の行方は分からんのかね？」

防衛大臣は幕僚等を集めて第一空母打撃群の行方不明について話し合っていた。

「はい。それが、日本海方面に行ったのは確かなのですが、台風に吞まれてその後から行方がわからないんです。」

そこへ、

「だ、大臣、大変です！！東郷から、東郷からメールが来ました！！」

「な、何！？」

会議をしていた幕僚を含めて、全員がメールが届いたというパソコンに釘付けになる。

「なになに、第一空母打撃群は原因不明の事態に陥り、太平洋戦争のミッドウェー海域に出現。海戦にて空母4隻を損失せずに終結し、現在はトラック諸島にて停泊中。」

「どういう事でしょう？」

「分からん。しかし、まずい事になった。もしこれが公になれば。」

「はい。国際問題どころではありません。」

「何とか、極秘に事を進めよう。私は総理にこの事を伝える。君は新たなメールが来ないか見ていてくれ。」

「分かりました。」

そう言って、防衛大臣の北里信幸きたざとのぶゆきは国会に向かった。

一昭和　トラック諸島一

「それで、我が国はこの戦争にどう抗おうとも勝てないと。」

「はい。山本長官ならご存知の通り、アメリカと日本の国力差は歴然です。」

「確かにそうだ。」

会議は難航していた。そもそも日本が勝つにはアメリカの国力を削ぐ戦略爆撃しかないのだが、日本からアメリカに飛べる航空機は存在しないのだ。

「どうしたものか。」

林原は悩む、そこへ、江田原は

「ハワイを取る。」

と言った。

「確かにハワイを取ることが出来れば勝てるかもしれないが、一体どうやって？」

「方法は富嶽と戦艦部隊の力を使います。」

「富嶽とは？」

「日本が考案した超長距離重爆撃機です。結局、敗戦がほぼ確定したような時期に計画が本格的に始まったので一機も造られませんでしたが、現在では我々の持つ技術を併用すれば可能です。」

「しかし、」

「我々が明日、横須賀に向けて出航します。そして、我々の持つ技術で工業力を発展させ、富嶽を量産します。」

「分かりました。では、宜しくお願いします。」

この後、山本との間で交渉。第一空母打撃群は連合艦隊とは独立して動く独立航空機動部隊として編成され、内地にてパイロットと艦載機の提供を確約した。

平成からの増援

—平成 箱根—

「こっちよ。」

子供達が箱根の山の中で遊んでいる。そして、その最中に不思議な洞窟を見けるのだった。

「入ってみる？」

「うん。」

そう言って子供達はその洞窟に入った。すると、体が歪むような感覚が襲い、歩くのもやっとで洞窟を抜けるのだった。そして、抜けた世界が

「こっつて、何処？」

目の前に広がる世界は子供達にとっては歴史で習うような街並みだった。木造の家が立ち並び、東京の高層ビルも見えなかった。

「ねえ、一体ここは何処なの？」

子供達は答えの無いまま質問し合う。

「も、戻ろうよ。こんな所って、見たこと無いよ。」

子供たちは不安がって元の洞窟に戻るのだった。数時間後、その子

供たちが親に洞窟の事を話し、親が警察に通報して調査を行われる。しかし、警察レベルでの判断は難しいと警察上層部は判断し、自衛隊と合同にて調査が開始されて判明したのは、洞窟の出口が昭和17年であることだった。

一平成 防衛省一

「それで、今回発見された洞窟が昭和17年に繋がっていることは分かった。しかし、何故突然このような事が起こったのかが問題だ。」

北里は防衛省にて行われた会議にて言う。この会議には、自衛隊の各幕僚長のみならず、総理大臣の西澤大作にしざわだいさくや近代史に詳しい歴史学者や物理学者が等が参加した。

「その原因は分かりません。物理的な力を加えられて出現したのか、超常現象によって出現したのか全く検討も付きません。」

「それと、これと似たような現象が硫黄島沖でも観測されたとの事です。海保が不審な雲状の物体に吸い込まれ、戻ってきた時には乗組員が昔の日本を見たというんです。恐らく、洋上のこれも恐らくはタイムゲートかと。」

幕僚等は伝えた。そして、北里は西澤総理の方を見て

「総理、至急我々は昭和期に援軍を送るべきです。この間もお話したとおり、海自の空母打撃群が昭和17年にタイムスリップしたのです。ここは、昭和の時代に援軍を送り込みましょう。」

「そうしたいのはいいが、昭和17年の正確な日付が分かんのだ。もし、日付が分かれば適切な援軍を送って旧軍を支援できるのだが。」

西澤は現在の様な弱気な総理大臣とは一線を超し、強気な態度と人心を掌握する話術でかつて無いほどの絶大な支持を受けて総理大臣へと就任し、現在、日本には300万人もの失業者が出ていた。しかし、失業者対策の公共事業者や娯楽などの事業を開始し、失業者を吸収。最近続いていた不況も完璧とも言える政策で好況へと変え、さらなる支持率を上げている戦後始まって以来の正に総理になる為だけに生まれてきたと世論は評価するほどであった。

「浜内博士、この記録映像から昭和17年の何時頃かは分かりますか？」

日本歴史学の権威、はまうちよしじろう浜内吉次郎は自衛隊が撮影した記録映像を見る。そして、

「恐らくは、ミッドウェー海戦が終わった辺りだと思います。ここを航行しているのは艦影から那智だと思われます。その後ろは高雄か、愛宕かと。何れにせよ、これは本土防衛を主任務とする第五艦隊かと思われます。」

「第五艦隊。では、やはり昭和17年に間違いないと。」

「ええ、間違いなく昭和17年です。そして、ミッドウェー海戦終了と言う事は、連合軍が狙うのはソロモン諸島最南端の」

「ガダルカナルですね。」

「そうです。」

北里は浜内を見て

「しかし、東郷が送ってきた情報では失われる筈の空母4隻は健在ですよ。島こそ占領しませんでした。これでは史実と違います。」

「確かにそれもそうです。しかし、歴史を変えたら先を予測するなど不可能。ここは、史実どおりに進むの前提で話をしようではないか。」

西澤は北里に言った。

「総理、ここはやはり我々が増援を送って旧軍を支援すべきです。もし、歴史どおりにガダルカナルを獲られたら餓死者は史実同様に1万を越します。どうか、ご決断を。」

西澤は考えた。歴史はそう簡単変わるものなのか？変わったなら今の日本はどうなるのか？そんな考えが西澤の脳裏に過ぎる。

「総理、この決断は今現在の我々の存在を否定するかもしれません。ここは、慎重に審議すべきです。」

各幕僚長は言う。しかし、北里は

「総理、我々はアメリカと戦争をする話をしているのです。80年前のアメリカと、戦争をする話をしているのですよ。」

北里は強く言った。無論、西澤もそんな事は百も承知だった。

「しかし総理、平成のアメリカが黙っている筈ありません。ここは、本当に慎重に討議すべきです。」

「まだそんな事を貫かしているのかお前達は！？そんないい加減な気持ちで自衛隊に入ったのなら、今すぐにでも辞表を出せ！！」

北里は幕僚長らに言った。彼自身も弱気な態度はあまり好きではなかった。それに、彼の家系は先祖代々軍務に服し、常に最前線にて戦っていた一族だ。平成だろうとそれは変わっていない。日本の防衛の最前線で、彼は今戦っている。

西澤は別室で北里と話し合った。

「総理、自分が消えることが怖いのもよく分かりますし、現在のアメリカとの戦争の可能性だってあります。しかし、貴方は総理になる為に生まれてきた人間。いつもの強気は何処に行ってしまったか？」

北里は西澤に問う。しかし、西澤はそれには答えず

「防衛大臣、現在の我々の戦力を平成から昭和に送ったとして、気づかれない程度の戦力移動はどの程度なのだろうか？」

「艦艇は1艦種当り15隻前後が良い所でしょう。陸と空は特に問題にはならないかと。」

艦艇は停泊していてもレーダーに映るのだ。しかし、陸上の物は違う。建物や地形が邪魔をし、レーダーに映らない。だから、戦車や航空機を幾ら移動させた所で気づかれる可能性は非常に低い。

「総理、現在の日本が消滅しても良いではありませんか。もう一つの、より良き日本が別の世界、別の歴史で生き延びていけるのならそれで良いではありませんか。」

北里は少し間を置き

「太平洋戦争での徹底的な敗戦で我々はアメリカに毒を抜かれて無害な民族になってしまった。真の日本と言う国家、真の日本国民はあの日に消滅したのです。アメリカの加護の下で繁栄し、世界に名だたる経済大国になった日本。しかし、今では頼みの金も尽きた。いや、使い道が分からなくなった。原因は敗戦によって我々は働くこと以外に生き甲斐を感じられなくなり、日本国家、日本民族が何の為に歴史に存在するのかを考えなくなった。」

「防衛大臣、何が言いたいのだね？」

「日本の敗戦80年のアジアの歴史を思い出してください。冷戦は終結するも朝鮮半島は分断されたままです。中国は近年、巨大化するもその力は対外政策にはあまり生かされておりません。台湾は未だに独立を許されず、その他アジアの諸地域や諸外国では紛争や内戦、テロが横行しております。日本が勝っていれば、このような歴史にはならなかった筈です。」

「確かにそうだ。アメリカによって指導されているアジアではアメリカ反対派が各地でテロを起こしているのも事実だ。アジアはやはり、アジアの国で指導せねばならないのだ。」

「その為にも、我々自衛隊を昭和期に送り、旧軍支援の下で真の大東亜共栄圏を確立しようではありませんか。歴史では実現できなか

った日本人の夢、大東亜共栄圏。」

北里は西澤を説得する。

「私の親は軍を反対しておりました。親は、敗戦を元にアメリカによって育てられ、当時の日本の思想は間違っていると徹底的に教え込まれた人です。果たして、あの時代の思想は本当に間違っていたのか？それは分かりません。しかし、あの戦争で民間人が大勢亡くなったのは事実です。そして、大勢の民間人を殺した国が当時の日本の思想を間違っているなどどの口で言えたものか。」

「それで？その話は私に何を伝えたいのだ？」

「私は、当時の思想を調べてこの大東亜共栄圏だけは間違っていないかっと感じております。アジアに白人優越主義が蔓延している中、日本だけが白人優越主義を考えず、アジア独立の為に戦っております。実際の軍政はともかく、この思想だけは誰が何と言おうと間違っていないと感じております。」

「防衛大臣。」

「先程も言ったとおり、我々自衛隊を昭和に送り、旧軍を支援し、その影で大東亜共栄圏達成を密かに執り行おうではありませんか。我々は連合軍に勝ちたいのではなく、旧軍支援の下、大勢の日本国民を救う事とアジアの独立を行うことが主任務と致しましょう。」

北里は西澤に真剣な面持ちで見る。

「総理、貴方は考えたことがありますか？大東亜共栄圏が、今の欧州連合よりも強い結束力で結びつき、その下で多くのアジア国家が

繁栄していく様を。奇跡の様な成長を、総理は考えたことがありますか？。私があります。日本を盟主として、強い結束力で結びついたアジアを。私は考えたことがあるのです。」

西澤は暫く目を閉じて考えた。そして、暫く考えた後、目を見開いて。

「分かった。やろうではないか防衛大臣。より良き日本を、より良きアジアを目指して。」

「総理。」

「但し、我々が歴史改変で消えてしまっても、文句は無しだぞ。」

「勿論です総理。」

—東郷 資料室—

「それで、本当にネットが出来たのか？」

「はい。間違いありません。それに、メールも出来ました。」

尾上はメールボックスを開いた。すると、丁度防衛省からのメールが届いた。

「何何？」

『第一空母打撃群旗艦 東郷へ。』

日本国政府は旧軍支援の下、海上自衛隊、陸上自衛隊、航空自衛隊を昭和に送ることを決定した。そして、平成の日本技術を用いて昭和の日本の技術力を向上し、連合軍に負けない兵器等を提供する。

』

「どういう事だ？」

「さあな？」

「とにかく、内地へ戻れば分かるだろう。」

増援部隊

陸上自衛隊 兵力7万人

戦車320台

榴弾砲300門

ヘリ200機

その他、補助車両多数

航空自衛隊 兵力1万1千

戦闘機120機

早期警戒機4機

輸送機58機

その他、補助兵器多数

海上自衛隊 2万3千

ヘリ空母(日向型) 2隻

護衛艦14隻

ミサイル護衛艦6隻

ヘリコプター搭載護衛艦4隻

潜水艦14隻

揚陸艦4隻

輸送艦8隻

タンカー110隻

第一空母打撃群

空母 東郷

イージス護衛艦 あたご あしがら たかお はるな(あた

ご型)

アメリカ付与イージス護衛艦 ヴィンセンス (日本付与後『しきしま』に改名) トーマス・S・ゲイツ (日本付与後『あさひ』に改名) ヨークタウン (日本付与後『はつせ』に改名) タイコンデロガ (日本付与後『みかさ』に改名)

軍事計画

—横須賀—

「こ、これって？」

東郷率いる独立航空機動部隊は、横須賀に着いて驚く。日本の海上自衛隊の艦艇が停泊しており、陸には陸上自衛隊の10式戦車が見えた。

「本当だったんですね。」

隣に江田原が来て言った。

「遂に、日本政府も重大な決断をしたのだな。」

戦後始まって以来のアメリカに対する反抗。それは、自分を今まで育ててきた親元から離れるとは訳が違うだろう。

「西澤総理も大胆な決断をしたものだ。」

目の前にいる自衛隊員達が別人の様に見える。それは、戻れなくなるかもしれないと覚悟を決めた男の顔そのものだった。

「彼らも、時代は違えどこの国を救う為に来たのだ。がんばって貰わねばなるまい。当面は、南方が主戦場になるだろう。特にガダルカナル。ここを、如何にかせねばなるまい。」

林原は史実どおりの正論を述べていった。実際、史実との経過は違

うが、連合軍はガダルカナルを目指して進んでいた。上陸予定は9月10日。この日は、第二次アメリカ独立戦争にてエリー湖の湖上戦においてアメリカが決定的な勝利を得たことからこの日に上陸作戦開始をアメリカ政府は計画した。

「連合艦隊は我々からの資料を基にガダルカナルの早期基地化を行っております。既に、ラバウルから3個飛行中隊が進出しており、ブイン（ブーゲンビル島）にも飛行場建設が始まっております。1ヶ月弱で完成する見込みですよ。」

「早いな。」

「ただの燃料や弾薬を補給するだけの基地ですからね。航空機の駐機スペースを作る必要が無いんですよ。」

ブインに飛行場を建設する理由は、ガダルカナルがもし史実どおりに占領された時、途中の補給基地が航空隊に求められる。そこで、ラバウルとガダルカナルの丁度中間に位置するブインを中継基地に選んだのだ。

一国会一

「彼らが来て、我が国の工業水準は大幅に上がりました。今や、国内総生産は非常に高いレベルを誇っており、平均では列強諸国にも引けをとらない状態です。」

国会では、東條英機を始めたとする内閣の人間が平成からの増援に

ついでの処遇を考えていた。

「彼らは、必要ならば彼らの時代でも兵器生産をしてみると言っておりま。もし、これが本当ならアメリカとも対等な戦いが出来るでしょう。」

近代戦争は生産力も重要な課題なのだ。アメリカは、現在では兵器としての質でも高いが、第二次大戦当時はあまり高いとは言えなかった。しかし、勝てた理由の一つに世界一の工業生産力が上げられているのだ。

「まあ、そこは彼らの申し入れを受けようではないか。」

国会は、平成時代の日本と絶対的協力関係の維持をするという方針に決まった。

—平成の首相官邸—

「昭和の政府は我々の申し入れを受けると通達してきました。」

北里は西澤に現状を伝える。

「そうか。これで、我が国はより一層の好況になるだろう。」

この申し入れの裏には、やはり失業者の更なる吸収という意図が隠されていた。失業者を吸収し、経済を成長させるという狙いが政府は考えていた。勿論、国会内には太平洋戦争介入を反対する者が居た。しかし、北里は彼らに向かって

「そんな精神で、先人達の救ったこの日本に居るならば、今すぐに国籍を破棄して海外でも宇宙でも行ってしまう。」

と、国会にて発言したのだ。

「早速、三菱重工業、昭和航空工業。それに、新たに創設された新米重工業、荒川重工業に航空機の生産を依頼しました。彼らは、何で旧軍の航空機を造るのか疑問の声を上げておりましたが、何とか誤魔化すことが出来ましたよ。」

「艦艇はどうする？」

「三井造船と川崎重工業に艦艇の建造を依頼しました。護衛艦などの建造と、艦艇に使われる鉄加工製品などの生産を行わせ、それを昭和時代に持って行って造ります。」

西澤は俯き加減になり

「彼らにも上手く誤魔化したのだろうか？」

「はい。」

「心は痛むよ。同民族の日本人を敢えて騙すなど。」

「お気持ちはお察しいたします。」

そう言って、北里は首相官邸を後にした。

—昭和の横須賀—

「部隊を輸送船に乗せ、ガダルカナルへ増援部隊を送る。ガダルカナルでの戦死者はおよそ2万。その内の約1万5千人ほどが餓死や病弱死だ。これだけは防がなきゃいけない。」

横須賀鎮守府の一室を貸して貰い、そこで陸自と海自とで会議をしていた。空自はジェット用に滑走路の延長が終わらねば活動できない為、暫くの戦場参加は無理だろう。

「既に、おおすみとしもきたに部隊や車両を乗せ、待機状態です。命令さえあれば、いつでも出撃できます。」

10式と18式戦車4台ずつと10台の浄水車や10台の野外炊具一号、それに大量のタイ米と陸上自衛隊員を乗せた輸送船が待機している。それに、ガダルカナルには輸送機によって自走野砲や高射砲などが空輸されており、その訓練を受けた隊員も一緒に移動している。その他、第二便の輸送機には99式施設作業車などが送られ、飛行場の戦力化を早める要因となった。

「では、護衛艦10隻と共にガダルカナルへ派遣しよう。他の艦艇も訓練を終えたら随時、南方方面へと移動して貰う。」

海自総指揮官、影鎖義之海将かげさがよしゆきは言った。彼も空母建造推進者の一人で、当時は海将補だった。

「東郷も、行ってくれるな？」

「勿論です。」

林原は了解する。一瞬、自分は何の為に内地に来たのだろうかと疑問に思ったが、そこは敢えて突っ込まないでおいた。

「史実を変えることが出来れば、今の日本が変わる。」

「ああ、しかし。これは総理や防衛大臣からの密命だが、あくまでも我々自衛隊は大東亜共栄圏の達成だ。東郷が何をしようと、我々はそれだけの実現を目指すからな。」

「ええ、構いません。」

次の日、輸送艦「おおすみ」と「しもきた」を入れた護衛艦10隻、それに東郷を旗艦とする独立航空機動部隊も横須賀を出航したのだ。日米激戦地、ガダルカナルを目指して。

ガダルカナル

—ハワイ—

「それで、ヨークタウンを失い、おまけに出撃した空母2隻も大破したのかね？」

ニミッツはスプルーアンス中将を呼び出して、ミッドウェー戦況を聞いていた。

「はい。見たこともないオートジャイロに襲われ、格納庫を攻撃。艦載機を全て破壊したあと、悠々と飛び去っていきました。」

「日本は、我々が待ち構えていたことを知っていたのかね？なぜ、索敵機も飛ばさずに、正確に機動部隊を捉え、確実に攻撃できたのか分からない。」

「無線も確りと封止していましたので、情報漏洩はありません。」

「しかし、これでガダルカナルの航空支援は難しくなったな。今後、暫くは南太平洋が主戦場になるから、空母『ホーネット』だけでも投入したかったのだが。」

「それは、申し訳ありません。ホーネットは、エンタープライズと共に本国にて修理をしますので、再投入は、10月ごろを予定しています。」

「そんなには待てない。損害の少ないエンタープライズを戦線に投入できるギリギリのラインまで修理し、投入する。」

「しかし、それでは沈む可能性が高くなります。本職としては、賛成しかねません。」

「反抗作戦は、既に始まっているのだ。艦載機の数を整うから、投入は可能だよ。」

スプルーアンスは迷う。ここで、完全修理されていなかったヨークタウンがどんな運命を辿ったか話すべきか、やめるべきかを。

「君は、ホーネットが修理されるまで本国に居り、修理されたら戦線復帰をしたまえ。」

「分かりました。」

スプルーアンスは結局、納得せざるを得なかった。仕方がないと言えど仕方がない。本来、自分は後送されてもおかしくない状況なのに、ニミッツが後送を取り消したのだから。

—東郷—

「いい眺めですね。」

おおすみとしもきたは護衛艦群が取り囲んで護衛し、その28海里ほど後方を独立航空機動部隊が航行しているのだ。

「第一索敵隊が帰還しました。」

艦後方に、索敵機の97式艦攻10機が着艦体制に入っている。甲板は広く、ベテランなら4機を同時着艦させる事も可能な飛行甲板を持ち、カタパルトと通常発艦を使えば、同時に6箇所から同時発艦も可能な東郷。この時代で、いや、現代でもこれに勝る空母は存在しない。

「第二索敵隊が発艦しました。」

東郷の航空管制室では、管制員が誘導や指示を出して艦載機を行動させている。

「艦長、この南では、日米の激戦が繰り広げられるなんて想像できますか？」

「いや、想像できないな。こんな平和な、青空の下なのに、戦争やってるなんてな。」

「平成では当たり前ですが、ここでは、そうもいかないでしょう。」

「航海長。なんで、自衛隊に入った？」

「そりゃあ、日本を守るためでしょう。でも、実際は違った。自衛隊は、戦えない。ただ、アメリカの尻にくっついて政治絡みの海外派遣をされるだけ。艦長は？」

「私も、似たような理由だよ。そして、入って君と同じような感情を抱いたよ。そして、やめたいと思っていた。そんな中でこの空母の建造計画が上ったのだ。このチャンスに私は取り付き、推進してきた。お陰で、この空母の艦長になれたんだよ。」

「私も、この空母が造られているのを知ったときは驚きました。日本が、戦後体制から脱退できると、本気で信じました。そんな中で過去に飛ばされたんですから、日本を救おうと思った感情が、こんな所で実現できるとは思っていませんでしたよ。」

「まあ、分からんでもないが。」

暫く航行を続けた。ガダルカナルまで、あと2日程は掛かる。それまで、警戒を厳重にして航行しなくてはならないのだ。艦艇は居なくても、潜水艦は居る可能性が高い。なるべく、この空母が発見されるのを防ぎたいから、対潜、対水上警戒を厳重にして航行していた。

—ガダルカナル—

「既に、このガダルカナルにはラバウルからの航空隊3個中隊が進出し、ラバウルにも陸攻を中心とした戦力が待機しています。中間基地のブ島（ブーゲンビル島）は99式施設作業車で急ピッチの飛行場建設を行っております。それに、新たな戦力として新型戦車を16台に食料や増援部隊も2日後に到着すると言っています。」

160ミリ榴弾砲や、15式連装高射機関砲が飛行場の至る所に見られ、陸自隊員も見られる。

「兵等も、マラリアの予防接種を受けられて、戦いにも支障は殆どないでしょう。」

ガダルカナル守備体調の川口少将がお礼を言う。

「いえいえ、こちら私たちの先祖を救えるのです。礼には及びませんよ。」

ガダルカナルに派遣された陸自隊長の島崎一佐が言う。

「ハマダラカの退治にも我々は協力します。それに、浄水車などで浄水された水なども提供するようになつてますので、後方支援はお任せください。」

さすがは陸自だった。災害救助などで経験を積んでいるからこの手の後方支援など朝飯前である。

ハマダラカ。マラリアの原虫を人に媒介する蚊の一種で、熱帯地方に多く生息している。日本でも、明治時代の北海道開拓時に多く見られたが、マラリアの原虫は現在では駆逐されて見ることは無い。

「食料の米はタイ米もありますが、殆どは古米ですよ。」

「米ならいいですよ。」

タイ米は現在の日本では敬遠される米で、古米は余った米のこと。古米は、現在の学校給食の米の大半を占めており、快く思わない生徒も少なくはないそうです（少なくとも、私は嫌いだった）。

そこへ、空襲を知らせる警報が鳴り響き、飛行場は慌しくなる。

「司令、敵の爆撃機が28機接近しています。」

「機種は？」

「不明ですが、双発機の事。」

「B25か26だな。」

島崎は報告を聞いて機種を予測し、

「高射砲、残らず撃墜しろ！！」

命令を受け、15式連装高射機関砲に着く。

「爆撃機視認。ファイアー！！」

全8基の高射機関砲は、上空に飛来したB26に40ミリ弾を浴びせ、機体を次々ズタズタにする。

「す、すごい！！」

音速機を撃墜するために作られた15式連装高射機関砲は300km程度で飛ぶ航空機なんて、蚊を落とすよりも簡単であった。結局、爆撃機は任務を果たせずにわずか2機だけが一目散に撤退していく。

「26機撃墜。なかなかの戦果だな。」

まだ、導入されて間もない機関砲の威力を見て島崎も驚いた。

「敵は機体の至る所に穴が開いており、ズタズタです。こんな高射砲、今まで見たことはありません。」

「そうだな。これで、敵さんも爆撃を諦めてくれるだろう。」

しかし、この次の日に再び爆撃機が姿を現した。しかし、今度はB17による高高度爆撃の為、気休め程度の損害しか与えられる事は出来ず、飛行場に穴が開いても99式施設作業車が簡単に埋めるから、効果は一切無かった。

準備

一平成 東京 パークハイアット東京一

「日本のこの裏切りは許されることではないのだ。同盟国アメリカに対する裏切りは、今後の日米関係の悪化に伴う共同防衛が取れなくなってしまう。だから、何としてもこの情報をC I Aの人間に渡してもらいたい。」

アメリカとの関係を特に重視したがっている外務省の役人は、アメリカとの関係悪化を恐れ、極秘裏にC I Aのエージェントと会う約束をしたのだ。

「大臣、こんな事をして許されるのですか？」

「仕方が無いのだ。日本を、軍国主義に戻してはならない。」

そこへ、ドアが開き

「確かに、日本を軍国主義に戻すわけにはいかない。しかし、貴方がやっている事は国家反逆罪。総理の意向に相反する行いをするのです。」

外務省には色々と影の噂が出回っているのを北里は小耳に挟み、念のために部下に見張らせていたのだ。そして、反逆を企てていることを見抜き、部隊を引き連れてやってきたのだ。

「防衛大臣、自分が何をやっているのか分かっているのかね？」

「勿論、分かった上でやっていることです。祖国を守る。これをやって、何が悪いのですか？」

「やはり、軍国主義に日本を戻したのではないのかね？」

「少なくとも、貴方の様な非愛国者に言っても無駄なことは分かっています。国を守る本当の意味を、戦後教育では一切教えられなかったのですから。」

「貴様、戦後の日本を裏切るのか？」

「貴方だって、今裏切ったのではないですか？外務大臣。」

北里は拳銃を抜き、

「国家反逆者は、本来射殺しても許されるのです。しかし、死んだらまた面倒なので。」

北里は銃を隣に居る自衛隊員に渡した後、外務大臣に近づき

「氣を失っていただきます。」

そう言って外務大臣の腹を思いっきり殴って、氣絶させた。

「連行しろ。それと、この男も留置所に収監しろ。」

自衛隊員が氣絶している外務大臣を運び、外務大臣を補佐していた男も連行した。

一昭和 ガダルカナル一

「凄い。」

守備隊長の川口少将は輸送艦から揚陸される戦車を見て驚く。この時代では考えられない傾斜装甲、長い主砲にドイツ戦車よりも高い機動力。全てにおいて、現在の戦車を卓越した無敵の戦車であることは簡単に理解できた。

「こ、こんな物が80年後に存在するのかね？」

「はい。」

島崎は、運ばれてきた戦車と、陸揚げされている食料や追加の浄水車、野外炊飯一号を見ている。

「この戦車で、上陸してくる連合軍を迎え撃ち、ガダルカナルを死守します。」

「素晴らしいよ。この戦車は、一度乗ってみたいもんだな。」

「後で、乗ってみますか？現在の戦車の様な蒸し風呂状態って程ではありませんよ。」

第二次大戦当時の戦車兵は、戦車の中は蒸し風呂みたいだったと語っている。冷却装置などが無い中で閉め切っていれば夏は地獄だと言う事は想像出来るだろう。現在では、戦闘中こそセンサーの感度が下がるから冷却装置を作動させないが、平時はそれなりに快適なのだ。

一東郷一

「現れますかね連合軍は?。」

江田原は艦長の林原に言った。

「来るだろう。あくまでも、勘がな。」

「艦長の勘は当てになりますよ。」

「索敵機の報告では、周辺海域の安全は確認されている。少なくとも、史実どおりの日付に上陸決行は無いな。」

「連合艦隊司令部は、2式大艇でハワイを偵察しましたが、出撃する兆候は見られなかったそうです。」

「2式大艇か。真珠湾を再空襲した機体として知られているだろう。それが、再びハワイを今度は偵察任務で飛行したんだ。アメリカのプライドは完全に破壊したな。」

「飛行艇如きに逃げられたって喚いてますよ、今頃。」

2式大艇。正式名称は2式大型飛行艇、第二次大戦に日本軍が使用した大型の飛行艇だ。日本は、水上機関係では世界の追順を許さず、独創的な水上機も次々と開発した。その中でもこの2式大艇は世界の飛行艇の性能比較をしても全てにおいて卓越した最高の飛行艇として今でも名高い海軍の名機なのだ。

「しかし、まだ出撃していないとは妙だな。」

「ええ、そろそろ出撃してもおかしくはないのですが。」

「海自の潜水艦を派遣して探らせてみよう。内地の横須賀鎮守府に連絡しろ。」

自衛隊は、いくら旧軍支援という任務があるとは言え、命令系統は別物なのだ。だから、軍令部や連合艦隊司令部の命令は基本的には従わなくても良い事になっている。なので、各艦隊司令官の独断行動もある程度までは許されているのだ。

「了解。至急、連絡します。」

そう言って、江田原は無線室へと向かった。

一平成 首相官邸一

「総理、予想通りでした。やはり、聞き分けられない者がアメリカに情報を売ろうとしていたのです。」

北里は、外務大臣を締め上げて他の反逆者の内の数人を逮捕することは出来たが、まだ安心できないのだ。

「そうか。やはり、日本がアメリカに逆らうのを快く思わない者が居たか。」

西澤は少し、俯き加減になる。

「総理、彼らは日本がアメリカに齒向かう事が軍国主義の再来と叫んでいるのです。しかし、なぜ日本が軍を持つてはいけないのか私は分かりません。日本が軍を持てば軍国主義になるとなぜ分かるのかも私には分からないのです。」

「防衛大臣、気持ちは分かるが今は堪えてくれ。彼らに対して怒りを覚える気持ちも分かる。しかし今、同民族同士での問題に振り回されている訳にもいかないのだ。」

北里は、首相官邸に飾られている掛け軸を見る。そこには『平和は一時のものです。しかし、戦争もまた、一時のものなのです。』と書かれている。

「総理、アメリカに気づかれた動向はありませんが、議員の内部に居る敵をどうかせねばなりません。それに、外国の敵はアメリカだけではない。中国や、韓国、北朝鮮なども日本にスパイを送り込んでいる可能性があるのです。」

日本は、よくスパイ天国だと言われている。日本ではこの、スパイに対する取締りが甘いのだ。だから、各国の諜報機関は日本を諜報員の練習台にしていると言う噂まで出ている。それに、同じ東洋人の中国や韓国人など、名前を聞くまで何処の国の人種が分からないのだ。だから、同じ東洋人は日本でのスパイ活動がしやすい。

「分かっているよ、防衛大臣。何とか、言い訳も考えてあるが、所詮は言い訳だ。時間稼ぎでしかない。だから、何とか感づかれないように協力してくれ。」

「分かっております総理。」

8月23日

—真珠湾—

「艦隊出撃!!」

簡単な応急処置を行ったエンタープライズと、旗艦のサラトガ。それに、新鋭戦艦サウスダコタ、インディアナを入れた機動部隊が真珠湾を出航したのだ。そして、米第一海兵師団を乗せた輸送船と、それを護衛する艦艇も泊地から出撃して行った。

夜戦の鬼 三川軍一

―ソロモン諸島 ガダルカナル―

「では、行ってまいります。」

ガダルカナルからは偵察の為にP3Cが飛び立った。最大速度600?を超すP3Cに追いつける連合軍機は現在存在しない。

「機長、幾ら追いつけないからってこの時代に衛星とかは無いので昔ながらの航法で位置を掴まなきゃいけませんよ。」

一応、初期訓練で航法も習っているが、実際は殆ど試したことが無く、慣れていない。その為、旧軍の航法士も一緒に搭乗している。

「話していないで航法をしっかりと頼むぜ。もし迷って海に落ちたら鰯ふかの餌になるからな。」

「分かっていますよ。」

ガダルカナルには三川中将指揮の第八艦と浜西海将指揮の第二護衛群が進出しており、敵艦隊発見の報を受けたと同時に出撃できるように待機している。そして、海中には潜水艦が息を潜めて敵艦隊を搜索している。

「艦隊を発見!!!北西130?地点に敵艦隊発見!!!艦影より巡洋艦クラス8、駆逐艦クラス12。」

P3Cのレーダーに敵水上艦艇を捉えた。この報告を受け、直ちに

三川艦隊と第二護衛群が泊地を出撃。接敵は、19時になるという見方がなされた。即ち、三川中將^{やせんのおに}十八番の夜戦を挑めるということだ。

―第二護衛群 旗艦 こんにちは―

「浜西司令。三川さんは支援のみを要求しておりますが。」

「分かっている。早速、支援をしてやらんとな。」

そう言って無線機直結電話を取り、三川艦隊旗艦「鳥海」に繋いだ。傍受されることが無く、艦隊旗艦には他艦隊との連絡が行える大型の艦隊連絡用電話機が搭載され、その他の艦艇にも艦隊の艦艇同士で連絡が取りあえる小型の艦艇連絡用電話機が装備されている。航空機にも無線機が搭載され、連絡密の編隊空戦が行うことが出来、スペースに余裕のある攻撃機や爆撃機には大型の基地連絡用の無線機も搭載されている。

「三川さん、早速敵に有利に事が運ぶ可能性の高いレーダー艦を沈黙させてもらう。」

アメリカ艦艇にはレーダー装備艦が少なく、本格的にレーダーが威力を発揮したのは第三次ソロモン海戦辺りからだ。しかし、イギリスやこの海域に出現するオーストラリア艦艇には既にレーダー装備艦が存在している。だから、このレーダー装備艦を沈黙させて夜戦を有利に運ぼうと浜西は考えたのだ。

「ハーブーン、諸言入力完了。撃ち方用意よし!!」

「敵レーダー艦を補足しています。」

「敵、艦隊後方に更に別の艦隊。」

報告が次々と届けられる。

「別の艦隊だど？」

「はい、巡洋艦2隻という少数ですが、離れているので別の艦隊かと思われます。」

「分かった。ハーブーン発射!!」

「こんごう」と「はるな」からハーブーンが3本ずつ放たれ、敵レーダー艦目指して飛行を開始する。

―巡洋艦 オーストラリア―

「何か、接近してきます。」

見張り員が報告し、司令のクラッチレー中将は

「何かとは一体？」

「ふ、噴進弾です!!」

その瞬間、右舷を航行していたタルボットとブルーに命中し、二隻は海の藻屑と消えた。

「タルボット、ブルー、両艦共に応答なし。撃沈された模様!!」

「一体、何が起こったんだ？」

「わ、分かりません。あ!!。ほ、本艦にも噴進弾が向かってきます!!」

だが、既に遅かった。旗艦のオーストラリアの艦橋に命中。クラッチレー中將は敢え無く戦死した。その他、2隻の駆逐艦が喰われ、レーダー艦は全滅した。

— こんごう —

「敵レーダー艦沈黙。」

「三川艦隊より、我これより突入す。」

「敵、なおも前進中。」

報告から見て、接敵予定時間に狂いは無さそうだった。

「では、見物しようではないか。我々の歴史で夜戦の鬼と評価される彼の實力を。」

こんごうを含む第二護衛群は全速力で三川艦隊の後方を航行した。

— 鳥海 —

「海上自衛隊より、レーダー艦沈黙。貴艦隊の奮戦を期待す。」

「感謝すると返電せよ。」

敵と相対距離は共に有効射程まで入る。西洋の騎士と、東洋の武士との決戦。これが、太平洋戦争初めての本格的な艦隊決戦だった。

「照明照射!!」

照明で敵を照らし、両艦隊とも敵を捉える。

「撃ち方はじめ!!」

そして、両艦隊が同時に発砲を開始し、至近距離にて殴り合いを行う。しかし、指揮官を損失している連合軍が不利なのは明らかだ。砲撃は統制が取れず、殆どが遠弾だった。

「敵は相当焦っているようですね。」

「だろうな。魚雷戦用意!!」

夜戦の必殺技。日本海軍の酸素魚雷発射管が敵艦隊に向けられる。

「発射!!」

各艦が魚雷を放ち、一斉面舵を取る。だが、

「加古に敵魚雷命中。航行に支障なくも、戦闘不能。」

連合軍側も魚雷を放っていた。しかも、運が悪いことに今夜は新月。魚雷の航跡を視認する事など不可能だ。だが、酸素魚雷は直の事。

「敵巡洋艦3隻に魚雷命中。内、2隻が沈み始めます。残った1隻は速力大幅低下!!」

「集中砲撃!! 止めを刺せ。」

加古を除く全艦艇が被雷した巡洋艦を集中攻撃し、沈めた。残った艦艇は撤退を開始したが

「追撃!!」

三川は逃げる敵を追い回し、巡洋艦1隻、駆逐艦4隻をその後沈めた。そして、我が方の損害は加古が速力を低下するも無事に泊地へとたどり着けた。青葉と天龍は追撃戦にて敵の砲撃を浴び、小破という損害が出たが、沈没艦は一隻も無かった。

そして、この海戦から四日後、米国海兵隊とその護衛船団がソロモン海へと突入を開始した。

航空戦

―東郷―

「機動部隊と上陸船団が本海域に侵入した可能性があります。」

偵察機が不審な航跡を捉え、周辺の部隊が警戒を高めている所だった。

「こちらからも偵察隊を出して敵を探させましょう。」

「分かった。99式艦爆を6機、爆装にて出撃させよ。」

「了解。」

命令を受け、250?の爆装をした99式艦爆が偵察の為に飛び立った。

―こんごう―

「瑞鶴より、索敵を厳にせよとの通達です。」

ソロモン諸島に派遣された旗艦、瑞鶴は同型の翔鶴と共に索敵を続けている。その他にも、赤城、加賀などの空母がラバウルに集結していた。

「索敵機の電探に反応が出ていないそうです。ガダルカナルからもP3Cが飛び立っているようですが、発見は出来ていません。」

比叡と霧島の前方に出てこんごうを含む海上自衛隊も搜索しているが、電探に敵艦隊を捉えられないでいる。

「対空電探に反応あり。敵がガダルカナル目指して飛行中。」

「何!？」

「いえ、二手に分かれました。一隊はこちらに向かっています。」

「比叡に発光信号。『敵接近中。本艦隊、前方に出て敵を迎撃する。』と。」

直ちに比叡に発光信号が送られ、最大船速にて航行を続ける。

「敵艦隊発見。」

米海軍航空隊は航行する海上自衛隊艦艇を発見する。

「機長、変わった船体ですね。上部構造物の殆どがアンテナやら通信装置やらで埋まっていますよ。それに、見た感じ武装は単装砲が一門。貧弱すぎます。」

後部機銃手は発見した艦艇を見て言う。まあ、この時代にはVLSなどを知らないし、CIWSの航空機が上空から見分けるのは難しい。

「こんなの沈めても戦果なんて言えん。本命は空母。最悪でも戦艦

を沈めたい。」

そう言って通り過ぎようとすると。

「機長、発煙です。何かが、こちらに。」

「何!？」

昇ってきたのはスタンダードミサイル。即ち、対空ミサイルが飛行する航空隊に向かって昇ってきたのだ。

「か、回避!!。」

機長も、昇って来たものが直感で攻撃だと分かった。しかし、ミサイルは追尾機能を有しており

「き、機長。噴進弾が追ってきます!!。」

「な、何故だ？」

次の瞬間。ミサイルが乗機のドーントレスに命中し、撃墜された。5艦一斉のミサイル発射で合計ミサイル発射数は100本。飛んできた航空機は50機。運よく一本は回避できても、2本目まではうまくいかず、全機が撃墜された。

「撃墜しました。」

レーダーから光点が消え、見張り員が全機撃墜を報告する。

「そうか。」

「艦長？」

「いや、何でもない。警戒を厳重にしておけ。」

「了解しました。」

「まもなくルンガ泊地。報告では、敵の輸送船が居るとの事だ。」

「了解。」

飛び立ったもう一隊。ルンガ泊地目指して飛行し続けていた。そこへ。

「何故、零戦^{ジーク}が？」

ガダルカナルの早期戦力化で進出してきたラバウル航空隊が迎撃の為に撃っていた。

「おうおう。敵さん、驚いちよるがな。」

史実でも活躍したラバウル航空隊のベテラン達が米航空隊を迎え撃った。

「敵さん、可哀そうやのう。」

零戦の後方に着いたグラマンの更に後ろに零戦のパイロットが言う。

「前に集中し過ぎて、こっちの方に気付いとらん。」

「早く落としてくれよ。」

後ろに着かれている零戦のパイロットが言ってくる。

「分かっとる。後ろに着かれたくせにぎゃあぎゃあ騒ぐな。」

そう言ってグラマンに20mmを浴びせて撃墜する。

「しかし、この無線機。良い性能だな。」

離れていても鮮明に相手の声を聞き取ることも出来、発信することもある。

「編隊空戦も楽々じゃな。」

そう言って、次のグラマンに狙いを付けるのだった。

「護衛機が追ってきません。」

振り切る事の出来た僅かな爆撃隊は編隊を組み直してルンガ泊地を目指していた。

「もうすぐだ。輸送船を沈めて、戦闘機隊と爆撃隊の仇を取ろう。」

飛び続け、ようやく泊地にたどり着く。しかし、現実は甘くなかった。

「な！？湾内に、一隻も居ない。」

輸送船どころか魚雷艇などの小型艇まで一隻残らず湾内には居なかった。そして、出迎えたのは。

「撃て！！」

15式自走高射機関砲だった。

「ぎゃあああ！！」

40ミリ機関砲の餌食となり、ドーントレスは撃墜されていく。

「畜生。」

爆弾を投棄し、生き残っている爆撃機は上昇を始め、帰還する。しかし、帰還に成功したのは僅か、2機だけだった。戦闘機は1機帰還したが、着艦の際にミスり、海没する事態が発生した。

航空戦 2

―ソロモン海上空―

「敵艦隊は見当たりませんね。」

偵察の為に飛び立っていた99式艦爆はソロモン海を隈なく搜索するが、未だに発見には至らない。

「別の偵察機からも発見の報告が入りません。」

「相手の無線は傍受できないか？」

「戦闘海域入りしているんですよ。我々と違って、向こうは無線での交信をしているとは思えません。」

日本海軍は傍受不可能な短波無線機で交信しており、アメリカ艦隊は日本の無線を傍受できないでいる。

「分かった。索敵を続行するぞ。」

そこへ、意味不明な電文が入った。

「え、英語の電文です。翻訳機にかけます。」

「分かった。」

「え、ええと。現在位置、ガダルカナル島南西960?」

「そこに、敵艦隊が？」

「はい。間違いありません。」

それを聞くと、機長は操縦桿を倒して目標へと飛行を開始する

―ソロモン海海底―

「敵の無線を傍受。一番近くに居るのは我々です。」

同じく無線を傍受していたそうりゅうは

「分かった。敵艦隊を攻撃しに行くぞ。」

と、艦長が指示をした。

「了解。取り舵一杯、目標へ全力航行。」

―エンタープライズ―

「一体どこのどいつだ！？先ほどの無線波を出した艦は。その艦の艦長を本艦へ呼べ！！」

艦隊指揮のハルゼーは猛烈に怒りまくっていた。

「て、提督。お気持ちはわかりますが、今は冷静にお願いします。」

「カーニー君。俺は至って落ち着いていた。その落ち着いている俺をこんなにも怒らせる艦の艦長を、今すぐに、本艦へ呼べ!!」

「し、しかし。現在は戦闘中でして。そんな中で呼べるとも。」

「カーニー君。その戦闘中の最中に、あってはならないものが起きたのだ。敵に傍受される、無線波を出したのだ。今頃、本艦隊へ攻撃隊が飛び立っているかもしれん。それをした艦の艦長を、即刻軍法会議に掛けるのだ。」

「見つけたぜ、敵艦隊。」

上空に到達した99式艦爆は

「こちら、索敵3号機。敵艦隊発見、ガダルカナル島南西960?地点に空母2隻、戦艦2隻の敵艦隊を発見。」

その報告をし、99式艦爆を一気に急降下させる。

「て、提督。上空に敵機が一機、突っ込んできます!!」

「何!?!」

ハルゼーの目に99式艦がサトガに向かって急降下する光景だった。

「駄目です。あれでは、命中してしまいます。」

「フレッチャーは何をやっている！？上空警戒を疎かにしておって！
」

サラトガにて指揮をとるフレッチャー少将は完全に油断していた。
上空警戒機が補給の為に着艦する直進航行時に攻撃されたのだ。

「距離、速度。共に異常なし。投下！！」

機体の真下にある250？の爆弾がサラトガに向けて投下された。
それは、油断していたサラトガにとって最悪の奇襲だった。上空警戒の為に発艦しようとしていた航空機群に爆弾が命中。甲板は火の海になった。

「サラトガ」

「被害を報告せよ。」

火災の発生しているサラトガの飛行甲板を見て、フレッチャーは尋ねる。

「は、艦載戦闘機が多数破壊され、飛行甲板は火災発生。消火・戦闘には支障ありません。」

「そうか。」

直ぐに甲板作業員がホースなどで消火作業を行っており、火の勢い

はもう弱まりかけている。

「しかし、戦闘機を失ったのは痛いな。」

「旧式のF2が4機あるだけでして、戦力にはならないかと。」

「数合わせには丁度良い。それも、動員して上空警戒に当たらせろ。今のは偵察機だ。攻撃隊が、もうすぐ来るだろう。」

フレッチャーの読みは当たっていた。

―東郷―

「攻撃隊、発進!!」

東郷から128機の攻撃隊がアメリカ機動部隊目指して飛び立った。

「翔鶴、瑞鶴からも攻撃隊を要請しましょうか？」

「いや、その必要は無い。」

「え？」

「今、連絡が入った。そうりゅうが、敵艦隊を再度、奇襲してくれるそうだ。」

―そうりゅう―

「前部、魚雷発射管開け!!」

「1番から6番。全発射管開きます。」

そうりゅうの装備する53・3?魚雷発射管全6門が開き、最新鋭魚雷12式長魚雷が装填された。

「攻撃用意よし。発射!!」

6発の魚雷が敵艦隊目指して発射された。雷速78ノット。横っ腹を見せている戦艦が回避できるはずは無い。

―サウスダコタ―

「さ、左舷より魚雷接近!! 早すぎて、回避不可能です。」

「ら、雷速は70ノットを越えています。回避不能!!」

「馬鹿な!! そんな雷速魚雷が、一体どこの国が保有していると言うんだ!？」

その瞬間、高性能炸薬300?搭載の12式長魚雷がサウスダコタの左舷に4本命中。爆発が起こり、船体は傾き始めた。

「サウスダコタ、沈没。」

潜望鏡で見ていた副長は沈んでいくサウスダコタを見て撃沈を確信

する。

「副長、私にも見せろ。」

と、艦長が潜望鏡を変わって、覗く。

「素晴らしいな。これが、12式長魚雷の威力。」

目の前の戦艦が全く抵抗できずに沈んでいく様を見て、艦長は最新装備の威力に驚く。

「煙を視認。敵艦隊はあの位置です。」

サウスダコタ沈没の煙が攻撃隊をうまい具合に導く。

「艦爆第二中隊は戦艦を。艦攻第二中隊は空母。残りは上空で待機。」

攻撃隊を率いる宮部中佐は編隊に指揮を出し、部隊の誘導を始める。

「艦攻隊、空母に突入します。」

見ると、手負いのサラトガに艦攻が殺到する。

「サラトガ」

「敵雷撃機、左舷より三機接近!!」

「面舵一杯!!」

舵を右にきり、魚雷投下に備える。

「敵、右舷からも接近!!」

見ると、右舷からも3機が接近してくる。

「敵、魚雷投下!!」

「舵戻せ!!、機関、最大船速!!」

36ノットの最大速力で魚雷を回避しようとする。しかし、この最大船速が仇となってしまった。

「後部に魚雷命中!! 舵損傷、操艦不能!!」

運悪く艦の後部に当たってしまった。つまり、戦域を永久に周回するのとならなくなった。

「敵、右舷前方より接近!!」

97式艦攻が再び3機で突入を仕掛ける。

「魚雷投下しました。」

「総員、衝撃に備え!!」

魚雷は3本とも右舷に命中。遂に、船体が傾き始める。

「あの空母はもう持たんな。」

傾き始めたサラトガを見て宮部は言う。

「よし、第一艦攻中隊は損傷を受けた空母に止めを刺すぞ。」

今まで、上空に待機していた第一艦攻中隊が低空に降り、攻撃を開始する。

「敵は舵を遣られている。総員、百発百中を目指せ！！」

既に、宮部は魚雷攻撃を回避しようとしないうちにサラトガを見て、舵を遣られたと判断できた。だから、安心して低空に突入できる。

「投下！！」

放たれた3本の魚雷が

「命中。沈み始めました。」

サラトガに止めを刺した。

―エンタープライズ―

「サラトガ、沈没。フレッチャー少将は退艦を拒否。船と共に沈みました。」

「こつちもそうなりかねん。全力で回避運動をするんだ！！」

ハルゼーの指揮するエンタープライズは巧みな操艦で魚雷を回避し続け、命中弾は左舷に一発だけであった。

「ハワイから、早急に撤退せよ。上陸部隊はこちらで何とかするだそうです。」

「ニミッツめ、臆病風にでも吹かれたか。」

「しかし、このままでは本艦も失いかねません。ここは、ニミッツ提督の言うとおりに、撤退すべきかと。」

「上陸した戦車と、海兵隊1万8千人を見殺しにして、撤退しろだど！？」

「今回は、敵の戦力を甘く見すぎました。今でも遅くありません。早急に撤退命令を。」

「お、おのれ。ジャップス日本軍、この仕返しは必ずするぞ。」

ハルゼーは全艦撤退命令を下し、生き残った艦艇の中で、乗員救助を行う艦を残して撤退した。

―東郷―

「敵は撤退しました。こちらは艦攻8機、艦爆12機が遣られましたが、敵は空母と戦艦を1隻ずつ失い、巡洋艦と駆逐艦が5隻失い

ました。」

「そうか。彼らの初陣にしては中々の戦果だな。」

帰ってきた攻撃隊は次々に着艦し、再び戻って来れた嬉しさを味わっている。

「上陸した海兵隊と、陸自・陸軍が合同で攻撃しているようです。こちらはどうしますか？」

「我々の仕事は終わった。暫くは北方に離れて、大人しくしているさ。」

ガダルカナル陸上戦

―ガダルカナル 米海兵隊上陸地点―

「て、敵の抵抗が激しすぎます。」

上陸した部隊は敵の猛攻に晒され、次々と命を落としていく。

「艦隊は撤退しちまうし、航空支援は受けられん。このままじゃあ、飛行場を奪取する前に全滅しちまうぞ。」

砂浜は見晴らしがよく、機銃で狙い撃つには絶好の場所だった。逆に、海兵隊は日本軍の隠れているジャングルに効果的な抵抗が出来ず、日米陸上戦は日本が優勢だった。

「せ、戦車を出せ！！。一気にジャングルへ突っ込む。」

海兵隊は負けじと戦車を繰り出し、その陰に隠れて前進を開始する。

―ガダルカナル 日本軍司令部―

「川口司令官、敵が戦車を繰り出してこちらに向かっていると前線から報告が。」

「そうか。陸自さんは、戦車を動かせるかね？」

「ジャングルでの戦闘は出来ない事ありませんが、経験が足りなさすぎて困難かと思えます。飛行場まで誘い出せれば、見晴らしが

よく、前面装甲も貫く事はありませんので可能かと。」

「そうですか。海岸防衛隊に飛行場まで撤退するよう伝えろ。」

「了解しました。」

伝令兵が川口少将の命令を伝えるために通信室へと向かった。

「それでは、航空機隊は翔鶴と瑞鶴へ退避させましょう。航空機が失えば、ガダルカナル飛行場を戦力化した意味が無くなりますので。」

「そうだな。陸攻や、海自さんの偵察機なども全てブインに退避させましょう。」

航空隊は、命令を受諾し、ガダルカナルから急いで退避を始める。進出してきた第五航空戦隊とその護衛艦群はガダルカナル北方280?地点に待機しており、命令があれば直ちに航空支援を行える状態だった。

そして、非戦闘車両はガダルカナル飛行場からジャングルの中へ退避を始め、飛行場には土囊などで作り上げた即席の機銃陣地や戦車が配備され、ジャングル内には99式自走砲や陸軍の95式野砲が備えられた。

「来たぞ。」

木を倒しながら、M4やM3の中戦車と歩兵部隊、M3ハーフトラ

ツクなどが来た。

「総員、攻撃用意……始め!!」

その瞬間、機銃陣地から一斉に機銃弾が放たれ、ジャングルから出てきた兵を倒していく。

「18式戦車隊、砲撃開始。」

陸自の18式戦車も攻撃を開始。シャーマンやリーが反撃をするのが、装甲の固い18式戦車を破壊できるはずがない。

「ジャップのあの戦車は一体なんだ!?!」

応戦する部隊が日本軍の戦車の機動力、防御力、攻撃力を見て驚く。シャーマンにとっても海兵隊員にとっても初陣だが、これまでの日本軍戦車の能力を聞いていた海兵隊員には目を疑う様な戦闘力だった。

「砲撃だ!!」

更に追い打ちをかける様に、ジャングルに作られた砲撃陣地からの砲撃を受ける。

「ジャップの奴ら、これまで以上の反撃をしてきやがる!」

「戦車が遣られる。ジャングルに逃げろ!」

急いで、海兵隊員は来た道を全速力で逃げて行く。

「敵戦力の撤退を確認。」

「追撃はどうします？」

「心配ない。ジャングルの中を、適当に砲撃してやればいいよ。爆撃もな。」

続き、第五航空戦隊とブインから出撃した爆撃隊と、ジャングルの中にある砲撃陣地が海兵隊員が逃げ込んだジャングルを徹底的に砲撃する。

「目標、前方のジャングル。派手に機銃掃射してやれ。」

零戦が低空にてジャングルの中を機銃掃射し始める。機銃掃射用に、機銃を下向きに備えておいてあるため、水平からでも対地攻撃が可能だった。

「ここまで一方的だと、逆に清々しいですよ。」

「無駄口叩くな。」

一旦上昇し、編隊を組み直して再度攻撃。

「敵は蜘蛛の子を散らすように逃げてますよ。」

空から確認した逃げる海兵隊員に対し、再び機銃掃射する。

「これで、降伏すればいいのだが。」

機銃弾を切らし、母艦目指して飛行を開始する。

―ガダルカナル飛行場―

「効果はあったでしょうか？」

「分かりませんが、少なくとも戦意は挫きました。後は、どう出るか。」

「もう沖には輸送船がありません。このままジャングルで彼らは餓死するか、戦闘で全滅するか、降伏するかです。」

そこへ、伝令兵が入ってきた。

「川口司令、敵の司令官と名乗る者が降伏交渉をしたいと言って来ていますが。」

「司令官？誰かね？」

「は、ヴァンデクリフトと名乗っておりますか。」

「川口さん、それは間違いなく、司令官です。」

「そうか。会うと伝えろ。」

「了解しました。」

その後、ヴァンデクリフトと川口少将が交渉。ハーグ陸戦条約を尊守することを条件にヴァンデクリフト少将以下、第一海兵師団は降伏した。

明かされる真実（前書き）

中国宣戦布告。理由変更しました。これでは、訳の分からないと言う者が出て来たので。

明かされる真実

米第一海兵師団が降伏したところ、平成では

―平成 自衛隊司令部―

「防衛相、中国機と思しき機体が領空を侵犯中。現在、対馬を越え、本土を目指しております。」

「対馬をか？西部航空方面隊に至急、スクランブル発進を命じよ。」

防衛相はすぐさま指示する。

「了解。飯塚西部方面航空隊司令部に連絡を入れます。」

―飯塚 西部方面航空隊司令部―

「了解。至急、戦闘機隊を出撃させます。」

命令を受け、築城にある航空自衛隊基地からF-2が2機、離陸した。

「こちら第8航空団、第6飛行隊。侵犯機を確認。警告を開始します。」

洋上にて飛行する中国軍戦闘機、J-10が一機。

「こちらは日本国航空自衛隊。貴機は日本の領空を侵犯中。我々の誘導に従い、至急領空から離脱せよ。」

無線でJ-10にそう呼びかけた。しかし、J-10は応じる素振りをみせない。

―自衛隊司令部―

「更に接近中。もうすぐ、日本本土上空に入ってしまうです。」

報告を受け、北里に伝える。

「撃墜しろ。これ以上、領空侵犯を続けるのなら、撃墜しろ。」

「は？ し、しかし。それには。」

「領空侵犯だけでも許せんのに！！これ以上、舐められてたまるか！！」

事実、今月にもロシア爆撃機が大胆にも空中給油を繰り返して日本本土外周を一周。自衛隊はこれに、何の対応も出来なかった。北里は無線機を掴み、

「撃墜命令を下す。撃墜しろ。」

そう伝えた。結果は、どうなったかご想像にお任せする。

―新宿区―

「本日、中華人民共和国は中国軍機撃墜の謝罪に応じない日本政府に対し、日本円で120億円の賠償金を要求してきました。」

このニュースは、突然新宿にあるテレビなどで放送された。

―首相官邸―

「それで、中国は支払いを拒否したらどうすると？」

緊急閣僚会議を開いた総理の西澤総理は外務大臣に問う。先の国家反逆罪を犯した外務大臣は発言力をかなり失っている（日本の憲法上、国会議員の最中は任期を全うするまで逮捕することが出来ない）。しかし、今は外交問題なので外務大臣が発言せねばならないのだ。

「はい、それが・・・支払いを拒否した場合。武力行使も必要な措置として考えている。だ、そうです。」

「全く、あの国は大きくなりすぎて今や自分たちが世界を支配しているとまで錯覚している。」

撃墜命令を下した北里は怒り気味に言う。そこへ、隣の部屋に居た役人の一人が大慌てで入って来た。

「そ、総理。たった今、アメリカからの声明文が届きました。アメリカは、日米安保を破棄し、在日米軍とその家族を、日本から完全撤退させるようです。」

その瞬間、閣僚等は黙りこくった。北里は椅子を思いっきり蹴飛ばし

「身勝手なアメリカめが!!、我が国に散々経済的な援助をさせておいて、いざ旗色が悪くなれば見捨てるだど!?!」

完全にブチ切れた。

「まあまあ、落ち着きたまえ防衛大臣。むしろ、君にとっては都合が良いのではないのかね?」

西澤は北里を見て言う。北里は蹴飛ばした椅子を直して、

「まあ、確かに。これで、アメリカがあの時空トンネルを見つける危険性は無くなりました。しかし、裏を返せば不味いですよ。今、我々に中国を攻めに行ける兵力はありません。何より、打撃力を与えられる長距離爆撃機が憲法上、保有できませんでしたので。」

憲法9条で長距離攻撃機の保有が日本は出来なかった。空母は、何とか手を回して建造できたが、爆撃機まで手を回すことが出来なかったのだ。

「元々、アメリカを頼りすぎたのが我が国の間違いだったのだよ。これで分かっただろう?、外務大臣。アメリカは我々の経済力が欲しかっただけだ。初めから、守るといのは名目に過ぎなかったのだよ。」

北里はただそれだけを言う。

もし、日本が中国を先に攻撃すれば報復と言う名目を中国に与えてしまう。しかし、中国が先に攻撃すれば、防衛と言う名目が立つ。そうすれば、国連での立場も有利になるのだ。領空侵犯機への攻撃は、防衛上の理由から国際法でも一応認可されている。だから、これは特に審議へは影響しなかった。

中国側の要求を蹴って3日間。国連での審議が続いた。結果は、日本にとって残念他ならない。変わり続けていた国の指導者で、日本の影響力は皆無であり、ヨーロッパなどは日本に見向きもしなかった。ヨーロッパ最大の同盟国、ドイツは日本に可能な限りの支援をすと言ったので、日本は少しは救われたが。完全な防衛力の提供を要求してくれたのは南米やアフリカ、南アジアだけだった。

―首相官邸―

（理不尽な恐喝に我々は屈しないぞ。それを、我が国を見捨てたアメリカ。そして、ヨーロッパに見せつけてやる。）

西澤がそう決心した時、部屋に黒い煙が現れ始め、それが人間の形に成り始めた。

『突然現れたご無礼はお詫びします。』

その煙人間は機械音声みたいな声で言い、西澤に一礼する。煙だが、その男は和服版スーツみたいなのをピツタリと着込み、ネクタイまで確りとしている。何処かのお役人の様な格好だった。

「だ、誰だ君は？」

西澤は慌てた表情でその煙人間に聞く。

『信じがたいでしょうが、私は別次元の未来の日本から来た、貴方と同じ日本人です。私は、時空管理省の、そうですね、水戸、とても名乗っておきましょうか。』

何やら本みたいなのを開いてそう名乗った。

「つ、つまり。多次元世界の日本の未来から言う事か？」

『ええ。ちなみに、あの時空ホールをこの世界から太平洋戦時中の昭和に繋げたのも我々です。』

「な!？」

そう言いながらも、西澤は少しずつ後退して行き、机の所まで来る。机の裏側に、警備員を呼べるボタンがある。それを押そうとするが

『無駄です。時計をご覧ください。』

突然言われ、西澤はビクツと驚く。が、言われたとおりに時計を見ると。

「と、止まっている？」

『はい。あ、時計を止めたのではなく、時間を止めたのですよ。』

「これは、夢？、なのか？」

『そう思うなら私の話を信じなくても構いません。しかし、信じなかった場合の損害は計り知れません。』

西澤はその煙人間の話を信じるか信じないか迷った。目の前の煙人間を乱心者だと思えばそれまでだが、今は藁でも縋るべき時。騙されたと思って信じる事にした。

「分かった。君の言っていることを信じよう。」

『では、続きを始めます。貴方方は今、大変な窮地に立たされていますね。その理由は、アメリカに頼りすぎた為の軍事力の欠如。』

「その通りだ。」

『そこで、我々はあなた方に幾つかの兵器を提供しましょう。中型空母2隻とその護衛艦、艦載機。そして、富嶽』

最後の言葉を聞いて西澤は驚く。

「ふ、富嶽だって!？」

『ご存じのですか?』

「昭和から生産要求が来ていた所だ。しかし、何分大型機の生産が慣れない我が国にとって中々上手くいかなくてな。」

『そのジェット版を提供します。400機ほど。ご安心を。一機当たりの搭乗員は僅か3名なので。殆どがコンピューターで制御をし

てくれますし、防御用の機銃はミサイルも戦闘機も迎撃可能です。艦載機も無人なので新たな搭乗員育成は必要ありません。空母などの艦艇もほぼ全てがコンピューター制御なので乗員は100名も要りません。』

「うむ、確かに凄いな。」

『それでは、交渉成立ですか？』

「あ、ああ。」

握手しようと西澤は手を伸ばすが

『すみません、見ての通り私はそちらの世界では実体化できていませんで、触る事は出来ません。物なら可能なのですが。』

そう、断られる。まあ、仕方がないと言えば仕方がない。

『では、交渉成立と言う事で。明日、全てお送りします。そうそう、北海道に突貫滑走路を造っておいた方がいいですよ。ハンガーなどはこちらが提供しますので。』

「わ、分かった。」

それを聞き、煙人間事時空管理省の水戸は姿を消した。

明かされる真実（後書き）

いやー、本当はレシプロ機の富嶽を出そうと思ったのですが、感想でジェット富嶽の事を書かれちゃあ無理でも出すっきゃないっしょ。と、言う訳で。計画と違いますが、ジェット富嶽の活躍、お楽しみに。

届けられた兵器

―平成 横須賀―

「本当に、ここに現れるのかね？」

「はい。」

西澤は閣僚等を連れて水戸と名乗った時空管理省の人間が示した時間の数分前に横須賀海上自衛隊の基地に居た。

「しかし、何にも変化がありませんが。総理、本当にここで宜しいのですか？」

北里がそういった時、黒い霧が出始め、そこから中型空母2隻とその護衛艦が現れた。

「す、凄い。」

その中型空母はエンタープライズの横に2隻とも停船し、護衛艦はその周囲を取り囲む形で停船した。

『お気に召しましたかな？』

つと、いつの間にか背後に黒い煙で構成された水戸が立っていた。

「あ、貴方は？」

西澤以外は聞いていたが、水戸と会ってはいなかったので驚く。

『これは失礼。私は時空管理省の水戸と言う者です。貴方方に簡単に説明すると、並行世界の未来の日本から来た者です。』

つと、閣僚等に一礼をして改めて名乗った。

「それで、水戸さん。この空母や護衛艦に殆ど乗組員は必要ないと聞いたのですが・・・。」

北里は西澤に言われていた事を改めて問う。

『ええ、乗組員は100人も要りません。この空母を始めとする艦艇はこちらの世界で言うバイオ・コンピューターで、簡単に説明するとロボット艦艇です。制御を始めとする殆どの事をコンピューターが行い、艦載機は全てが無人化されており、機関室などに数名を配置するだけで十分です。』

「む、無人機ですと？」

北里は驚いた。無人偵察機などは既に実用化もされているが、無人戦闘機は初飛行をようやく終えた段階であり、実戦配備にはまだ5年以上かかる代物。そんな物を既に持って来たのだから。

『はい。艦載機はこちらの世界で開発されたF-19戦闘機を45機搭載しております。その他には、電子戦機を8機、対潜ヘリを4機、E8早期警戒機が2機です。』

「F19か。消えた戦闘機ナンバーとして有名な数字だな。」

F19戦闘機は実在しない戦闘機ナンバーで、架空戦記などには案

外有名な戦闘機ナンバーである。

『ええ、こちらの世界ではそうになっているそうですね。この戦闘機は電磁力推進と、垂直離着陸用の反重力エンジンを搭載しております。』

「反重力エンジンって、あの。」

反重力エンジンは二個の円盤が回転することで空気の質量よりも軽くなり、上昇や下降が自由自在に行える画期的なエンジンである。しかも、通常の垂直離着陸と違い、高熱のジェット噴射を地表に向けて排出しないから、地表を痛める事も無い。

『ええ。こちらの世界では確か・・・サンディー・キッド氏が発明した、っと記されています。』

また、本みたいなものを開いて言う。

『こちらの世界では、既に1830年代から存在していました。』

改めて、水戸の世界の科学力が進んでいることを実感した。

「では、直ぐにでも実戦が可能なのだな？」

『はい。マザーコンピューター、この艦の中枢コンピューターには我々の世界で起こった全ての空母戦闘のプログラムが入っており、何よりも学習機能を持っております。そして、自艦の安全を最優先に考えます。』

「それは素晴らしい。では、この空母は絶対に沈むことは無いのか

ね？」

『はっきりとお答えすることは出来ませんが、正直に言うともう考えられません。』

「絶対に沈まぬ不沈艦。人類の夢だな。」

『では、私はこれで。そうそう、富嶽も一週間後にお送りします。』
そう言い、水戸は姿を消した。

1週間後、

―十勝基地―

北海道の十勝に突貫滑走路を造り終えたその時、失明すると思えるほどの光が現れ、ハンガーなどの空港設備から400機の富嶽やらが送られてきた。

―首相官邸―

「これで、反撃の準備は整った。何時でも、中国と事を構える態勢に自衛隊も入った。航空兵力などの主力も、九州などの中国方面に配置し、防空体制は完璧。」

「海自も、残った兵力の大半を呉や佐世保方面に移動させました。」

また、退役して解体待ちの艦も再就役をさせて戦闘態勢に入っております。」

「そうか。やはり、解体待ちは正解だったな。」

そこへ、隣の部屋に居た連絡員が入ってきて

「総理、中国政府が我が日本へ、宣戦布告しました。」

「そうか・・・諸君、我々は二つを相手にせねばならない。昭和の連合軍と、平成の中国。厳しい戦いになるかもしれないが、我々には科学の進んだ並行世界の未来の日本が付いている。挫けてはならん。勝利を治めるのだ。戦後初、大勝利をな。」

2021年9月27日。中国、日本へ宣戦布告。日本は平成の世に似合わぬ、泥沼の戦争に参加する事となった。

戦争準備

―自衛隊司令部―

「それで、中国軍の動きは？」

西澤は、自衛隊司令部にて防衛大臣の北里に中国の動向を聞いた。

「はい。中国は既に上陸作戦の準備に入った模様です。」

「そうか。それで、上陸予想地点は？」

「予想ですと、恐らくは沖縄辺りに上陸するでしょう。我が軍は、用済みの米軍基地に航空兵力を置き、陸自の戦車もある程度配備しました。」

「そうか。」

「それと、気になることが一つ。中国空母打撃群です。中国は、空母『瓦良格』と『李牧』^{リぼく}があります。幸い、艦載機の性能と艦の性能では我が海自の『飛鳥』^{あすか}と『奈良』^{なら}の方が勝っています。」

「しかし、中国政府は他にも6〜7万t原子力空母を持っているのではないかね？」

「ご安心を。それは、予算の問題上からまだ戦闘が出来る体制ではありません。だから、富嶽を使って停泊しているところを攻撃すれば十分に破壊できます。」

作戦は完璧だった。既に、空母部隊が佐世保方面に移動できており、陸自の高射砲部隊なども北海道の十勝富嶽航空基地を守る部隊を除いてほぼ全てが中国地方や九州地方に移動しつつあった。

「問題は空母を見失わない事だ。」

西澤も、日本の地理上の不利を実感していた。

「はい。我が国は四方を海で囲まれており、空母なら何処へでも攻撃する事が可能です。突然の奇襲も考えられる事です。なので、海上警戒も厳重に執り行うように伝えてあります。」

日本は四方を海に囲まれており、実はとても攻めやすい国でもあった。勿論、上陸する事は困難ではあるが、空母からの航空機攻撃では何処からでも何処へでも攻撃でき、警戒手薄な東北を攻める事も出来る。

「各空自基地には戦闘機を中心とする部隊を配備し、東北では輸送機を、北海道では警戒機を主に配備しております。」

「分かった。それで、具体的な戦力比はどうなのかね？」

「そうですね。中国海軍の駆逐艦などは正確な情報が分からず、少なくともこちらと同レベルの戦闘力を有していると考えるのが妥当でしょう。空母は、先ほど言った通りに性能面ではこちらが秀でており、負ける事は考えられません。戦車は、中国最新式の14式戦車が何処までの性能なのかは不明ですが、10式でも十分に対抗出来るものです。爆撃機は、我が空自に掛かれば朝飯前ですが、戦闘機は侮れません。Su27は中国地方の一部まで航続距離を収めており、格闘戦になれば辛いかもしれません。幸い、練度ではこちら

が幾らかの分があります。Su30は正確な戦闘能力が分からない為、何とも言えません。」

「そうか。まあ、空自には頑張ってもらうほかあるまい。」

「士気は高いと保証します。アメリカから少数ですが提供されたF22と無人機は不可能ですが、F19をある程度まで性能を再現した戦闘機が4機あり、今現在でも生産中です。」

「ふむ。日米安保を破棄される前に提供されたのが業を煮やしたな。」

西澤は取りあえずは戦力的には勝利できることが分かった。後は、現場の指揮官しだい。優秀な人材の大半は太平洋戦争に駆り立ててしまい、少数のエリート指揮官で何処まで巻き返せるかが見物でもあった。

「我々の打ち上げた偵察衛星『神風』が、何処までの情報をもたらしてくれるのかにも掛かっている。北里防衛大臣、指揮を、取り違えんようにな。」

「は。分かっております。」

東郷建造計画の裏で始動していた日本偵察衛星打ち上げ計画。新しい観測衛星としての名目で打ち上げられており、実際に今までも太陽の観測を行っていたが、その裏では軍用としての偵察衛星としても機能できるようになっていた。

『日本国民の皆さん。昨日、中華人民共和国は我が国へ宣戦布告しました。』

このニュースは国内に衝撃を齎した。親中派でもある左翼は必死にあり得ないと街頭宣伝を繰り返し、右翼は今こそ国家として立ち上がるべきだと左翼に対抗して街頭宣伝を行った。これを受け、東京は戒厳令を発令し、軍の移動が何よりも優先化された。

『我が国は、この不当の宣戦布告に対して国家的な反撃。即ち、自衛権を行使します。そして、場合によっては憲法を改正し、中国本土への上陸攻撃も行う覚悟であります。』

発電所などの重要施設には自衛隊が警備を行い、鉄道なども路線が減少し、自衛隊の軍用列車としての運航が増えた。海上も観光などでの航海を禁止され、漁業も領海までの漁業範囲（つまり、経済水域での漁業禁止）とされた。

『憲法改正については国民投票は行いません。国会での審議のみで、憲法を改正いたします。』

全ての権力が戦時特例として国会に集まり、全ての指揮権と併合して戦時のみの絶対国会が成立した。これは、戦後の異例として、後世歴史に記されるだろう。

— ホワイトハウス —

「日本は俄然やる気そうですね。」

アメリカ国防長官『ジョン・ハワード』が大統領執務室に居る大統領に言う。

「日本人は本当に理解できないよ。突然、強大な軍事力を保有しだし、あろうことか大国である中国に反撃すると言ったのだから。」

「日本を見捨てた、貴方が言えますか？」

「日本とは、そろそろ縁を切るべきだと考えていたからね。お荷物でしかないあの国、もう毒を抜ききり、全く抵抗できない犬に成り下がったあの国に我が国が付いている必要が無くなったのだよ」

米大統領『ケンリー・フォード』が国防長官に言う。

「日本は勝てる思っていますか？」

「思わないね。日本の兵力は脆弱すぎる。それに、愛国心の欠片もない国民が、今の中国との戦争に賛成しきるとは思えないよ。」

「確かに。日本人が、世界で一番愛国心の無い民族ですからね。」

「かつての大日本帝国のような、御国の為なら死ぬと言う様な自己犠牲精神の持つ愛国者は居ないのだ。」

ケンリー大統領は日本の神風特別攻撃隊をアメリカの教えから反し、愛国者の鏡と言っている。国の為に死んでいった、たとえ敵国の兵士いえど、狂っているなどの様な暴言を吐く気にはなれなかったのだ。

「国防長官、この戦争はどちらにも介入しない。終わった後、勝った国から全ての利権を横取りするのだ。いいね？」

「はい。分かっております。大統領。」

国防長官は部屋から出て行った。

（東洋の黄色猿が、せいぜい我々の手の内で踊っている。貴様らの勝者への利権は、丸ごと全て我が合衆国が頂くのだから。）

野心を剥き出しにするアメリカ大統領の動き。世界は、アメリカの手の内で踊るだけなのか？

軍事戦略

―首相官邸―

「では、アメリカは信用してはならないと。」

「はい。」

首相官邸に戻った西澤の下に未来人の水戸が現れ、アメリカの現状を伝えた。

「そうか。これで、本当に信用すべき国を失ったな。」

「我々としては、やはり貴方方に一番理解を示してくれているドイツを頼りにすべきかと思います。」

「ドイツを、ですか？」

「はい。国連での貴方方の訴えに一番理解を示してくれた唯一の欧州国家はドイツだけです。」

「確かにそうですが、我々にアメリカ離れをしろと？」

「先ほども話した通り、アメリカは戦勝国からすべての利権を横取りしようと考えています。アメリカに対抗できるようにするには、貴方方がかつて、手を結び、共に世界を相手にし、今回で一番理解を示してくれた欧州国家ドイツがあなた方の一番の理解者なのです。」

「

水戸の言う事も筋は通っている。力に物を言わせて無理やり条約に調印させ、都合が悪くなると勝手に破棄して日本から撤退したアメリカよりも、理解を示してくれた欧州最大の友好国、ドイツが新たな条約相手に相応しい。

「それと、講和への件ですが、中国にはワンサイドゲーム以外の講和手段はありません。」

「ワンサイドゲームか。しかし、現実には中国との兵力差は歴然です。質は上でも、数で押されれば敗北します。」

「私が政府にて協議した結果、あと一つ。提供できる事が決定しました。」

「あと、一つ?。」

「本職は、戦車が宜しいと考えております。陸の主力にして花形の戦車で、中国陸軍を完膚なきまでに壊滅させるのです。」

「戦車ですか。」

「我々世界では、貴方を上回る科学力を持っている事ぐらいは既に分かっていますでしょう。レールガンはご存知ですか?」

「あ、ああ。磁力を利用して物体を超高速で撃ち出す物だろう。確か、アメリカが実験的意味合いで軍艦に搭載したとか。」

「我々の世界では勿論軍艦にも搭載しておりますが、それが歩兵携行用に小型化もされており、戦車砲としても存在しています。貴方は、あと30年ほどは掛かる技術です。」

レールガンの戦車搭載は検討されているが、問題は発射の時の電力をどのように供給するかが問題でもあり、なによりも小型化せねば話にならなかった。

「その戦車を200台、何とか提供できるようにしましょう。」

「200台も」

「性能についてご説明します。」

そう言って、スイッチを押す。すると、壁にあるスクリーンが降りてきて、画面に戦車の3DCG映像が投影された。

「これは、我々の世界で第6世代戦車に当たるためMBT6と呼ぶレールガン搭載戦車です。装甲は我々の世界で発見されたゼネラルミツクと呼ばれる特殊な材質で出来ており、こちらの世界での戦車砲なら後部ですら貫く事は出来ません。」

簡単に言うと、通常の陸上兵器では破壊する事は出来ないと言う事だ。

「そして、主砲はこちらの世界で言う日本製鋼所に当たる国営鉄鋼工業が開発・製造している34式レールガン砲です。初速は秒速800mと言う恐るべきスピードであり、こちらの世界でこの戦車砲に貫けない物体は存在しません。中の装備は10式戦車と共有できるようになっており、コンピューター制御も可能なため、訓練の必要はありません。」

「そんなにか。」

「そして、一番心配しておられる重量と速力なのですが、ご心配なく。35tと言うこちらの世界では考えられない重量なので。」

「3、35t。」

35トン戦車は、可能性的にはイラクのズルフィクアが考えられるが、性能がほとんど謎の為、詳細は不明である。現代の戦車は主砲が強力になり、装甲なども厚くなっている為、重量が増え続けている。だから、何か革新的な発明が無い限りは今後も戦車の重量は増え続けていく。

「ははは。35tで驚かないで下さいよ。フランスのメラバルなんか22tですよ。」

「め、目眩がしてきた。」

「次に速力ですが、履帯を外したら整地で120?、不整地で106km。履帯在りで整地は90?、不整地は72?って所です。この戦車から逃げられる戦車はこちらの世界には存在しません。」

つまりは、この戦車と遭遇したら破壊されるぐらいしか選択肢が無いと言う事だ。中国兵、ご愁傷様。

「発射時に使われる電力は、車体に小型自動化された原子力発電があります。1基当たりの発電量があなたの方の建造した東郷の総発電量と同じです。ちなみに、破壊された時には自動的に原子炉が閉鎖される様になっていますので放射能漏れはありません。」

「貴方方の世界には戦争での戦死者が少なさそうだ。」

西澤は冗談めかしに言うが

「そうでもありません。貴方方の世界で最強と思われる核兵器は、我々の世界では過去の遺物となりました。核を超す新兵器、粒子兵器が発明されたのです。」

「粒子兵器？」

「超粒子を、超光速で飛ばし、人体や建物を貫通して死に至らしめ、破壊する大量殺戮兵器です。これが、中国に投下されて、一瞬にして11億5000万人と言う人命を奪い、中国西側の都市は50年間は復旧に掛かると言われるほどの損害を被りました。今では、国際条約でこの兵器の製造と使用を一切禁止されましたが、裏では製造している国があるのではないかと言われているのが現状です。」

現在の核兵器でも、せいぜい殺せるのは100万人前後。その100発分の威力を粒子兵器は1発で示したのだ。

「では、戦車は明日には納品できると思います。では、私はこれで」

もはや、武器の輸送だとなつと、西澤は思った。それと同時に、科学の進歩が人間を豊かにし、また、不幸にすると言う現実を辛く、心にとめる事となった。

—昭和 軍令部—

「ガダルカナルの早期戦力化は成功だったそうじゃないかね。」

軍令部総長の永野修身は会議の場で言う。

「恐れ入ります。」

「貴君の情報提供通り、米軍はガダルカナルに上陸。大損害を被って降伏させ、艦艇や航空機も相当数の損害を与えたと報告が入っております。」

「影鎖中将、海自の戦力は相当当てになると言う事が分かった。これを機に、一気にアメリカに進攻しようではないか。」

海自総司令の影鎖は資料を取り出して報告した。

「現在、新型航空機が続々と生産されており定数を揃えるまでは本職としては進攻を控え、守りに徹するべきかと。」

「平成の軍は、そんなにも弱気なのかね？」

「本職としては準備無しに大国のアメリカに攻撃を掛けること自体が無謀だと申しているのです。制空権なしでは、戦いは敗北します。」

「君たちには、大和魂というものが無いのかね？」

「魂と戦場は違います。精神論だけで、近代戦は勝利できないと言う事を。中国で、学んだのではないのですか？」

実際、中国戦線は泥沼の一途を辿っている。

「大和魂無しで、戦争に勝利できないのです。圧倒的な物量も限りがあります。しかし、精神は無限です。」

それを聞いた瞬間、影鎖はそれを言った将校に拳銃を突きつける。

「な!？」

場は騒然となった。警護兵が数人入って来て、拳銃を構える。

「貴方が言う無限の精神で、この拳銃の弾が避けられたら。精神の無限を信じましょう。試して、見ますか？」

引き金に掛けた指に力を入れる。

「待て、落ち着け。」

なお、指に力を入れる。そして、カチッと、撃鉄が打っただけだった。それを見て、拳銃を突きつけられていた将校は床にへたり込む。

「これで、精神論で勝てないと言う事を。お分かりいただけただろうか？」

永野は警備兵に退出を促し、立ち上がっていた将校らに席に着くよう命じる。

「分かった。では、貴様はどうしたいのだ？」

「次に、米軍が来るとしたら、ここです。」

立ち上がり、地図の一か所を指す。

「なるほど。ギルバート諸島か。」

「はい。この周辺がアメリカが進攻する可能性のある地域です。」

「根拠は？」

「海自の潜水艦にハワイを近海に接近させて情報収集を行わせているのですが、その中にガルヴァニック作戦と言う単語がありました。これは、大東亜戦争中にアメリカ軍がギルバート諸島進攻時に名付けた作戦名です。史実と違い、暗号解読で輸送船は付けず、航空攻撃のみと言う事は分かりました。早急に、空母部隊をここに配置すべきかと。」

「しかし、そんな根拠で艦隊を動かすわけにも。」

「隼鷹と飛鷹を中心に龍驤と空母の護衛部隊を配置させてください。後は、海自も参加して敵を撃滅してご覧に入れましょう。」

「まあ、そのくらいなら出してやるか。」

「それと、万が一の為に第一航空戦隊にはナウルに待機させてください。ここなら、ガダルカナル方面に応援にも行けますし、万が一の時には我々の掩護も出来ます。」

沖縄

―自衛隊司令部―

昭和でアメリカの次の攻撃目標が選定された中、平成では中国軍が沖縄へ戦車隊と歩兵隊が上陸したのだった。

「それで？中国の空母部隊は姿を消したと。」

開戦から中国の空母部隊を捕捉していたのだが、沖縄に上陸したのを機に、大連から姿を消したのだ。

「申し訳ありません。まずは、沖縄へ上陸した中国をどのように迎え撃つかが先刻です。上陸物資を揚陸中なので、進撃する姿は捉えられませんでしたが、いつ、進撃を開始するか分かりません。」

北里は現在の状況を西澤等に伝える。

「沖縄が占領されれば、そこにある飛行場使用が出来る。そこを占領されたら、日本全てが連中の爆撃可能圏に入ってしまう。」

今でも、十分に爆撃が可能なのだが、距離は出来る限り短い方がいい。だから、沖縄占領まで日本本土への爆撃は抑えられている。沖縄へは数度、爆撃機が侵入するも。半数近くを空自のF15が撃墜した。

「問題は、中国のSu27です。原型機の初飛行は50年近く前ですが、未だに我々の第一線機と同クラスの戦闘力を持っています。そして、中国の新型機であるSu30は、増漕タンクを装備すると、

沖縄上空に2時間近く滞空できる能力を持っています。」

「何にせよ、制空権の確保を最優先とする。空自には、今一度頑張ってもらわねばな。」

西澤は沖縄の地図を見て言う。富嶽は、全て作戦稼働機として北海道の十勝に増設された飛行場に待機している。その周辺にも空自の戦闘機と飛行場内には陸自の弾道ミサイル迎撃システム搭載車や高射砲部隊が待機している。防空や弾道ミサイルへの対策は十分だった。

「首都防空隊は、交代制で24時間臨戦態勢を整えております。空母部隊は、一時佐世保から横須賀へと向かわせ、明日には到着します。」

「そうか。」

「それと、例の未来人が送って来たと言う戦車は半数近くを沖縄へ移動させました。あとは本土へ分散配置しました。分散は愚策ですが、あの戦車なら分散させても十分です。」

装輪戦車並みの速度と現代主力戦車を凌ぐ攻撃力と防御力、そして、信じられないほどの軽量のお陰で本土の何処へでも迅速に対応できる。

—沖縄—

「敵爆撃機、接近!!」

沖縄にある普天間基地は、もともとは米軍の所有物だった。しかし、日米安保破棄と米軍の撤退から現在は空自が使用している。

「戦闘機隊は、速やかに迎撃せよ。敵重爆は数20で、高度6000を飛行中。」

重爆としては低空侵入だった。低空から、重爆に似合わぬ精密爆撃を行う腹積もりだと空自は考え、急いで迎撃機を飛ばした。

「見えた、H-6、人民爆撃機だ。」

上昇したF15パイロットは高度6000を悠々と飛行する人民爆撃機、H-6を確認する。

「ミサイルは各機4本しかない。迎撃できるのは精々16か。後は、機銃で何処まで出来るか。」

無線で状況を伝え、迎撃に移る。

「敵機接近!!」

侵入したH-6のパイロットも空自の迎撃機を確認。防御機銃を向け、飛行を続ける。

「ミサイル、目標をロック。発射（フォックス2）。」

一本目のミサイルが各機から放たれた。狙いは一つ。爆撃機の弱点である爆弾倉。そこに命中した爆撃機は、火災で搭載兵器が誘爆を起こし、撃墜される。

（護衛機はなぜ、付いていないんだ？）

空自のパイロットも疑問に思うが、とりあえず一機めのそれぞれの目標を撃墜した。

その後も、離れた所から爆撃機を撃墜する事が出来たその時。

『至急、至急！！爆撃機の迎撃に昇った戦闘機は帰還せよ。敵の奇襲攻撃を受けている。』

突然の基地からの無線。

「遣られたな。この爆撃機は、到達できなくても良かったんだよ。本命は、基地の別方位からの奇襲。」

パイロットは直ぐに察した。だから、護衛機は居なかったのだ。

「遣ってくれたな。っと、言う事は。上空に電子戦機が居る筈だ。今まで、無線を妨害した機がな。」

上昇し、高度12000。予想通り、電子戦機のHD-6が飛行していた。

「畜生。撃墜する。」

機銃攻撃で辛うじて撃墜に成功するが、普天間基地は滑走路を破壊された。

『上空の飛行隊へ、滑走路は現在使用不能。使用可能な嘉手納飛行場へ着陸せよ。そこに、空自の沖縄方面主力航空戦力が駐留中。中国への反攻の為のな。』

「了解しました。」

日本最大級にして極東最大の空軍基地として米軍が使用していたが、前述のとおり米軍は撤退したため、現在は日本の空自が使用している。そこを反攻の為の空自の主力基地として使用しているのだ。中国も主力の集まる場所を攻撃はしなかった。犠牲は多いが、陸上部隊での占領を望んだのだ。

――自衛隊司令部――

「普天間基地は中国空軍のJH-7の奇襲攻撃で滑走路機能を喪失しました。駐留機は滑走路の回復を待つて運用する計画です。なお、迎撃に昇っていた航空機は嘉手納飛行場へ移動しました。」

航空幕僚長が報告する。

「そうか。では、中国との全面衝突は、陸自にお願いするしかないのか。」

西澤は陸上幕僚長を見ながら言う。

「お任せください。空自の掩護で制空権確保さえしてくれれば、我が陸自が上陸した中国を一掃してご覧にいきます。」

「それは心強い。そして、海上幕僚長。中国の空母部隊はまだ、」

「はい。海保も動員して搜索しているのですが、行方は未だに。」

「情報本部長、貴君も海自と協力して中国空母部隊の行方を搜索してくれんか？」

西澤は、今度は情報本部長の方を見て言う。

「はい。この空母部隊の行方が分からねば、我が国は最大の危機を迎えるでしょう。」

空母を外洋に逃がした責任は情報管理の行き届いていなかった情報本部にも責任があった。

「では、空自は各方面により一層の警戒態勢を引くよう、指示しておきます。」

空母から艦載機の奇襲を受ける、しかも、それが首都ともなれば最悪の結果を生むことになる。嚴重な警戒が必要とされた。

第二の本土決戦

―沖縄 自衛隊司令部―

「それで、上陸した中国軍は進軍を開始したと。」

「はい。上陸した糸満市の市街を走っております。」

中国軍は無謀にも糸満港に輸送船を横付け。大胆にも、その輸送船から兵が降りて港を占領してしまった。港を手に入れたと言う事は、海上からの補給物資の補給が迅速かつ効率よく行えるから、危険を冒してまで港に横付けしての占領をしたのだ。

「21式戦車はどうした？」

21式戦車。水戸が未来から送ってきたレールガン搭載の戦車だった。

「もうじき、戦闘が起こるでしょう。ワンサイドゲーム以外認めないと、防衛省から通達が来ています。」

「あの戦車がワンサイドゲームを実現できなければ、我々は逃げるほかあるまい。」

10式は対戦車戦闘よりも対ゲリラ戦を意識しての設計の為、性能で勝るとはいえ苦しい。18式は対ゲリラ戦を考慮したうえで対戦車能力を高めたこれまでの防衛型戦車とは違い、攻撃を想定した性能になっている。

「衛星映像で見物しましょう。我々のワンサイドゲームを。」

「ああ。派手に遣って、見捨てたアメリカを見返そうぜ。」

自衛隊の中にもアメリカの身勝手な撤退を非難する声が上がっている。特に空自と米国空軍との関係は非常に親密の為、この撤退は彼らに怒りも与えた。

—ホワイトハウス—

「彼らが一戦交えるそうだ。」

大統領執務室で、閣僚等が衛星から送られてくる映像を映し出しているテレビに釘付けになっている。

「兵力差は中国優勢。練度では日本優勢。しかし、練度は撃破すればなくなるのだ。太平洋戦争の戦訓を何処まで受け継いだか、楽しみだな。」

「中国はこの戦争で我が国が関わって来ない事を強く希望しております。」

「関わらんよ。少なくとも、この戦争にはね。」

中国は2020年にアメリカを抜いた世界最大の経済大国へと成長している。これにより、世界は少しずつアメリカ主導から離れ始めている。

「中国の『日本侵略計画』が始動しているのでしよう。彼らがこの計画の最大の障害であるアメリカが日本から手を引くまで待ち続けたのだろう。」

「日本は自国を防衛する力も、そう思う者も世界の比べて圧倒的に少ない。」

「まあ、どちらにせよ。この戦争で衰退しきった連中に我々が制裁を加えれば、例え中国が勝っても、再び世界一の経済大国の名はアメリカに戻るのだから。」

大統領は中国に世界一の経済大国と言う名誉を奪われたと思われており、国内での大統領支持者は少ないのだ。ここで、大統領が日本を守るために戦う。なんて言うのと、国内の知識人らは中国を衰退させて力づくで名誉を取り戻そうとした。っと、非難するだろう。

「両軍が会敵しますよ。」

―沖縄 糸満市―

「中国戦車確認。」

中国人民解放陸軍、最新鋭戦車14式戦車が140mmと言う巨砲をこちらに向けているのが分かる。待ち伏せは、失敗だ。

「撃て!!」

失敗と見るや一斉に主砲を放つ。発射と同時に狙っていた戦車が破壊される快感はどんなものだろうか。

「撃破しました。」

燃えている戦車を見て、思わず喜んだ陸自隊員。国を守ると言うのはあくまでも名目だけで、今まで領海侵犯や領空侵犯を幾度となく受けてきた。その度に出撃してはただ領海・領空外に誘導するだけ。たとえば、攻撃を受けても、こちらには攻撃許可が出なかっただろう。だから、思いつきり戦闘するのはある意味では自衛隊の夢であり、願望でもあった。

「何をボサツとしている。陣地移動だ。」

一回放ったら陣地移動。敵に狙いを絞らせない戦車戦の基本だった。

―ホワイトハウス―

「冗談でしょう？」

その光景を見ていた閣僚等は驚く。アメリカでも、戦車搭載用レールガンは、まだ構想の域を出ていない。

「一体、日本はどんな魔法を使ってこんな戦車を？」

「分からんな。まあ、理解できない国の代名詞が日本だ。^{ジャパン}あの国には昔から不思議な力があってな。本当に、神でも住んでいるんじゃないかって疑うぐらいの不思議な出来事が起こるんだよ。」

大統領は閣僚等に言う。彼は、当時の最強国家、モンゴル帝国が日本侵略を開始した時、圧倒的な大兵力で攻め込んだ。しかし、何れも世に言う神風で撃退された事を言っている。そして、あまり知られていないが、太平洋戦争中にハルゼーもまた、神風（特別攻撃隊ではない）を2回喰らって艦載機などかなりの損害を被っている。

「まあ、いまさらあの国に何が起っても。驚きはしないがね。」

大統領は不敵な笑みを閣僚等に見せるのだった。

爆撃計画

―自衛隊司令部 会議室―

「21式戦車は期待以上の性能を示したようです。」

沖縄から来た戦果報告を聞き、その報告を分析して如何に21式戦車がこの時代の戦車より卓越した性能を持っているかを思い知った。

「中国軍は上手く海岸線に撤退してくれました。これで、空自の出番がようやく来ます。」

空自の幕僚長はようやく自分たちに仕事が出来たと、正直ホッとしている。

「その前に、大連を富嶽で爆撃して頂けないだろうか？」

「大連？ですか。」

「そうです。そのドック内に中国の原子力空母『関羽』と『張飛』が居ります。それを爆撃によって破壊して頂きたいのです。」

北海道十勝台地に富嶽航空爆撃団が急遽創設され、空自のクルーの訓練を取りあえず突貫で終えることが出来た。元々、コンピュータ制御が多くて人間が行う事は操縦ぐらいしかない。データさえ入れば、寸分違わずに目標をどんな高度でも正確に貫ける為、爆撃訓練も殆ど行わなかった。

「あの富嶽は信じられない事に100%のステルス性です。爆撃の最中でも、機外に爆弾を取り付けても。レーダーに影すら移しません。」

現在でも、ここまでのステルス爆撃機は存在しない。機外に取り付けられれば、その取り付けたものがレーダー波を反射してしまい、捉えられる。しかし、この富嶽には特殊な合金が使われており、それが100%のレーダー波を吸収するのだ。

「それを使えば、中国軍に気付かれずに接近、任務を完遂できるでしょう。例えば迎撃を受けても、装備している全自動式機銃が迎撃してくれる。」

北里は機体のマニュアルを見ながら言う。そこへ、黒い煙が現れ、それが人間の形に成って、水戸が現れた。

『皆さん、会議中に失礼。』

そう言って一礼する。

「いやいや、水戸さん。貴方から提供された戦車は素晴らしい性能を示してくれましたよ。」

『それは良かった。しかし、一つ問題が発生しました。中国空母は、日本本土への攻撃を行う腹積もりの様です。』

「なに!?!。場所は?」

『残念ながら、そこまでは。ただ、日本近海に展開している事は申

しておきましょう。』

近海に居ると言う事は、何処へでも攻撃可能だと言う事。日本にとって、最大の危機でしかなかった。

『防空体制の強化をすべきだと、私は申し上げます。結果次第では、我々の政府がより貴方を信頼し、更なる兵器提供も検討する事を申しております。』

更なる未来技術は日本にとってこれ以上ないほど嬉しい。

「分かりました。防空体制の強化をしましょう。防衛大臣、今より24時間のスクランブル体制をとりたまえ。それから、横須賀から空母艦隊を小笠原方面に派遣、迅速なる行動を取れる様にせよ。」

「了解しました。」

北里は立ち上がり、駆け足で指揮所へと向かった。

「それと、空幕僚長。富嶽の出撃用意をしたまえ。」

「了解しました。」

空幕僚長も部屋を出て行った。

「水戸さん、この戦い。正直、どの様に終わらせるべきなのか迷っております。日本はアジアで完全に孤立しました。」

『そんな事はありません。周辺はそうでも。南方はあなた方に友好

的な国が沢山あります。それに、先日も申し上げた通り、ドイツが欧州で最大の理解国であるのです。この国を、何とか仲介役に持つてこれないでしょうか?』

「難しいね。国際連合に常任理事国になっていないから、戦争の仲介役は難しい。アメリカは信用できないし、・・・イギリスはどうなのだろうか?」

『イギリスの出方次第では仲介役に引き立てる事も可能と?』

「ええ。」

水戸は、暫く考える仕草をする。

『取りあえず、まずは本土の防衛を行うのが先決でしょう。最悪は、中国本土進攻も覚悟してください。』

「中国に進攻!?!」

水戸自身もとんでもない事を言っている事は分かる。腐っても人口が世界一の国。その気になれば日本など物量で押し切ってしまう国に直接攻めよと言っているのだ。

『終結にはワンサイド・ゲーム以外ない。中国を屈服させるには、まずは首都の占領、もしくはその恐怖を与える以外にありません。』

「し、しかし。」

『まずは本土防衛をお願いします。この結果次第では、先ほど申し上げた通り、兵器を更に提供します。』

そう言って、水戸は消えた。一人に残された西澤は

「本土防衛か。太平洋戦争下の日本軍部首脳の苦悩が今になって分かるとはな。」

B29迎撃が思うように出来なかった軍部は震天制空隊を結成するも戦果はあまりいい結果ではなく、最終的には正攻法で損害を増やし続けていった。

―平成 三菱重工業 本社 設計部―

「ようやく、設計完了だ。」

ここではほぼ不眠不休で奮闘していた二人の技術者が居た。一人は堀越二郎。零戦や雷電、烈風などの少なきながらも今でも伝えられる名機の主任設計を務めた日本の航空技術者。もう一人は彼の子孫にあたる堀越四朗。他の設計者は後退で仮眠をとって設計にあたっていたが、この二人はほぼ不眠不休で設計図を引き、コンピュータで計算していた。

「これが、日本の新型艦上戦闘機。」

そこには、一機の3DCGで描かれたD0335。それに幾らかの設計変更を加えて艦上戦闘機として再設計した航空機だった。シュミレーションでF6Fに圧勝、F8FやP51Dには互角かそれ以上の結果が出た。

「いやー。こちらの世界では設計がかなり楽ですね。このコンピュータのお陰で設計が早く終わりました。」

元々、存在している機体に手を加えて再設計するだけなのだからそれほど手間が掛からない。それでも二人の技術者の発想力には周りの者がついていけなかった。

「機体名は、貴方の設計する次期主力艦戦『烈風』から取って、これを『烈風改』と命名いたしましょう。」

機体名まで迅速に決まった。時を越えた交流は大きなものでもあった。次の日から、三菱の生産体制はほぼ、烈風改の生産で埋め尽くされた。エンジンも、液冷2000馬力のエンジンを搭載するなど、手を加えられた設計の為に生産はいまいち捗らなかったが、それでも旧式し始める零戦の後継が出来たことは大いに喜ばしい事であった。

意外な悪夢と対策

―自衛隊司令部―

「さて、軍事戦略も決まって良い所まで来た。しかし、問題が2つ発生している。」

北里は全員の前で言う。

「一つは、総理からだが。中国空母が日本近海に接近していると言う事だ。そして、もう一つが燃料。」

現在、日本の備蓄燃料はおよそ9000万KLまんきりゅうとるがある。その半分が今、自衛隊に使用できるようになっている。

「昭和への燃料支援と平成での燃料消費量を計算したところ、あと50日も持たないそうだ。」

西澤は、日本での石油開発が可能ではないかと思い、北海道などの石油開拓をしているが、現在でも発見されていない。

「防衛相。50日で、何処まで戦えるかね？」

「総理、50日とは民間の使用量も合わせての計算です。自衛隊が全ての備蓄燃料を使ったら、30日と持たないでしょう。そうすれば、国内の産業は停滞し、生産なんて出来ません。」

「30日か。そんな短期間で中国を落とすなど不可能だ。」

西澤は残念がる。折角、軍事戦略を決め、実行に移そうとしたその時に限って燃料が底を尽きかけているのだから。

「せめて、燃料消費量を減らせばいいのだが。」

「エネルギー相はどうお考えで？」

日本の新たな省『エネルギー省』が2016年に創られた。現在の大臣は永見栄司ながみ えいじが就いている。

「そうですね。総理の進めるエタノール燃料車を推進しましょう。エンジン換装で動ける様、各社に呼びかけていたのをお忘れですか？それに、予算を使って藻類プラントを全国へ造っておきました。」

西澤は総理就任後、ブラジルを幾度も訪問し、自動車政策を見て回った。ブラジルは世界で有数のエタノール燃料車が走っている国で知られる。エタノールの原料であるサトウキビがブラジルは世界一の生産数を誇るからだ。藻類とはワカメやコンブ、海苔などの物である。これは、大豆やトウモロコシなどのバイオ燃料よりも約70倍効率が良く、しかも収穫時期は関係ない。無資源国の日本として、これ以上ない程有難みのある次世代燃料である。

「メタンの開発もある程度まで終わり、これも燃料としての使用価値を見出しました。無資源国だからって、侮ってはいけませんよ。無資源国だからこそ、知恵を使ってエネルギー問題を解決しようとするのですから。」

石油の取れる大国は自国の石油を良いように使い続ける。泣かされるのは、日本の様に石油の取れない国。だから、石油の取れない国は石油に代わる新エネルギー開発に必死になっている。

「それに、東大の研究所で雑草が燃料に代わる実験に成功しております。これらを使えば、燃料がしばらくは持ちます。」

エネルギー相は無資源国故の不利を受けないよう、必死にエネルギー開拓を実地していた。その努力が実ったのだった。

「それで、それらを累計しての期限は？」

北里は永見の所を見て言う。

「そうですね、藻類は成長が早いので自衛隊の動く速さによりますが、現在では400日程度。」

「4、400日。」

「あくまでも、これは自衛隊のみのものです。民間等を入れると、その半分ぐらいですかね。」

永見は計算し直してデータを入力する。

「とりあえず、燃料問題はそれで解決だ。しかし、問題は中国空母偵察衛星『神風』の映像を解析したところ、小笠原近海目指して航行中の様だ。」

西澤は衛星画像をスクリーンに映す。

「現在、飛鳥を含む空母部隊が横須賀を出港。迎撃態勢を整えております。しかし、問題は既に中国空母が発艦可能状態にある事です。艦載機は飛行甲板のカタパルト上で待機しており、いつ発艦しても

おかしくない状況です。」

北里が補足説明する。

「それで、防衛相。攻撃目標は何処だと思っかね？」

すると、北里は二つの写真をスクリーンに映す。

「まず、小笠原近海を目指しているのなら東京を私なら狙います。もう一か所は。」

そう言って二枚目の写真をスクリーンに映す。

「浜岡原発。ここは、国内でも最大級の原子力発電所です。そして、ここが破壊されれば、ここより東部には死の雨が降り始め、爆撃で破壊できなかった東京を含めた関東までもが甚大の被害を受けます。」

「しかし、それならここだけを破壊すればよいのでは？」

「いえ。もし、ここが破壊されても、原子炉が未然に封鎖されれば意味がありません。そうした時の政治的意味を含め、東京を攻撃するんでしょう。」

「では、至急浜岡原発の運転停止を。」

「いえ。それも出来ません。浜岡を止めれば、中部地方の電力を賄うのは難しくなります。中部電力が唯一所有する原発ですので、変えも利きません。」

次に、浜松基地が映される。

「浜松空自基地には、F-15を主力とする練習部隊が居ります。実戦形式の訓練を何度も熟した優秀な練習部隊です。それに、浜岡周辺には高射部隊と03式中距離地对空ミサイルを配備しております。浜岡は安全と考え。」

「問題は東京だと?」

西澤は厳しい目つきで言う。

「はい。厚木や横須賀に同じくF-15を配備した実戦部隊が配備されておるのですが。数が足りません。スクランブル出来て両基地合計16機。中国空母の二隻合計は90機前後と言う資料がありますので。これを考えると数はやはり。」

「直ぐには、用意できんか?」

「残念ながら。」

「東京は、最悪は攻撃を受けると?。」

「はい。空母部隊が先に仕留められれば問題はありません。」

「では、急がせたまえ。東京に一発でも攻撃を受けてみる。私を含め、内閣全員の首がとんでもおかしくないのだ。」

「分かっております。総理。全力で、迎撃させて御たきます。」

―水戸の世界　皇居―

「緋巫女陛下、平成の日本は中国と互角に遣り合っております。」

皇居、謁見の間に和服版スーツ姿で現れた水戸は緋巫女と呼ばれた水戸の世界の天皇に一礼する。

「そうですか。私も、援助は惜しみません。別次元とは言え同じ日の本。一心同体なのです。」

「はい。心得ております。陛下。」

「真清軍需相。あなたも、技術提供を惜しみなくするように。」

（水戸Ⅱ）真清は立ち上がり

「勿論です。この援助許可は全て陛下の御心によって行っております。次は、88mm歩兵携帯砲とそれを持つのに必要な手袋を始め、幾つかの兵器を提供しようと考えております。」

「あの、歩兵携帯砲を？」

「はい。あれなら、戦車は無理でも装甲車は十分破壊できると思われます。歩兵は一溜まりありません。」

「確かにそうですが、悪戯な兵の犠牲は、たとえ敵国でもあまり認できないのですが。」

「陛下、人間が愚かだと言ったのは陛下の筈です。人間は、戦争が

駄目だと分かっているにも関わらず、戦争をする。戦争を無くすには、人間が絶滅する必要があると。」

「確かに言いました。しかし、民は国に居ねばならぬ者。その無暗な犠牲はあまり容認できません。」

緋巫女は立ち上がり、真清の許へ近づいて来る。

「いいですか？、真清。戦争とは、本来はスポーツで遣らねばならぬもの。スポーツに犠牲はありますか？兵器の提供はあなた一任します。しかし、その兵器の提供による多くの犠牲は、貴方が一生償っていきなさい。」

「元より、覚悟の上です。陛下には、ご迷惑をお掛けしません。明日は、御前会議。確りと休養をとって、明日に備えてください。」

「はい。」

緋巫女は背を向け、奥の天皇公室へと入って行った。

ギルバート諸島 1

―ギルバート諸島―

「空母部隊の配置が完了しました。」

作戦通り、空母部隊がギルバート諸島周辺に配置され、主力の空母部隊がナウル周辺に配置された。

「アメリカ海軍は動いておりません。ハワイに派遣された潜水艦は補給の為にトラックへ向かっております。」

東郷の飛行甲板で海を眺めている林原に尾上が報告する。

「副長、それではアメリカ軍の動きが掴めではないか。最悪は、奇襲も受けかない。」

「ルオットなどの飛行場に陸攻や戦闘機を配備しております。それに、我が艦は航行無しでも電磁力カタパルトで発艦も可能です。」

空母は現在でも発艦には全力航行が必要となる。しかし、東郷は電磁力カタパルトの装備で航行無しでも発艦が可能であった（実際は不可能）。

「パイロットは十分に休養を取らせておけ。」

「了解しました。」

ーハワイ 太平洋艦隊司令部 作戦室ー

「作戦を説明する。」

作戦部長のキングが映写機に投影されているギルバート諸島の地図を見ながら言う。

「本作戦でここへの攻撃は囹であることを最初に言っておく。目標は、日本本土。」

日本本土はドゥーリトル中佐指揮の部隊が世界初の空母から発艦、帝都を含む数か所を爆撃後に中国大陸に飛び去った（一部はソ連）通り魔爆撃でアメリカ軍の士気高揚を果たした。それをガダルカナルとミッドウェー敗北で再び厭戦気分になっている国民を含め、活発化させようとルーズベルト直々に考案された作戦であった。

「本土爆撃作戦の作戦名は『エンペラー・ブレイク』。日本の天皇^{エンペラー}の住処である東京目掛けて爆撃する。これで、日本軍部を。そして、天皇の影響力を崩壊させるのだ。」

作戦指揮には、日本本土爆撃を指揮したドゥーリトル准将が直接搭乗して指揮する。艦隊指揮官には同じく東京空襲を指揮したハルゼー中将が当たる事となった。

「貴官らに与えられる空母は一隻だ。ホーネットがようやく修理を終え、投入できることとなった。エンタープライズは応急修理され、ワスプと共にギルバート諸島攻撃に参加する事となった。」

エンタープライズはガダルカナル作戦で空襲を受け、中破していた。

しかし、応急修理で戦闘可能なまでに修復することが出来、投入されることになった。なお、ヨークタウンの教訓から、応急修理は泊地にて完工された。

「攻撃のタイミングや経路などは貴官らに一任する。我々が言いたいことはただ一つ。作戦を必ず完遂せよ。ただ、これだけだ。」

「了解しました。キング作戦部長。」

ニミッツは敬礼をし、キングは作戦室から出て行った。

―太平洋艦隊 長官室―

「長官、本気で東京を攻撃するののか？」

ニミッツの下にハルゼーがやって来た。

「俺は南太平洋で奴らの新兵器を見た。何処までも追いかけてくるロケット、遙か遠方の敵を捕らえる電波兵器。こんな警戒嚴重の中をどうやって日本本土に近づけばいいんですか？前回だって、予定されていた所まで行けなかったのに。」

前回でも、日本近海へ到達する前に日本の巡視船が発見し、報告している。残念なことに、この報告を日本軍は生かし切れなかったが。

「それは分かっているつもりだハルゼー中将。君が弱気なのも珍しい。私も、正直今回の作戦は疑問を感じる。大統領の支持を獲得するために、我々を死地に追いやるようにしているのではないかと感じる。」

「だったら、なぜ抗議しない！？サラトガは沈み、ここで空母を失えば、もはや反撃する戦力は皆無に等しくなるぞ。」

「分かっていると言った筈だぞ、ハルゼー中将。損害の責任は私が取る。君らは作戦の完遂だけを考えたまえ。今日、ホイラー飛行場にドゥーリトル准将指揮の爆撃隊が到着する。それが積み込まれ次第、出撃したまえ。」

「また、B-25ですか？」

「そうだ。前回と同様に軽量化されている。」

「前は初めてだから成功したようなもの。今回は警戒嚴重の中を行って帰ってくる。最高のシチュエーションだ。遺族らが聞いたら泣いて喜ぶよ。」

「皮肉と受け取っておくよ。」

海軍帽を被り、ハルゼーは長官室を後にした。

「ハルゼー、私だって今回の作戦に反対だと言う事を、忘れるなよ。」

ニミッツは、窓の外に見えるホーネットなどの空母群を見ながら言う。

—軍令部 作戦室—

「ギルバート諸島へ艦隊の配備は終了しました。」

「艦隊も補給を終え、何時でも攻撃が可能です。」

机の上に現地の海図と艦艇を模した模型を置く。飛行場などの位置関係を再確認し、現地へ送受信可能な暗号無線機が設置された。

「新型の艦上戦闘機の力を見せてもらおうではないか。」

零戦42型は零戦22型をモデルに液冷エンジンに変えられ、20ミリ機関砲を主翼に4門装備した艦上戦闘機であった。他にも機体の至る所を改造されている。エンジンを液冷にしたのは、後に登場する烈風改の為に今から液冷エンジンの運用ノウハウを掴むための措置だった。

「あの艦戦は、これまでの零戦と違い、速度と航続距離、攻撃力などが格段に向上されております。急降下速度も調整を受け、780?まで向上しました。その他、機関砲はこれまでの99式と違い、マウザーを国産化しました。」

ドイツの20mmマウザー砲は日本の99式と違い初速や発射速度なども高い為、戦闘能力の大幅な改善が見られた。

「防弾装甲も装備し、座席後部に12.7mm機銃から身を守る装甲版を配置し、燃料タンクには防弾性のゴムと自動消火装置を装備してまいります。無線機も自衛隊から提供された無線機を国内技術で出来る限りコピーし、装備しております。」

無線はそのお陰で雑音が一切なしの完全なクリーン状態で送受信が可能であった。無線機の使用可能は、それだけで戦闘力が数段上が

るとも言われており、これの正常化が日本軍にとって大きな助けとなった。そして、米軍機の標準装備機銃の口径は12.7mm。だから、撃墜されてもパイロットの命だけは最低限守ることは出来る。

—呉—

「これが、大和なのか？」

影鎖が改装の進む大和の姿を視察に来ていた。

「戦艦の面影が無いな。」

上部構造は全て取り除かれ、船体の延長などの工事を昼夜休まずに続けられている。平成からも溶接技術などを持つ職人を大量雇用して現地入り。改装を手伝っている。

「あ、影鎖さん。」

大和改装委員長の松田千秋大佐は影鎖の元に来る。

「やあ、松田大佐。戦艦、いや空母『大和』の改装は順調ですか？」

「はい。来年の春ごろには就役できそうです。」

「春か。それまでは我々も進撃を控え、守りに徹している。一刻も早く、この戦力が必要なのだ。」

影鎖は空母大和を見ながら言う。他にも武蔵、信濃、長門と陸奥がそれぞれのドックで改装工事を受けていた。全て、空母化するため

に。

全て、一定の装甲化を行い搭載機は大和級は160機、長門級は100機としている。他にも、重巡の一部が水上機搭載能力を高めた航空巡洋艦に改装を進めている。そして、水上機母艦はカタパルト装備の空母化。軽空母で、一戦機の運用が出来ない空母はカタパルトを装備し始めている。

「日本海軍が、かつて計画していた八八艦隊計画。これが八八と言う訳ではないが、表現するなら八八機動部隊として誕生しようとしているのか。」

「影鎖さんは案外、マニアックな事も知っていますね。」

八八艦隊計画は、日本海軍を語るうえで絶対に必要となる知識だろう。軍縮条約前に、日本海軍が進めていた戦艦8隻、巡洋戦艦8隻の世界に類を見ない超艦隊創設計画。アメリカではダニエル・プランとして、別計画が進行していたが。

「空母を中心とする本格的な機動部隊。これの創設の為に第一航空艦隊は丁度良い実験艦隊です。あれで、我々が空母集中運用方式の基礎を築きあげ、それを下にこれから改装されていく空母と、第一航空艦隊を合わせた新八八機動部隊。これが、日本海軍の空母計画最終段階です。」

松田の事を、影鎖は砲術畑だと思っていた。しかし、実際は間違っていると感じた。空母の力を真珠湾攻撃で逸早く理解を示し、大和などの空母化を裏から支援続けた。豊田などの海軍中心人物を説得し、大和などの空母化の許可を取り付けたのも彼だった。

「影鎖さん、貴方も私の講義に参加しませんか？つと、言っても。貴方方の時代では通用しないと言う事は分かっておりますが。」

松田は、改装委員長で呉に居る間、自らの考案した爆撃回避操艦術の講義を行っていた。特に第四航空戦隊司令時代には爆弾の全弾回避と言う神業を見せ、アメリカ軍を驚かせた。

「確かに、我々の時代では通用しませんな。それにしても、貴方とお話しして、歴史が違うと言う事を実感しました。」

影鎖は最初は松田の事をあまり好きではなかった。彼の尊敬する山本五十六を批判をしたのがその理由であった。しかし、実際に会ってみると、戦艦大和を始め、連合艦隊の象徴を全て空母化すると提案。その許可の取得に奔走した。彼は、これが影鎖たちの出現と、その後の未来を知って自分の考えの間違いに気付いたと語っていた。

そして、彼を驚かせたのが、自らも不沈戦艦の自負していた大和級が航空攻撃で沈められると言う現実であった。大和や武蔵に対する空襲の記録映像を見て、『これでは、幾ら自分でも全弾回避は不可能』と語った。それほどまでに、日本とアメリカの国力の違いを思い知ったのだ。

「現在、アメリカと日本の国力差はおよそ20倍。航空機は50倍近くの生産力の差があります。一機落とす間に20機、30機と次々に増えていきます。それに、民間からちょっとした訓練で軍事用に転用できるパイロットは日本の10倍。国力差を、改めて理解しました。」

松田は横須賀に停泊している護衛艦艦内で見た資料を思い出しながら語る。アメリカの反則的ともいえる圧倒的な量産能力には彼も絶

賛するしかなかった。

「戦争は、新しい時代を迎えようとしているのでしよう。新たな新戦力、航空機と、それをいかに量産し運用できるか。そして、量産できない国、運用できない国に待っているのは滅亡だけ。」

「ある意味では、『世界最終戦論』が一部ではあるが現実になり得て来ているのですよ。」

世界最終戦論。それは、元支那派遣総参謀長の陸軍中將である石原莞爾が唱えた世界統一前に起こる最終戦争を書いた物である。驚くべきことに内容は違うが、ある意味では現在の世に当てはまる理論である。

「そうですね。」

松田は改装工事中の大和を見ながら言う。影鎖も時代の移り変わりを感じている。戦艦はもはや不要となる。世界の海を空母が支配する時代が来る。それを肌で感じて来ている。

（だから、我々は空母を造ったのではないか？時代に取り残された分を埋めようと、世界一の空母を。）

影鎖自身も、日本国産空母建造の推進者の一人である。つと云うか、彼が一番最初に提唱した人物であった。日米合同演習でジョージワシントンの性能に見惚れてしまい、海自の重要役職に就きながら必死で空母建造の為の準備を進めていた。先代防衛大臣も、彼に説得を受け、アメリカと交渉。退役が決定しているエンタープライズの無償提供が成された。

（ま、今となつてはアメリカも日本から手を引いたし。アジアを独立させるチャンスを得た。このチャンスを生かせれば、日本は戦後の軍制限を受けず、行動できるのだから。）

影鎖はアメリカの下請け当然となつた戦後日本からの脱退も考えていた。空母建造の許可が取れなかったとき、本気で反乱も考えたほどだった。

（この戦争の行方がどうなるか、それが戦後に繋がる。負けても、国体護持だけはしたいよ。）

ギルバート諸島 2

―ハワイ―

「ハルゼー提督、艦隊の出撃準備が出来ました。」

「分かったよ、カーニー君。それじゃあ、出撃しようか。日本^{ジャップ}の天皇^{ペラー}の住処へ。」

不服だが、命令ならば実行する。そういう意味では、ハルゼーも血気盛んな優秀な海軍軍人であろう。

ホーネットにはB-25が16機、飛行甲板に並べられている。格納庫には50機の艦載機が存在する。

「今回は、敵の警戒嚴重の中を行くんだ。生還の可能性は低い。でも、0じゃあねえんだ。」

「分かっております。ハルゼー提督。」

―ギルバート諸島―

「やはり、無線連絡が傍受できません。」

数時間前から、傍受できていた無線波が、ぴたりと止む。

「出撃していますね。間違いなく。」

尾上は林原に言う。

「だろうな。航海長、何時頃にこの海域に到着するかね？」

「そうですねえ。ざっと計算して、3日後。10月26日に到着すると思われます。」

「そうか。」

アメリカ艦隊は2つに分かれている。一つは四であるギルバート諸島攻撃艦隊。もう一つは、本命である東京空襲艦隊。その一つが、江田原の読み通り、10月26日にギルバート諸島に到達した。

ーアメリカ艦隊 旗艦 ワスプー

「攻撃隊出撃せよ！！」

ギルバート諸島攻撃艦隊は指揮官にキンケイド少将であった。

「攻撃隊、全機発艦！！」

命令を受けた攻撃隊が次々と飛び立っていく。爆撃機のドーントレス、雷撃機で爆装中のアベンジャー、戦闘機のF4F。

「敵艦隊にも注意しろ。ドーントレス偵察隊を飛ばせ。」

アメリカはドントレスに250?、もしくは500?の爆装をし、2機編隊で幾つかの集団を作って偵察を基本としている。そうすれば、発見確立を大幅に増やすことが出来る。しかし、その半面で爆撃機の多くを偵察機として出してしまう為、発見しても直ぐに攻撃部隊を送るのは困難だと言う点だった。

「格納庫内アベンジャーを雷装で待機させろ。ドントレスは爆装だ。」

ワイルドキャットは護衛隊とは別に上空警戒も任務になる。その為、格納庫内に戦闘機は無い。

「了解しました。」

―東郷―

「レーダーに敵機反応。」

「機数は?」

「99機です。」

「およそ100か。空母の艦型は分かるか?」

「無理です。写真が無いと。」

「分かった。」

尾上は残念だったが、艦橋へマイクを繋げ

「艦長、敵機が99機接近中。」

つと、伝えた。

「やはり、来たか。」

艦橋では、艦長の林原と江田原が居る。

「迎撃を上げろ。日本海軍3空母にも、迎撃機の要請を。」

飛鷹や隼鷹、龍驤にも迎撃の要請を行い、作戦を開始する。

「第一航空艦隊には？」

「必要ないな。」

迎撃命令を受けた零戦43型が次々と発艦していく。

「皮肉だな。この艦にミサイルなどの最新鋭装備があるにも関わらず、迎撃にはレシプロ戦闘機を使用するとは。」

東郷にはミサイルVLSなどの通常空母には装備されない兵器が搭載されている。しかし、実戦で使用されたのはミッドウェー飛行場の破壊の時だけだった。理由を明かされていないが、影鎖が使用を控える様に言ったのがその原因だった。

「ええ。しかし、海将にも考えがあって言ったのでしょ。」

「分からんが、多分そうだろう。」

「艦長、航空管制室で航空隊の管制を一任しました。」

C I Cに居る副長の尾上から報告を受ける。空母には戦闘C I Cの他に自艦の航空機を管制する航空管制室がある。そこから、自分の艦の航空隊に全てに司令を行う場所である。

「迎撃隊、急降下開始。」

敵航空隊の真上に到達した迎撃隊は、機体を急降下させる。液冷エンジンが、十分に加速させてくれた機体が、より一層加速する。

「目標発見、攻撃開始。」

編隊を組んで急降下した迎撃隊は、爆撃機や雷撃機の撃ち上げてくる機銃弾を物ともせずに接近する。

「喰らえ!!」

主翼に搭載されている4門のマウザー20mm機関砲がドーンとレスを捉え、撃墜した。

「おっと、ワイルドキャット暴れ猫が来たぞ。」

ワイルドキャット。普通は山猫と訳すが、彼らは直訳の暴れ猫と略した。

「構わん。全機撃墜しろ。」

戦闘機隊長の坂本中佐は僚機の無事を確認しつつ、全機迎撃の命令を下す。

「今までの零戦と、こっちは違うんだよ。」

急降下で逃走するワイルドキャットを見ながら、零戦パイロットは言う。

「それに、後部には7・7mm機銃に耐える装甲版があるそうだな。でも、こっちは全門は20mmなんじゃ!!」

グラマン鉄工所と仇名される頑丈さも、20mmの前では無力であった。

「こりゃいい。あの空母の資料室にあったマリアナの七面鳥の不名誉を、お前らが受けな。」

「俺たちは七面鳥なんかじゃない。立派な戦闘機乗りだ。」

成す術もなく、ワイルドキャットは撃墜されていき、ドントレスやアベンジャーは酷い状況だった。次々と餌食になり、火を噴きながら墜落していく。

「隊長、残った敵機が撤退を試みますが。」

「構わん。集合を掛けろ。」

アメリカは67機の損失を出した。対し、日本側は12機と圧勝。

しかし、この時。ひしひしと日本本土に魔の手が忍び寄っている事を日本側は誰も気づいていなかった。

帝都再空襲

—軍令部—

「現在、ギルバート諸島で我が海軍とアメリカ軍との戦闘が勃発しております。」

地図上のギルバート諸島に味方艦隊を示す青の旗と、敵を示す赤の旗を立てる。
フラッグ

「海戦の主導権は現在、我々の方にあります。攻撃に來た艦載機を壊滅させ、攻撃に転じようとしております。」

「それで、敵空母の艦型は分かっておるのかね？」

「いえ、残念ながら報告がありません。」

参謀は説明する。

「分かった。それで、山本長官が勝手に編成した独立航空機動部隊の力は？」

軍令部は少なくとも勝手に編成された独立航空機動部隊の事を快く思っていない者が居る。

「はい。この艦隊が居なければ、早期発見による迎撃は出来なかったでしょう。それに、偵察機による索敵もありません。」

「本土に配備されているあの電探の事かね？」

日本本土にもレーダー基地を簡易ながら創設している。まだ、殆どが稼働半ばだが、それでも対空警戒は怠っていなかった。

「はい。あの電探は報告によると我々の偵察機の行動半径よりも長い距離を見張ることが出来るそうです。」

「素晴らしいではないか。それでは、偵察機の方も攻撃に回せる。」

「はい、現在反撃の準備を開始しております。ギルバート諸島にある航空基地より一式陸攻を含む雷撃隊と爆撃隊、零戦と96式戦を装備した部隊が、空母からは第3航空戦隊の艦載機が攻撃に移ろうとしております。」

まだ、96式艦戦を配備している部隊が存在しているのが驚きであった。もはや、旧式化が確定しているのが目に見えている。

―ホーネット―

「はっはっは。まさか、思い違いだったとはな。」

日本からおよそ450？と言うかなり近海に接近したホーネットは艦載機（厳密に言うところではない）であるB-25のエンジンを始動する。

「ハルゼー中将、ご機嫌ですね。」

「カーニー君、俺は今、ビールとステーキで祝いたい気分だよ。」

ハルゼーは自分の危惧していた事が杞憂に終わってご機嫌であった。日本にとって運が悪かったのが、海自のほぼ全兵力を船団護衛に投入してしまった事であった。史実のアメリカの潜水艦はかなりの数の輸送船を沈めており、その教訓から海自は特に対潜戦闘を重視した装備が成されている。

「ドゥーリトルも再び日本^{ジャップ}の首都であるトウキョウを攻撃できるのだ。機嫌が良いだろうよ。」

甲板に並べられている16機のB-25の先頭機、それにドゥーリトル准将が乗機している。爆弾は250?爆弾を4発。

「諸君、おはよう。」

ジミー・ドゥーリトル准将は無線で各機に挨拶をする。

「私は、再びシャングリラに戻ってきた。そして、シャングリラから再び日本の本土攻撃を行えるのだ。」

その時、各機から拍手やら口笛やらが聞こえてくる。

「ありがとう。では、諸君。生きて帰ってこようではないか。また、中国まで飛ばねばならんが、頑張ってくれ。」

この部隊には前回の爆撃に成功した者も一部混じっている。この攻撃にアメリカがどれだけ威信を掛けているかが伺える。

『攻撃部隊は発艦せよ！攻撃部隊は発艦せよ！。』

発艦命令が出た。

「では、行くぞ。」

スロットルを全開まで開き、相棒のホーネットの飛行甲板を滑走する。飛行甲板の艦首が迫る、それを見て、息苦しさを感ずる。

（何度やっても、慣れないな。）

ドゥーリトルはそんな事を思いながら操縦桿を引く。機首が持ち上がり、勢いづいた機体は一瞬沈み込んだが、空へと舞い上がる。しかし、2番機と3番機はミスリ、海面へと突っ込んでしまった。その後はスムーズに続き、合計14機が編隊を組んで東京を目指した。

「2番機と3番機は残念だったが、駆逐艦が救助に向かったのを見たから心配いらない。」

無線でドゥーリトルは僚機らを安心させ

「もうじき見える。心して掛かれ。」

鼓舞する。慣れぬ海面すれすれの低空侵入。日本にレーダーが装備されているとの報告を掴んで、低空侵入を指示させたのだ。

「いいか、海面は気流が乱れる。気を付けろ。」

操縦桿を握りながらドゥーリトルは伝える。准将自ら操縦桿を握るのは珍しい事である。

―軍令部―

「た、大変です。横須賀鎮守府からこちらに向かう飛行編隊ありとの報告です。」

この報告に、全員が騒然とする。

「ま、まあ。本土防空は陸軍の仕事なので、我々には関係ない。」

確かに、当時の本土防空は陸軍の仕事と言うのが認可されている。戦争後半では、陸軍は主に帝都の防空だけに専念するようになったが、これも日本陸海軍の連携の悪さを露呈してしまっている事実なのだ。

「至急、厚木からF―15を飛ばせ。」

影鎖は電話で厚木飛行場に居る空自将官に伝える。

「な、何を勝手なことを!?!」

これを聞いていた海軍将兵は影鎖に詰め寄るが

「そんな防空分担なんかしてないで、侵入した敵機は陸海軍関係な

しに撃ち落とそうと思わないのか!？」

っと、剣幕に押されて引き下がった。

―厚木飛行場―

「2機しか飛ばせん。まだ、滑走路が本格的に機能していない。ようやく現存分のコンクリートが固め終わったところだ。」

南方飛行場の戦力化が優先されてしまい、一番守るべきものの本土が疎かにしてしまったのだ。

「2機では何機か侵入を許してしまいます。」

「現状でそれしか飛ばせん。」

気持ちは分かるが、現実では2機しか飛ばすことが出来ない。仕方なく、空自のトップクラスの腕前を持つ者2名が上がった。

「帝都目指して14機が飛行中。帝都に侵入されました。」

この報告が齎されるのだった。

―帝都―

「うわっ！」

帝都を襲った悲劇。突然飛来した爆撃機が通り魔的に上空から爆弾を投下。戦果確認もせずにそのまま同一方向へ編隊を組んだまま過ぎ去る。

「見えた。」

ようやく追いついたF-15は攻撃できるのは2回だけであることを悟る。上がれるために燃料は本来の4分の1程度。攻撃しながら通過、反転して攻撃、帰還が最も効果的な攻撃方法だと考える。

「追い越しざまに攻撃するぞ。息を合わせろよ。」

スロットルを下げ、800km程度で後ろから近付く。重さを抑えるためにミサイルも積んでいない。

「機長、後方から見慣れない機体が。」

「何？」

次の瞬間、バルカン砲を受け、撃墜される。

「どうした？」

爆発音を聞き、ドゥーリトルが後ろを向く。

「て、敵機です。恐ろしく速い奴です。」

「日本の新型機だ。」

すれ違いざまに3機が撃墜される。

「は、反転してきます。」

F-15は宙返りを決め、反転してもう一撃を掛けようとする。

「これが最後だ。」

バルカン砲は編隊右側を攻撃。2機が破壊されて墜落していくのであった。

―国会―

「今回の責任は東条内閣にある。」

国会では今回の帝都空襲を防げなかった東条内閣に責任があると主張した。

「国民世論も、東条内閣は総辞職せよと言っています。」

東条内閣の立場が危うく、仕方が無く帝都空襲の責任を取って総辞職。次期首相に小磯国昭が就任した。

ギルバート諸島 3

―東郷―

日本の内閣が変わったことは東郷を始めとする艦隊にも届いた。

「どうしましょう？」

尾上が林原に聞く。

「士気の低下がある。報告は控えよう。」

林原は、本土が爆撃されたことによる士気の低下を恐れて海戦中の報告を抑える事にした。まあ、逆の意味で士気が上がる者が居るかもしれないが、そうになると血気盛んになりすぎて怖いと言うのも理由に上がっていた。

「では、反撃しようではないか。」

飛行甲板には、出撃用意を整えた艦載機。128機が待機している。

「発艦はじめ!!」

命令を受け、発艦した攻撃隊は龍驤などの艦載機と合流して飛行を続ける。攻撃は、一度しか行わない計画であり、この攻撃で敵を退却させなくてはならない。

「こちら、隊長機。敵艦隊を発見。敵機のお出迎えを受けている。」
攻撃隊を率いる宮部中佐機は、ワイルド・キャットの迎撃を受けていた。零戦が迎撃に出て行き、何とか損害を抑えたが、12機の攻撃隊を失ってしまう。

「敵空母を確認、急降下爆撃隊は空母を狙え。雷撃隊は散開し、攻撃チャンスを待て。」

攻撃隊は散開し始め、照明弾を撃って合図し合う。

「急降下爆撃隊、これより急降下に入る。」

99式艦爆を駆る急降下爆撃隊は、目標上空から一気に急降下する。

「対空砲火に気を付けろ。」

散開して、各個急降下する部隊も居た。単縦陣で急降下する部隊も居た。しかし、ワспとエンタープライズは次々と回避されてしまい、有効打が無い。

「このままじゃあ、急降下爆撃隊は全弾投下しちまう。」

焦りで、余計に命中率が下がっている。

「き、機長。あの機が体当たりする積りです。」

見ると、火災を起こしている99式艦爆が、引き起こしをやめて、エンタープライズへ更に急降下する。そして、飛行甲板に激突。炎

上する。

「チャンスだ。沈められるかもしれん。」

炎上するエンタープライズを見て、これまで周辺の護衛艦に攻撃していた雷撃の雷装残存機はエンタープライズへ攻撃目標を変える。

「目標、エンタープライズ。」

5機が編隊を組んで向かっていく。

「投下！」

投下された魚雷は、海面に突き刺さるように落ち、海中を進む。

「避けられるな。」

エンタープライズは取り舵を切って全弾回避する。今の所、空母の損害は99式艦爆がエンタープライズに体当たりしたただけであった。幾つかの至近弾で損害は出ているが、直撃による損害はそれだけである。

「くそ。何って操艦技術だ。」

パイロットは悔しがりながら飛び続ける。しかし、エンタープライズは体当たりによって飛行甲板が破壊され、攻撃隊の着発艦が出来ない。戦力としては洋上に浮かぶ対空艦に成り下がった。

―エンタープライズ―

エンタープライズに座上するのは、マレー少将であった。

「本艦は、既に戦闘能力あらず。」

発光信号で各艦に連絡を続けるエンタープライズは、敵機からの攻撃で応急修理しかされていなかった飛行甲板を完全に破壊されてしまった。

「マレー少将。本艦は撤退させ、ワस्पへ移乗して指揮するのが宜しいかと思えます。」

「私もそうしたいさ。しかし、今回の目的はあくまでも敵を引き付ける事。全艦撤退をさせてももういいのだが。」

炎上しながら進み続けるエンタープライズは、史実同様のタフさで、体当たりによる損害を物ともせず航行する。

「それが、一番良い判断だと思われます。しかし、今この場で逃げ帰って宜しいかと言われれば、正直、判断が尽きかねます。」

「分かっている。しかし、戦争は人が行うものだ。撤退も継続も、人の意志が決めるもの。」

マレー少将は艦橋から自分の指揮する艦隊の損害を客観的に集計する。

「駆逐艦は無傷の艦が存在しない。潜水艦が進出できるこの海域で、これ以上の戦闘は危険だ。」

マレー少将は、決心したように言う。

「では。」

「撤退する。今なら、空母は失っていない。この空母が健在な今、反撃は何時でも可能だ。」

マレー少将は、全艦に撤退命令を下命。ハワイ、太平洋艦隊司令部に作戦中止を進言。1時間後、空母の損失を恐れた太平洋艦隊司令部、並びに報告を受けた海軍上層部は撤退を承認。マレー少将指揮下の艦隊はギルバート諸島を離れた。

―ナウル 北東80海里地点―

「結局、ここまで移動したのは無駄だったな。」

南雲中将指揮下の第一航空艦隊はギルバート諸島からアメリカ軍が撤退したのを聞き、艦隊をトラック諸島目指して航行させていた。

「ええ。ただ、これで改めて彼らの力が分かったので良いではありませんか。」

源田は草鹿参謀に言う。

「そうだな。彼らの力は、やはり我々には大きい。使い方次第では、世界を相手にだってできるほどだ。」

「我々が、その世界を相手に戦っているんですよ。」

彼らの座上する赤城は歴戦空母として初戦から戦っている。史実では、ミッドウェー海戦で損失したが、ここでは未だに健在だった。

「確かに。だが、聞いたかね？日本本土爆撃を受けて、首相が変わったて話し。」

「はい。」

第一航空艦隊も、通信科と司令部に居る者は電報で分かっていた。しかし、やはり兵には話されていなかった。

「彼らが来たことで、歴史が変わったのも事実だ。そして、彼らが来たことでアジアにおける我が国の地位が高まり、アジア各国は次々と日本に独立承認を伝えに来ている。」

南方のアジアでは、一部を除き、次々と日本へ代表团が訪日して独立承認を訴えている。東条内閣時代から承認を続け、軍事物資や軍事施設等の使用を条件に次々に独立を始めていった。少しずつ、北里の目指した大東亜共栄圏の復活が実現し始めている。

「左舷より魚雷接近！！！」

しかし、それが突然の報告で司令部は騒然とした。

「か、回避！！！」

しかし、間に合わなかった。赤城は、左舷に4本の魚雷が命中。傾斜を始めた。

―東郷―

「救難信号を受信。赤城が、魚雷攻撃を受けた模様。」

東郷の無線機が救難信号を捉えた。

「場所は？」

林原は急いで確認させる。

「ここから、南南西380°です。」

トラック諸島目指して帰還最中に、しかも近場だった。

「へりを飛ばす。本艦隊も全速にて向かう。」

全艦が南南西目指して全速力で航行する。着いたのは、2時間半後だった。

「本艦も、救助を支援する。」

駆逐艦は魚雷を放った潜水艦狩りに躍起になり、救助が思うように進んでいなかった。

「秋風より、源田航空参謀の姿確認できずとの事。」

「源田中佐が？」

林原は急いで追加の搜索へりを飛ばした。その中の一機には、林原に無理言って乗せてもらった江田原が居た。

「源田参謀、一体どこにいるんですか？」

周辺を探しても、見つけれない。既に、日は落ち始めており、発見は困難を極めた。

「中佐、何処に。」

その時、何やら反射光と思しき光を見る。

「あれは？操縦手、北東へ飛んでくれ。」

「りよ、了解しました。」

操縦手は言われたとおりに北東へ針路をとる。

「見つけた。源田参謀だ。」

救助の遅れによって潮に流されてここまで漂流している兵が数名見受けられた。

「東郷に連絡お願いします。」

―東郷―

「江田原から、源田中佐の居場所が送られてきました。それと、潮の流れで周辺に漂流兵が拡散している可能性があるそうです。」

林原は尾上からの報告を聞くなり、更に追加の搜索ヘリを飛ばし、それと同時に自艦を護衛する護衛艦も搜索へ繰り出した。元々、海自は溺者救助訓練と対潜哨戒を重点的に行う傾向があり、この手に関してはお手の物だった。

トラックから、US-2が3機派遣され、更にガダルカナル周辺を警戒していた海軍の艦艇も到着。赤城は沈んだが、その乗員1694名中1520名が救助された。残念なことに、機関室に直撃を受けた為に、魚雷命中直後に機関室に居たものは全員戦死が確認された。

「この損失、どう思う？」

林原は赤城の損失の大きさを尾上に尋ねる。

「そうですね、史実を考えるとかなり大きいです。しかし、現状を考えると大して問題ではありません。パイロットもほぼ全員が助かりましたし、空母に関しては翔鶴級（アングルドデッキなどを装備している為、厳密な翔鶴級とは異なる）が新たに3隻建造中なので問題ありません。それに、戦艦を空母改装中ですから赤城の損害位はどうとでも成ります。」

「そうか。」

林原はただ、頷く事しか出来なかった。確かに、尾上言うとおり今

の日本に赤城の損害位はどうとも成る。しかし、機動部隊の象徴であった赤城の損失はパイロットにどの様な心境を与えるのだろうか危惧していた。

爆撃計画始動

―東北新幹線本線―

「それで、爆撃は可能なのだな。」

東北新幹線運行のはやぶさE6系のグリーン車を貸し切って防衛大臣の北里を含む、自衛隊幹部が乗っている。

「はい。富嶽の1か月に渡る完熟訓練も終了し、整備と燃料を補給して何時でも飛び立てる状況です。」

なぜ、北里等が飛行機で移動しなかったかということ。中国の空母打撃群に理由があった。日本近海に展開していると言われている空母から突然の攻撃で専用機を撃墜されなければならないからだ。

「まあ、作戦の失敗はありえないでしょう。何と言っても富嶽は100%のステルス性能を発揮しております。我が国のステルス戦闘機『心神』でもあれ程のステルス性は発揮できません。」

2014年に試作機が完成し、2016年に設計流用で戦闘機として生まれた心神は数が殆ど無いが作戦行動をとれる状況にあった。

「大連の防空は手薄との噂もあります。まあ、中国が本気で日本が攻めてくると考えていないのでしょうか。」

自衛隊員らも、まさか自分らが中国を攻撃する事など予想もしていなかった。しかし、北里が中国を攻撃すると言った時には血気盛んな若者は乗り気となった。

「中国の油断は相変わらずだな。国民性から見ても。」

「はい。」

「それにしても、これは快適だな。」

西澤の娯楽政策により、列車内は韓国に習ってシネマカーが存在する。韓国は、全てでは無いが、料金に上乗せしてその日に上映されている映画を見ることが出来る特別車両が存在する。そして、全ての座席にはイタリアのフェラーリ社が採用した小型テレビを各席に設置を習って日本側も採用。この様な娯楽政策は、技術の問題から大勢の人が製作に関わる様になる。その為、これも裏の目的である失業者吸収が実現する事となった。

「はい。総理の手腕には感服いたします。」

他にも、映画製作のセットを特別に作るなどを行っている。法律に一部は触れているが、国内政策によって失業者は劇的に減る事となった。

――十勝秘密航空基地――

地図には記載されない秘密の航空基地。それが、十勝空自基地であった。数か月前には存在しなかった突貫基地。しかし、水戸が提供した資料によって、今では一大飛行場となっている。

「集まっているな。」

三沢基地からヘリコプターで到着した北里防衛大臣は基地に並ぶ富嶽と整列する搭乗員たちを見る。

「諸君らの任務は、大連に居る未だ稼働半ばの原子力空母2隻と港湾施設を完全に破壊する事である。そして、これが自衛隊創隊以来初の対外攻撃である。無論、死者が出るかもしれん。しかし、無駄死にはない。祖国を守るために戦い、死んだのだ。戦死者には靖国へ祀ってやる。」

その時、一人の空自隊員が手を挙げた。

「何だね？」

北里はその手を挙げた空自隊員を見ながら言う。

「では、もし戦死したら。我々は護国の英雄の許に行けるのですね？」

「そうだ。だが、生きて帰ってくれ。まだ、祀るのは早いからな。」

既に、沖縄では中国軍と交戦した陸自と空自の一部に死傷者がでている。その者たちは全員、靖国へ祀られた。

「では、出撃時刻が迫っている。搭乗したまえ。」

北里はそう合図をした。防衛大臣が直接指揮するのは創隊からここまでで初である。

「羽島二佐、聞こえているかね？」

『はい。』

富嶽隊飛行隊長の羽島二等空佐は無線機を介して答える。

「君の望んでいた長距離爆撃機。こんな形だが、確かに君に預けたぞ。」

羽島は自衛隊が日本本土に侵攻された時に備えて長距離爆撃機、少なくとも爆撃を専門に行う爆撃機が必要だと唱えていた。北里も、どうにかしてやりたかったが、憲法の縛りでもどうしても無理であった。

『はい。こんな素晴らしい爆撃機に乗れて自分は感謝・感激です。』

「そうか。頼んだぞ。この作戦、成功しなくては原子力空母も中国海軍に加わり、脅威としてはかなりのレベルに達する。」

『お任せください。必ずや沈めて参ります。』

北里はそれを聞いた後、時計を見る。

「それじゃあ、出撃時刻だ。頼むぞ。」

『了解しました。』

無線が切られ、滑走路に待機していた機体が一斉にエンジンを始動する。流石は6基で45万馬力を出すだけある。もはや轟音と表現できない。

「これが、空に上がれば、静かになるのか。」

このエンジン音は滑走路に反響して発生している。飛び立てば、反響する物が無くなり、驚くべき静粛性を発揮する。

「加えて、100%のステルス性。正に、絶対に捉えられない護衛機要らずの爆撃機。影要塞と呼ぶに相応しいな。」

北里はそんな事を思いながら、離陸していく富嶽を見る。

「現在、高度1万5000。」

富嶽は上昇し、通常の爆撃高度に入った。爆撃照準儀なども未来技術であり、高度3万からでも超精密爆撃が可能な成層圏精密爆撃機とも呼ばれている。エンジンは電磁力推進式。磁場によって空気を勢いよく押し出す推進方式で、これが高度3万での飛行を可能にした。

「素晴らしい。大型機とは思えない操縦性、速度、上昇力。全てにおいて世界中のどの爆撃機よりも勝っている。」

同規模として挙げられるのがB52。しかし、性能差は歴然であった。搭載力では最大78tと富嶽が圧倒。速度も最高時速マッハ1.5を記録。しかもステルス機。操縦桿は大型機ゆえの重さが全く感じられないほど軽い。

「しかも、無線封鎖中に備えての機上には発光信号灯。そして、高性能レーダー。電子関係も充実している。」

機内は完全に与圧され、非常に快適である。下手をすれば、民間機よりも快適である。テレビなども完備され、長距離飛行の暇つぶしにもなる。

「目標へ到達しました。」

眼下には小さく見える2隻の空母と港湾施設。

「了解、爆弾倉開放。」

羽島は直ぐに各機へ通達した。100機編隊だったのが25機の梯団に分かれ、目標爆撃へと移る。

「爆撃進路、固定。爆撃用意。」

コンピュータを操作している爆撃手が指示する。羽島は操縦桿を固定し、副操縦士を見る。

「レーダーに異常なし、敵機が上がってきません。」

副操縦士が羽島の言いたいことを悟って答える。

「だろうな。完璧なステルス機は、電子機器を破った。世界は再び大戦前の哨戒機での敵機発見の時代になるだろう。」

羽島はそう言い、原子力空母を眺める。

「短い、人生だったな。」

物には魂が宿ると言う考えに基づき、空母の魂に敬意を送る。

「爆弾投下。」

その時、爆撃手が言った。1tの対艦攻撃用高性能爆薬を搭載している爆弾が一機当たり78発投下する。

―大連―

「おい、何か聞こえないか？」

そう言って上を見た中国海軍の軍人らは騒然とする。

「小日本っだ!!!」

上空を飛ぶ爆撃機に描かれた日の丸。空自のどの機よりも大きく描かれた日の丸は高度1万5000に居ながらも地上にはくっきりと見えた。そして、そこから投下される爆弾も。

「げ、原子力空母が。」

1tの対艦攻撃用高性能爆弾が原子力空母に直撃。雨の如く降り注いだ爆弾は原子力空母を完全に破壊し、沈没させた。稼働半ばだったのが幸いしてか、原子炉は稼働していなかった。お陰で、放射能汚染は無かった。次に、基地破壊用の250?高性能爆薬を搭載する爆弾が港湾設備に対して降り注いだ。

「に、逃げろ。」

大連港近くの街には逃げ惑う市民で溢れかえった。しかし、爆撃隊は正確に港灣設備を破壊。施設としての機能を完全に奪った。

「本日、日本軍機の攻撃により大連港を攻撃。同基地は完全に破壊されました。なお、この爆撃により、周辺の街では数千人にも上る死傷者が出ている模様です。」

帰りに傍受したラジオと、搭載テレビに映し出された映像を見て、爆撃隊員は

「俺達じゃないな。」

そう言った。

「だな。大半が同じ中国人に逃げる際に踏まれたりなんなりで死んだんだろう。」

中国の国民性は、上海万博などで明らかになっているだろう。中国の国民性である早い者勝ちで、逃げるのに焦って他の人を踏みつけて知らず知らずのうちに殺している事が多々ある。重慶爆撃でも爆撃の死者よりそちらの死者の方が多い。これを爆撃による死者と言いつつ続けているが。

「とにかく、作戦は終了した。自国の損害を半分は正確に、半分は

偽演している連中なんて放っておけ。」

羽島はそう無線で呼びかけ、十勝への飛行を急いだ。この頃、中国空母打撃群が、攻撃位置に到着し、攻撃隊の準備をしている事を日本側はまだ知らなかった。

中国空母打撃群VS日本空母打撃群 前編

―硫黄島沖―

「楊海皇司令^{ヤンカイオウ}、艦載機の出撃準備は整っております。」

艦隊司令官を務める楊中將は、参謀から報告を聞く。

「分かった。出撃を許可する。」

「了解しました。」

攻撃隊がジャンプ台から飛び立っていく。ロシア海軍から購入した瓦良格は購入時の時のスキースキ式飛行甲板をそのまま残している。

「新鋭の李牧が、何処までの性能なのか。」

試験航海の殆ど完了せずに出撃している新鋭空母『李牧』は、今回の作戦参加が危ぶまれた空母であった。まだ、船体の安定性も低い。

「まあ、この艦隊は使い捨てみたいなもの。我々は生きて返ればラッキーって事だ。」

現在、中国には5隻の中型空母が存在する。原子力空母を損失した今、残った3隻が主力である。その内の2隻がこの作戦に投入されていた。

「まあ、残る1隻はこれらの空母とは比べ物にならないほど性能が上だから、十分だろう。」

出撃した航空隊は、二手に分かれて飛行した。1編隊は浜岡へ、もう1編隊は東京を目指している。目標は、北里の読み通りになった。

「そろそろ、敵の迎撃が来る。気を付けろ。」

隊長機が、各機へ注意を促す。

―飛鳥―

「整理も必要ないとは。」

飛行甲板を移動する無人戦闘機F-19。通常は飛行甲板に居る飛行甲板要員が誘導を行うのだが、それすらも必要が無かった。

「格納庫も自動で上がりますし、兵装なども自動で作動する。操艦も。我々は、機械に仕事を奪われる時代が存在すると、今実感しております。」

艦長と言う役目も存在しないロボット空母、飛鳥と奈良から航空機が次々に出撃するところを、艦橋に居る者は見ていた。

「なんだか、空しいんですね。」

「そう思うかね。」

「敵機だ。」

東京を目指す中国艦載機が、日本の戦闘機を捉える。

「各機、散開して東京を目指せ。」

20機の戦闘機が散開して迎撃態勢を取る。もう20機の爆装戦闘機は東京を目指して飛行する。しかし、相手は50機。散開しても殆ど意味が無い。

「迎撃するぞ。」

機体を旋回させ、F-19の真後ろに着く。

「喰らえ。」

ミサイルを発射しようとする。しかし、F-19が突然目の前から消える。

「なっ!」

レーダーを見ても何処にも見当たらない。パイロットは外を見渡すが、何処にも見えない。

「何処に?」

すると、突然真下から機銃を喰らって撃墜された。

「ば、馬鹿な！何時の間に、真下に。」

燃えながら落下していく隊長機。辛うじて爆発をしなかった隊長機のパイロットは、味方機の追尾するF-19を見る。

「ば、馬鹿な。戦闘機が、いや、飛行機があんな機動をするのか？」

突然目の前から消えた理由は、速度を一瞬にして0にし、ストンと落ちたからだ。これも、反重力エンジンを搭載しているからこそ出来る機動であった。

「に、日本は。何処まで、上を行くんだ。」

隊長がそう言った時、愛機が爆発。隊長諸共四散した。ものの10分足らずの戦闘で戦闘機隊は全滅。爆装した戦闘機は

「護衛機が無いな。」

厚木から離陸したF15に捕まっていた。

「一方的だよ。護衛機が無い以上、我々は的だからな。」

F15の迎撃を受け、一機一機が丁寧に機銃で落とされていく。

「爆弾を捨て、降伏するしかない。空母まで、戻れないからな。」

爆撃隊隊長の命令で、全機が武装を投下。無線で、降伏を宣言した。

「こっちも、降伏する必要があるな。」

浜岡に向かった航空隊も、迎撃を受けている。突破した爆撃機は、03式中距離対空ミサイルに迎撃され、突破が完全に出来なかった。

「爆弾を捨て、こっちも降伏する。」

全飛行隊が武装解除。降伏したのは、出撃から僅か30分であった。

――十勝基地――

「中国空母を飛び立った航空機は、全機降伏したようです。」

その瞬間、基地は盛り上がりを見せた。

「そうか。まずは、第一ラウンドが終えたな。」

北里も、艦載機の迎撃と言う第一ラウンドが終えたことを実感した。

「では、第二ラウンドが。中国空母を、殲滅する。」

「了解しました。」

富嶽は、爆装を再び整えられている。

「攻撃地点は、撤退を開始しているであろうから。」

北里は、地図を見ながら検討する。

「そうだな。紀伊半島の南方の海域が良いだろう。」

地図の一点に、赤丸を書く。

「300機からの爆弾の雨を回避することが出来るだろうか。」

出撃数300機。それらが、十勝基地から離陸していった。

中国空母打撃群V S 日本空母打撃群 後編

―瓦良格―

艦隊旗艦の瓦良格に座上する楊中將は、攻撃失敗を知るやすぐさま撤退命令を下していた。

（こんな筈では。何故、日本にあんなにも高性能な戦闘機が存在した？）

楊中將は長官公室にて籠っていた。

（小日本め。シャオリーパーン一体、どんな手段を用いたのだ？）

楊中將は、攻撃成功後に実行する予定だった沖縄航空支援の任務も放棄して、母港の大連目指して遠州灘を全速力で航行していた。

―浜岡原子力発電所―

「東部方面総監部より、対艦ミサイル攻撃命令です。」

朝霞駐屯地、東部方面総監部からの指令で、駿東郡から浜岡原発を守る為に派遣された開発実験団は対艦ミサイルの発射命令を受領した。

「88式地对艦ミサイル、スタンバイ。」

目標に向けてミサイルの発射用意が整えられた。

「撃て!!」

発射された88式地対艦誘導弾改は、GPSで誘導され、航行する中国空母打撃群目指して飛翔する。

―蘭州―

「右舷より、ミサイル接近中!!」

「何!!」

輪形陣を構成している内の一隻、蘭州がミサイルを捉えた。腐ってもイージス艦。それなりの艦隊防衛力を備えている。

「CIWS、艦砲、全力で迎撃せよ!!」

艦橋の前方、後方に一門ずつ装備されているCIWSと100mmの艦砲で迎撃を開始する。

「ロケット弾で弾幕も張るぞ!!」

艦の前部デッキに備えられている4基の18連装ロケット砲がミサイルに向けられる。

「撃て!!」

ミサイルは全部で18発放たれている。目標は特に選別されていなかった。なぜなら、この攻撃は当たればラッキーと言う意味で発せられた命令だからだ。

「6発迎撃しました。しかし、他は次々に突破していきます。」

「1、1発が本艦に！！」

最後の言葉は、ミサイル命中から僅か、2秒ほど前であった。

「うおお！！」

命中したミサイルは、艦内部まで突き刺さって爆発。破孔を開け、そこから海水が浸入する。

「艦長、本艦の戦闘能力喪失。ミサイルは、同級の海口、済南、丹陽に命中。共に戦闘能力を喪失しました。」

「我々の誇る、イージス艦全てを失ったと！？。小日本^{シャオリーベン}。やってくれたな。これで、我々に有効な防空艦は無くなった。」

すぐさま、蘭州の艦長は状況を読み取った。

「遣られるな。確実に、瓦良格と李牧が。」

「そろそろ、敵が見えるころだ。」

十勝基地を出撃した300機の富嶽は編隊を整えて飛行していた。

「機長、レーダーに反応あり。方位、1ー7ー0。距離4万2千に、水上目標を確認。敵艦隊です。」

「了解した。各機に、続けと伝えろ。」

編隊長は機を左に旋回させ、目標を目指して飛行した。

――瓦良格――

「楊中将、敵機がこちらに向かっております。」

「そんな事は分かっている。どうにかならんのか!?!」

「有力な対空艦である蘭州級を全て損失したのです。ソブレメンヌイ級は対空能力がそこそありますが、イージス艦程ではありません。」

「ならば、退艦の用意をしたまえ。あれほどの敵機の爆撃を回避できるとは思えないからな。」

艦橋の外を見ると、富嶽が高度9000辺りを編隊飛行しているのが見える。

「対空ミサイル、発射用意!!」

各艦が、なけなしの対空ミサイルによる攻撃を決断した。

「撃て!!」

「ミサイル攻撃です。」

富嶽に搭乗する乗員は、中国艦隊からミサイルが上がったのを確認した。

「問題ありません、迎撃できます。」

機体の至る所に装備されている20mm4連装電動駆動式自動機関銃が接近するミサイルに向けて弾幕を張る。

「ミサイル、迎撃成功。」

接近するミサイルをいとも簡単に迎撃してしまった。

「よくやった。爆弾倉開放。」

機体下部の爆弾倉が開放される。対艦攻撃用の爆弾を30t装備する富嶽は雨の如く爆弾を投下し始める。

「避けられるもんなら、避けてみやがれ。」

パイロットは、落下していく爆弾を見ながら言った。

―瓦良格―

「回避しろ！！何としても、回避するんだ！！」

しかし、1機あたり30t。300機合計9000tの爆弾が降ってくる。回避すれば、松田千秋大佐も飛び上がるだろう。」

「C I W Sで迎撃しろ。」

「やっていますが、早すぎて目標を追尾できません。」

500?の高性能爆薬を詰められた爆弾が高度9000から投下した時、地上に到達する時点での速度は想像を絶する。高性能なコンピュータを用いても、迎撃は困難だろう。

艦隊に降り注いだ爆弾が、空母や護衛する駆逐艦の甲板に次々に命中。至近弾も大量に浴び、辺りは爆発の水柱の連鎖だった。

「い、ここまで、なのか!？」

瓦良格にも大量の爆弾が命中。飛行甲板に穴を開けたかと思いきれば、そこを通過して格納庫、更には下層でも爆発が発生。艦隊は全滅。浮かんでいるのは、死体と船体の破片のみであった。筈である。

「い、ここは？」

艦隊司令官の楊中将は、ベッドで寝ていた。

「お目覚めですか?楊中将?」

ベッドの横には、スーツ姿の人物と、隣には上校の階級章を付けた

軍人。

「私は、一体？」

「貴方は、日本近海で敵の攻撃を受け、乗艦が撃沈。貴方は洋上に運よく投げ出され、助かっていました。」

「では、ここは？」

「本艦は、中国海軍最新鋭原子力潜水艦『毛沢東』。いや、正確には原子力潜水航空母艦。と表現する方が正しいでしょう。」

「げ、原子力潜水航空母艦？」

「元々、本艦は対米戦での切り札となるべく建造されました。しかし、日本が予想外の行動を起こした為、本艦が予定よりも早く実戦に参加したのです。」

「予想外な事？」

楊は政治には関わらないのを信条している。よって、本戦争が何故、発生しているのか理解していなかった。

「日本本土に戦闘機を進出させ、威嚇行動を起こし、ワザと撃墜させたのです。そして、日本から賠償金を奪い取り、それから良いように調教してアメリカとの切り札にしようと考えていたのです。」

スーツ姿の男は楊中將に説明する。

「それは、分かった。しかし、貴方は何者なのだ？」

「それを説明するには、貴方には外交に強くないといけません。」

「では、何処の国の者なのだ？」

「私は、朝鮮民主主義人民共和国、朝鮮人民海軍所属。まあ、淵蓋^{ヨン・ゲ}蘇文^{ソン・ブン}とでも名乗りましょう。ちなみに、本艦は中国と朝鮮民主主義人民共和国、そしてロシアの技術を盛り込んで建造されております。」

淵蓋蘇文。高句麗末期の宰相・將軍で、強硬策を取り、救援要請に來た新羅の武烈王を監禁し、党項城を占領したことで知られる人物である。

「つまり、私は監禁されるのか？」

「このまま戻っても、貴方は軍法會議に掛けられて死刑でしょう。それなら、いつその事我々の国へお出で下さい。」

「し、しかし。」

「祖国を捨てるお気持ちはお察します。しかし、みすみす殺されに戻るのと、我々の役に立つのとどちらを選びますか？私は、どちらを選んでも、貴方の行動を支持しますが。」

楊中將は考えた。確かに、目の前の男の言うとおり返っても処刑されるのは目に見えている。

「分かった。それで、貴方の国で何をすれば宜しいのですか？」

「本艦は先ほども言った通り潜水航空母艦です。だが、我が国にこの運用実績は無い。。そこで、貴方にこの潜水航空母艦の運用ノウハウを伝授してほしいのです。」

「いいですが、私は空母乗り。潜水艦運用経験はありませんよ。」

「ご心配なく。それは、こちらの陳上校^{チン}が潜水艦指揮は執ります。貴方は空母としての運用ノウハウだけを教えて頂ければ結構です。」

そう言って、医務室から二人は出て言った。残された楊中將は

（一体、あの二人は何者なのだ？そして、この艦は一体？）

疑問が残されただけであった。

終結させるには

―軍令部―

「第一航空戦隊の旗艦、赤城の損失は予想外だが。これも、君たちの空母が賄ってくれるんだよね？影鎖少将。」

会議にて、嫌味を言われる影鎖は無視する。

「それで、次は何の作戦を立てる積りかね？」

そう言われ、影鎖は立ち上がる。そして、地図で場所を示す。

「印度、か。」

「そうです。ここ、印度に攻め込み大英帝国のアジアにおける植民地支配を完全に崩壊させ、濠太刺利を含む残った欧州植民地を完全に独立させます。」

印度を落とせば、アジアにおける欧州の植民地はもはや白人が無敵の神で無い事を再認識させることが出来る。その時こそ、大東亜共栄圏の真の確立の時だった。

「印度は、大英帝国の兵力およそ40%に値する250万人。そして、資源の50%を供給している。これを失った大英帝国の損失は計り知れない。」

上記の通り、大英帝国にとって印度は無くてはならない一大植民地

であった。ここを失うと、アジアが孤立し、欧州の植民地帝国は瓦解。新たな秩序がアジアに到来する事は頭の固い旧勢力の軍人でも理解できるだろう。

「その為には、印度人捕虜の志願者、そしてスバス・チャンドラ・ボース。それとビルマ義勇軍を印度に攻め込ませることが必要です。」

影鎖は説明する。そして、大事な事を思い出した。

「印度には、中国国民党を支援する援蒋ルートが存在しています。これを封鎖すれば、国民党は勢力を失い、共産党が台頭するでしょう。」

「では、中国問題の解決にも繋がると。」

「はい。それを機に、中国共産党と単独講和。中国問題を解決させ、満州国から軍を撤退。これらの兵力でハワイを攻め込めるでしょう。」

「しかし、陸軍がそんな事を許可するでしょうか？」

「一人、許可させることが出来る人間が居ます。」

影鎖は自信満々で言う。

「誰かね？」

「日中戦争の引き金となった満州事変を計画し、東条英機を真っ向から批判。それによって予備役に入れられた元支那派遣参謀総長作

戦部長、石原莞爾元陸軍中将。」

石原莞爾。軍人と言うより軍事思想家として今では有名な人物。彼の代表作である『世界最終戦論』は内容こそ違うが、今の世に恐ろしく合致する理論である。

「彼を、中国に派遣して共産党と単独講和。それによる関東軍の撤退。それによる中国問題の解決。そして、国民党が倒れば、アメリカの援助は無駄になり、国内では厭戦気分が湧く。その時にハワイを占領し、本土を攻撃されれば、国民は講和を選ぶでしょうね。」

「その時こそ、日本の戦争が終わるときかね？」

「そうとは言えないですよ。下手をすれば、ドイツに攻め込む必要が出てくるでしょうから。」

「ドイツに？」

「講和の条件でそれが提示されれば、遣らざるを得ないでしょう。」

事実、イタリアの降伏の時、降伏内容の中にドイツへの宣戦布告が存在していることは既に周知だろう。

「それは、已むを得ないでしょう。しかし、気になる事が一つ。何故、共産党なのかね？」

「共産党でないとならない理由は。共産党がソ連にあまり依存せず、自国でやっていけるからです。国民党がもし、生き残れば。中国はアメリカのものになってしまう。それを、貴方方が望むなら、国民党と講和すればいい。」

「望まないねえ。君たちの歴史を見て、日本がアメリカの事実上の傀儡国家である事は分かっているから。」

「なら、共産党と講和以外することは無い。」

―トラック諸島―

南方問題は解決し、今やガダルカナルを不沈空母として日本陸海軍機が進出。豪州へ向かう輸送船や潜水艦を片っ端から撃沈している。

「豪州での裏工作は順調だそうですよ。」

トラック諸島には、今現在の連合艦隊主力艦艇が全て集結している。ラバウルには三川中将指揮する第8艦隊が進出しており、ガダルカナルへの輸送船団護衛を行っている。航空機は、ブ島経由で艦隊の航空支援と対潜哨戒を行っており、史実では見られない日本海軍の対潜哨戒の嚴重さを見ることが出来る。

そして、豪州には日本情報部のスパイを始め、多数の工作員が潜入している。そして、現地の情報から現地の革命家らを極秘で支援している。

「そうか。我々は恐らくは印度方面に行くことになるだろう。今のうちに、十分な休息を取っておいてくれ。」

林原は尾上に言う。

「分かっております、艦長。印度ですか。やはり、そこを解放する

ですね。」

「影鎖海将の事だ。手は考えてあるだろう。」

「海将なら、確かに手は考えてあるでしょうね。」

―京都府 立命館大学―

「石原国防学研究所長にお会いしたい。」

影鎖は軍令部での説明後、少将の階級を使って海軍機を用意してもらい、京都まで飛んだのだった。そして、石原莞爾が講師として職務を行っている立命館大学を訪れた。

「私に、一体何の用かね？」

現れた石原は机を挟んで反対側に腰掛ける。

「石原中将、貴方をお願いがあつて参りました。」

「軍なら、もう私は戻らん。」

「そこを曲げて、どうか関東軍に戻ってもらいたい。そして、共産党と講和を指導して貰いたいんです。」

影鎖は頭を下げてお願いする。

「共産党と講和？馬鹿を言っではいかんよ。今の共産党に、日本と

講和して何の利点がある？。」

「中国に、莫大な石油が眠っている事をご存知ですか？」

それを聞き、石原は驚く。

「中国に、石油？」

「今現在、日本が石油の目を向けているのは南方。しかし、中国黒竜江省、ハルビン北西約150？に埋蔵量およそ60億バレルの油田が存在します。南北100？、東西14？、深さ1？のこの莫大の石油は今現在の日本が抱える石油問題を一気に解決してくれます。」

「それを、誰かに話したか？」

「いえ。閣下が初です。この情報を貴方がどう生かすもよし。これを手土産に共産党と講和するもよし。大陸に渡ってこの油田を見つけるもよし。どちらにせよ、貴方が関東軍に戻らない限り、実現できませんが。」

「それを、私が現場復帰する交渉の切り札に使うとはな。君は、外交官の方が向いているよ。」

「でしょうか？」

「それを聞くと、確かに関東軍に戻る以外に石油の採掘をする事が出来んな。」

「ええ。そのついでに共産党と講和。兵を、満州国から少しずつで

構わないので撤退して頂きたい。」

「なら、完全撤退する前に石油を可能な限り採掘せんとな。」

「そうなりますね。まあ、その辺は中国大陆で自由に。我々海軍は、今は印度方面に目を向けていますので。」

影鎖は立ち上がり、窓から外を見る。

「京都は歴史ある街です。そして、ここもアメリカの空襲の標的になる。」

京都は20回以上の空襲を受け、約300人が死亡している。

「そうならない為に、一刻も早く中国問題を解決し、アメリカとも講和を結びに行かなくてはなりません。」

影鎖は、窓から見える五重塔を背景に言った。

ソロモン航空戦

「ガダルカナル」

「今日も、出撃ですか。」

ガダルカナルでは、連日の様に陸攻と戦闘機がポートモレスビーなどの飛行場と、オーストラリアへ向かう輸送船や潜水艦を攻撃し、戦果を挙げている。

「軍令部からは、航空隊の一部をビルマ方面へ移動させ始めているし、主戦場は南方から南西へ移ったか。」

川口少将は島崎一佐の方を向いて言った。

「ええ。恐らく今度の作戦の目標はインドでしょう。シンガポールには自由インド仮政府なる新インド政府が設立されました。これは、我々の知る限りではもう少し後に設立される予定なので。」

「では、本土の関心はインドの方へ移ったと？」

「はい。それに、インドが解放されればイギリスはアジアの植民地帝国の放棄を意味する。豪州も、そうなれば独立以外の道が断たれるのだ。」

「では、インドが解放されればこの航空攻撃も終了と。」

「ええ。アメリカを本格的に攻撃する事となります。」

攻撃隊は、一直線にポートモレスビーの飛行場を目指して飛行していた。ポートモレスビーは最近になってイギリス最新鋭機のスピットファイアーが配備され始め、それと同時に双発爆撃機や四発爆撃機が増派され、航空戦力としてはかなりの規模になっている。

「いいか！、先導隊の目標は滑走路だ。それを破壊次第、敵航空機を攻撃しろ。戦闘機隊は敵機が上がれば迎撃、上がらなければ機銃掃射で掩護だ。」

先導する一式陸攻4機の内隊長機から命令が出る。

「各機、これより電探探知を避けて低空で侵入する。遅れるな。」

隊長機が降下を始め、次々に後続機が続く。今回は完全な奇襲によって敵航空戦力を壊滅させたかった為、ばら撒き爆撃よりも低空での精密爆撃を選んだ。

「新型エンジンの調子も良好。」

各機には、平成から齎された技術をフルに活用してエンジンをチューンし、しかも平成の高性能ガソリンも満載している。性能的には2割ほど増しているのだ。

「こちら隊長機。後続機、聞こえるか？」

『はい。聞こえます。』

「もうじき見えてくる。無線の傍受を受けない為、これ以上の連絡

は敵地上空で行う。上手く追いかけてこいよ。」

そう言って各機が無線封鎖を行う。後は、隊長機が感知している敵のレーダー波と無線波を頼りに誘導されるだけとなった。

ーポートモレスビー 英国空軍飛行場ー

「ジャップの奴、最近はオーストラリアへ向かう輸送船や潜水艦を沈めているらしいぜ。」

「ああ。お陰で、今月は食料不足に悩まされているらしい。」

飛行場内でも、輸送船や潜水艦の被害は聞いていた。

「このままじゃあ、オーストラリアが物資不足になっちまうよ。」

「そうだな。お！、あれは新しい増派か？」

一人が編隊を組んで低空を飛ぶ航空隊を見つける。

「おかしいな。そんな予定、聞いてないぞ。」

すると、上空から一機が急降下してくる。

「あれは、増派じゃない！！敵だ！！」

しかし、急降下したゼロ戦43型の機銃掃射を受け、死亡する。

「高木、到着早々整備兵数人を殺ったぞ。」

「黒田、整備兵なんか殺ってどうする積りだよ。」

「うるせえ。敵は敵だ。」

日本軍としては珍しい2機編隊を組んで飛ぶパイロットは互いに入れ替わって後ろの機は後方を警戒し、前方の機は地上を機銃掃射を繰り返している。

「ラバウルから転進した甲斐があつたな。」

「だな。」

2人は次々と地上の機を破壊し、攻撃隊のルートを瞬く間に確保してしまった。

「だが、ラバウルからここまで。そして攻撃終了後はガダルカナルまで行かんといかん。燃料に気を配らんと。」

「あれは？今日来る予定のパイロットか。」

爆装した一式陸攻が到着し、敵地上空で対地攻撃を行うゼロ戦2機を見つける。それを掩護するために数機のゼロ戦が編隊から外れ、掩護に向かう。

「お陰で、滑走路に余裕で投下できるぞ。」

爆撃照準儀を覗き、滑走路を捉える。

「投下!!」

爆弾は滑走路に上手く命中し、穴を開ける。

「後続機、地上機を破壊しろ。戦闘機隊はそれを掩護。」

命令を実行に移し、攻撃した。

「作戦成功だな。」

ソロモン海上空を飛ぶ攻撃隊は数機が対空砲火で撃墜されたが、損害はほぼ皆無に等しい。敵機を100機近く葬り、殆どを損傷させることが出来た。

「高木、俺はこの戦争が終わったら郷里で結婚するんだ。」

「黒田、逸る気持ちは分かるが、未来から来た日本人って奴の話ではそれは死亡フラグって奴だぞ。」

「大丈夫だ。この青空の何処に、敵機が居るって言うんだ?」

すると、黒田機が機銃を受けて火を噴き、墜落していく。

「黒田！！」

黒田機は空中で四散。胴体は海面に突っ込んだ。他は粉々になって海へ落ちて行った。

「何処だ？。」

高木は周囲を探す。すると、下から一機が急上昇して過ぎ去った。

「あれか。あれが、黒田を」

高木は愛機を上昇させ、追撃する。

「ほう、追ってくるか。」

黒田を撃墜した英国人パイロット『ジェームズ・ハロルド』少佐は愛機のP51Bを反転させ、反航戦を挑む。

「この機に上昇戦を挑む勇氣だけは誉めてやろう。」

相対するP51Bとゼロ戦43型。

「よくも、黒田を。黒田を。よくも！！」

装備するマウザー20mm機関砲を発射する。しかし、P51もブローニングM2を発射した。

「ぎゃああ!!」

有効射程が僅かに長いブローニングM2がゼロ戦に先に命中。高木は銃弾を受け、血を流す。

「私の愛機に、当たったのか。」

P51も、20mmを5発だが受けた。致命傷にはならなかったが、燃料を噴き、戦闘続行は不可能な為、離脱した。

―ガダルカナル―

「おい、被弾してるぞ!!。」

高木の機が煙を吐きながらふらついて接近しているのを見張り兵が見つけ、警報を出す。

「急げ急げ!!」

即席の救護車や消防車が滑走路脇に待機する。滑走路脇に駐機されている航空機も、出来る限り奥にしまい込んで、滑走路を広げる。

「滑走路の先に防護ネットを張れ!!急げ!!」

本来は空母の緊急着艦時に使用される防護ネットを滑走路先両端にある木に括り付け、固定する。

「黒田。必ず、仇を取るからな。それまでは、俺は死ねん。」

血で目の前が真っ赤になっている。視界が出血でボヤける。手が震える。それでも、執念で車輪を地面に接地させた。

「止まってくれ。」

ブレーキをかけ、減速していく。しかし、滑走路内で止まる様子は無い。

「うわ!?!」

突然、滑走路先端でガクンっと、機体が静止する。高木はベルトを締めていなかったら衝撃で前方へ投げ出され、運が悪ければ未だに回転中のプロペラでひき肉になっていただろう。

機体は、前がプロペラの為に防護ネットを突き破ったが、主翼などが包り、上手く静止させた。防護ネットを張らなければ、機体はオーバーランして茂みに突っ込み、パイロット諸共炎上していた。

「黒田。俺は、帰った。お前の仇を取るまで、俺は生きる。それまで、靖国へ行くのは待っていてくれ。」

高木はすぐに救急治療室へ入った。ガダルカナルは現地入りした陸自隊員の尽力によって最前線ながらも医療設備などが整えられており、内地程では無いが十分な治療を受けられるようになっていた。

インド洋作戦 『アジアの盾作戦』

―東郷―

「マラッカ海峡、まもなく通過。」

江田原が艦橋にて報告する。

「もうじき、インド洋へ入るか。今度の作戦、どうみるかね？ 副長。」

「現時点では何とも言えませんが、恐らくは軍令部の読み通りにアジアに欧州の白人帝国を完全に崩壊させるには絶好の作戦だと思います。」

「そうか。後方の機動部隊は？」

「赤城が沈んでしまい、見栄えは少し悪くなりましたが、戦意の低下は見られませんでした。」

「そうか。しかし、戦意が高いとはいえ機動部隊の象徴を失ったのだ。何らかの影響は覚悟せねばな。」

「はい。」

独立航空機動部隊は先行してインド洋に入り、敵情などを偵察。後に合流して共同でチッタゴンなどの英印軍飛行場を破壊。アラビア海に進出して港湾設備やボンベイの空襲を行う予定だった。

「陸軍も直に動き始めます。陸海軍共同作戦としてはこれ以上の大規模作戦はありません。」

尾上は双眼鏡でインド洋を眺める。

「夜間に突入。敵影は無し。完全な奇襲作戦ですね。」

「だろうな。」

双眼鏡から眼を外し、林原の方を見る。

「それでは艦長。私はC I Cに。」

「頼むぞ。」

そう言い、尾上は艦橋を後にする。

数時間後、チッタゴン飛行場

「なあ、聞いたか？ついさっきの放送。」

「ああ。ボースの仮政府設立だろう。」

日本陸海軍作戦開始の合図とも知らずに、英印軍は搭乗員待機所に集まっていた。

「俺は嫌だぜ。同胞の頭上なんか爆撃や機銃掃射するの。」

「俺もだよ。」

英印空軍はボースの仮政府設立の放送を聞き、士気の低下が見られた。

「なあ、植民地政府に従う俺達と、自治政府設立して独立を訴えるボースの政府。一体、どっちが正しいのだろうか？」

「さあな。最終的に、やった者勝ちだ。この戦いに勝利した方が、正しいって事だよ。」

「じゃあ、同胞の頭上に爆撃や機銃掃射できるってのかよ。」

「そ、そうは言っていない。」

「もうじき、チッタゴン飛行場だ。」

機動部隊を飛び立っていた航空隊は陸軍の進撃を確認し、攻撃に移る。

「他の飛行場攻撃隊も突撃命令を受信。」

「よし。母艦に打電『我奇襲ニ成功セリ。トラ・トラ・トラ。』だ。」

「了解。」

無線手が母艦にモールスで奇襲成功電を打った。

―東郷―

「攻撃隊より受電。奇襲成功です。」

「そうか。頼むぞ。」

―チッタゴン飛行場―

「目標、駐機中の戦闘機。」

彗星艦爆が爆弾によって駐機されているハリケーンを破壊する。

「目標は駐機中の航空機と司令部や管制塔だ。滑走路は破壊するな。」

「了解。」

滑走路は、占領した後、現地軍の飛行場として利用する予定となっている。

「陸軍が飛行場攻撃を開始。」

見ると、飛行場に幾多も火柱が上る。

「砲撃だな。着弾観測をしてやれ。」

「了解。」

―砲兵陣地―

「攻撃中の航空隊より、着弾修正電。」

「分かった。」

航空隊から送られた修正を頼りに、目標を再補正する。

「撃て!!」

―チッタゴン飛行場―

「くそ。何てことだ。」

滑走路へと飛び出してきた英印軍は応戦するイギリス軍の事を放っておいて茂みに逃げ出す。

「結局、俺たちは日本とボースの政府軍を攻撃する事なんか出来ないのか。」

「どうせならイギリス軍に挑んでみないか？」

「そりゃあ良い。俺達を人間と見ていないんだ。その人外に反乱を

起こされた連中の顔を拝んでみようぜ。」

そう言って武器庫まで走り、英印軍はステン短機関銃やブレン軽機関銃、リーエンフィールドなどで武装し、背後から攻撃した。

「俺たちをさんざんこき使いやがって。」

怒りに任せ、銃を撃った。戦闘はこの後も続く事となり、2時間に及ぶ戦闘でイギリスは弾薬を欠乏、降伏した。

―東郷―

「攻撃隊が帰還してきました。」

攻撃隊は見る限り被弾機は少なく、戦闘に支障は無さそうだった。

「チッタゴンではインド軍の反乱でイギリス軍を攻撃したそうです。」

「そうか。」

甲板では、攻撃隊が次々に着艦してきている。

「作戦は、完璧の様だな。」

「はい。」

「分かった。被弾している航空機を格納庫で応急修理させろ。我々と機動部隊から分離した龍驤、飛鷹、隼鷹とその護衛隊でボンベイや港湾施設を破壊しに行くのだからな。」

加賀などの第一航空艦隊はこの後も陸軍の掩護を続ける事となる。その他はボンベイと港湾施設を攻撃するため、アラビア海へ入る事となった。

セイロン島空襲作戦 『スリランカの嵐作戦』

―東郷―

「いいか、通過様にやるぞ。」

セイロン島、トリンコマリ英海軍基地を通過様に空襲する為、飛行甲板に艦載機が並べられた。

「飛行場を含め、攻撃目標は軍事施設のみ。トリンコマリには駆逐艦などの小型艦船しか存在しないから存分に破壊しろ。」

林原は指揮官訓示で搭乗員たちに伝える。

「では、出撃。思う存分、破壊しつくせ。」

もはや、林原は平成の自衛官を捨てた。戦争が、昭和に来た自衛官を変えていったのだ。

―セイロン島 トリンコマリ英海軍基地―

「日本軍が未だに、侵攻してきた陸軍を支援してベンガル湾に留まっている。」

トリンコマリ英海軍基地所属の駆逐艦は、せめて一矢報いれるかもしれないとして駆逐艦の出港準備をしていた。しかし、何分突然の攻撃で弾薬などの積み込みが出来ておらず、作業は手間取っていた。

「突然の攻撃でしたので、全く準備が出来ておりません。兵らも、ここは楽園だと勘違いしていて、士気も低いです。」

「構わん。出せる戦闘艦は全て出す。英印軍も一部で反乱が起き、我々の陸軍は大混乱に陥っているのだ。」

日本軍やビルマ義勇軍、インド国民軍がインドに侵攻したと聞き、英印軍はイギリス軍へ反乱を各地で起こし始め、インド国内が一気に独立へと向かっているのだった。

「か、艦長、あれを!？」

「な!？」

見ると、日の丸を付けた航空機が艦長の目に飛び込む。

「馬鹿な!!!今、日本軍は侵攻してきた部隊の支援をしている筈。どうして、こんな所に?」

「こちら、隊長機。目標上空へ到達。爆撃完了後、一気に離脱し、母艦を目指す。」

宮部中佐が、各機へ指示を出す。攻撃は一回きり。この一撃で、英国海軍基地を無力化しなくては、後は無い。

「爆撃開始。」

水平爆撃隊は港湾設備へ、急降下爆撃隊は敵艦船へ一斉に爆弾を投下する。

「沈めなくてもいい。戦闘不能にするんだ。」

駆逐艦など、敵艦船は沈める必要が無かった。ただ、出撃できないような損害を負わせれば十分だった。

「目標へ命中。炎上しています。」

爆撃手の言葉を聞き、操縦桿を握る宮部は安堵する。

「電信員、母艦へ打電。『誘導電波の発信を要請する。』と。」

―東郷―

「誘導電波の発信要請です。」

尾上がC I Cから艦内マイクで艦橋へ連絡する。

「誘導電波か。少々危険だな。」

誘導電波は味方だけでなく、敵まで引き寄せる事になる。万が一、敵機が離陸していたら、攻撃を受ける事になる。

「艦長、我々の防空能力をお忘れですか？我々はイージス艦を8隻も従え、おまけに本艦自身もイージスシステムを搭載しています。そして、各艦の戦闘情報統合システムや連携システムをフル活用す

れば敵機など、恐れる事はありません。」

江田原の言うとおり、独立航空機動部隊に所属する艦は全てイージス艦。その能力をフル活用すれば音速機の撃墜可能な装備を持つ各艦にとって、この時代の航空機の撃墜は蚊を殺すよりも簡単だった。

「分かった。誘導電波を出す。」

航空管制室に誘導電波を出すように指示し、林原は各艦の対空警戒を最大レベルまで引き上げた。

「誘導電波確認、もう少しですね。案外、近くまで来ていた様です。」

航法士が宮部へ言う。

「そうか。」

―東郷―

「不味いな。」

CICに居る尾上の目に、日本の攻撃隊の後方に存在する光点を確認する。

「艦橋へ、日本編隊後方にイギリス空軍機。機種はスピットファイ

ア、ハリケーン、モスキートにランカスターの戦爆連合100。」

「各艦に伝達。スタンダードミサイル改を放つ。」

林原は直ぐに各艦に命令を伝えた。

「一斉対空ミサイル発射。久しぶりに見ますよ。艦長。」

江田原は窓に見えるイージス艦各艦を注視する。

「私もだよ。航海長。」

各艦がロックしたと言う報告が届き。

「発射。」

「各機、日本軍機の後へ付いていけ。」

ランカスターは漸くインドの方にも回ってきたイギリス空軍の最新鋭4発重爆である。ハリフォックスしか装備していなかったインド方面空軍にとって1942年末になってようやく配備されたことに感謝している。

「下方に居るボーフォートから、敵艦から発煙があったそうです。」

「発煙？」

「機長、あれを。」

副操縦士が指さした先を見ると。

「あれは？」

スタンダードミサイル改が各機へ向かって飛翔している所だった。

「まずい！！回避だ！！」

直ぐに攻撃だと分かった機長は機体を旋回させようとするが、大型機は直ぐに操縦が効くわけではなく、スタンダードミサイル改で撃墜された。他の機も、同様に攻撃を受けて撃墜された。

「遣られたな。」

レーダーに映らない海面ギリギリを飛行するボーフォートは落下してくる破片を見て、爆撃隊が遣られたと悟った。

「こうなったら、俺達だけでも遣らなければならない。」

低空を侵入するボーフォートは気づかれずに侵入していった。

―はっせ―

「不味いな。敵機が低空で侵入している。」

レーダーに漸く映ったはつせは、ボーフォートの低空侵入に漸く気付く。

「撃墜するぞ。」

はつせは、タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦として日本へ貸与された時に改名した艦だった。そして、貸与に当ってイージスシステムの更新などを行った。そして、前方主砲を127mm連射砲に換装している。

「撃ち方、用意。」

ボーフォートを捉えたはつせは、127mm連射砲の発射用意に入る。

「撃ち方はじめ。」

イージスシステムで捉えた敵機を次々に撃墜する。

「残存機、減少中。」

光点が次々に消えていく。

「敵機、死角の腹へ向けて2機が侵入。魚雷を投下できる状態です。」

「何!？」

予想外だった。まさか、敵機がこちらに狙いを変えるなんて。

「よくも、仲間を。」

魚雷を各機1本、計2本がはつせの艦腹へ向かって航行する。

「すれ違いざまにフランク스로撃墜しろ。面舵一杯!!!。」

しかし、魚雷2本中1本が艦の中央に命中した。

「不味い!!!そこは、ミサイルセルが。」

艦長の予想通り、次の瞬間には残ったミサイルに誘爆。中央で大爆発を起こし、機関も停止する。

「機関、停止しました。火災も発生。電気系統喪失でスプリンクラー作動しません。水圧も低下し、自力での消火は不可能。」

「総員、退艦。」

艦齢40近い為、喪失しても大して損害にはならない。イージス艦と言えど、沈む事ははっきりした事だけでも収穫とした。

「艦長、残るなんて馬鹿な考えだけはやめて下さい。」

「分かっている。私も退艦するよ。」

船乗りとして、本音を言えば艦長は艦に残りたかった。しかし、旧軍の学びから、現在では全員退艦を徹底している。その為、船が沈む様な事があっても、全員退艦を行うのが基本となっている。

―東郷―

「はつせが、爆沈しました。現在、みかさが救助作業中。」

艦載機の収容を終えた東郷の艦橋に衝撃の報告が届く。

「はつせが、爆沈だど？」

「はい。これで、イージス艦も万能でない事がハッキリしました。」

尾上は、林原に報告する。

「皮肉だな。対空能力は世界一のイージス艦が、蚊も当然と侮っていた第二次大戦機に撃沈されるとは。」

「ええ。私も、認識が甘かったと反省しております。」

「いいよ、航海長。指示したのは私だ。副長、みかさ艦長に通信回路を開いてくれ。」

「分かりました。」

通信を繋ぎ、みかさ艦長を出す。

「青木艦長。はつせを、艦容を分からん程度に破壊しろ。」

『え？どうしてです？』

「残したら、我々の未来に無用な誤解を招くかもしれん。しかも、艦名は『はつせ』と書いてしまっている。残したら、色々と政治問題にもなりかねない。」

『りよ、了解しました。』

—みかさ—

「主砲、発射用意。」

主砲をはつせに向ける。

「撃ち方はじめ。」

連射砲を撃ち続け、はつせに残っている弾薬へ上手く引火させ、艦全体図が分からない程度にまで破壊することが出来た。

「総員、はつせに敬礼。」

甲板に並ぶ、助けられたはつせ乗員を含め、全員が沈み行くはつせに敬礼を送る。

―東郷―

「もうじき、アラビア海に入る。それでは、本作戦最大の要、ボンベイ空襲を完了させようではないか。」

林原はアラビア海へ進攻したことを実感するのだった。日本海軍にとって、未知の領域へ入った事を感じるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1123t/>

世界最強の航空機動部隊

2011年11月11日12時50分発行